り。理智は共通觀念(notions communes)を以て働く、換言すれば吾人の理性が根本的觀念即ち原理(fundamenta rationis)として用ふるものを以て働く。謂ふところ根本的觀念に屬するものは例へば無よりは何物をも生ぜずといふ因果の關係を言ひ表す原理の如きものにして、此等の共通觀念は前にスピノーザが差別見に屬すと云ひし抽象的概念とは全く相異るものなり。

スピノーザの推理的知識及び直觀的知識を說くや、其の兩者の差別甚だ明瞭ならずして或は殆んどそが區別を立て難き樣なる語をさへ用ゐたる所あり。されど大躰より云へば差別見、推理智及び直觀智の三段を以て有限の樣狀(natura naturata particularis)無限の樣狀(natura naturata generalis)及び本躰(natura naturans)の三段に應ずるものと見て不可なかるべし。

〔三八〕 吾人は須からく差別に束縛されたる妄見を脫し進みて我が知性を明かにし其の活動を全うする狀態に進みゆくべし。吾人の道德と名づくるものこゝに存す。德の根本とも稱すべきは吾人の心力の勇壯なる(fortitudo)に在り、言ひ換ふれば吾人の心が他に制御せられずして充分に其の活動を現ずる所の狀態に在り而して吾人の心が其の如く充分の力を具へて活動する、他言もて云へば所謂自衞の性を全うする所は是れ喜悅を覺ゆるの狀態なり。一切の嫉妬、恐怖、憎惡等の情念は皆吾人に苦痛を與ふるもの、凡べて吾人が心の活動の充分に伸長せざるに原由するものにして賢人は此れ等の情念によりて其の心を攪亂されず。吾人の精神勇壯に活動して知性明瞭なる觀念を以て働く時は他を嫉妬し、恐怖し、憎惡する念慮は絕えてなく却りて他を益し共に其の性を全うせんの志を厚くし來たる。何となればこゝに至りては自他を共に全くせしむるが最も自由に吾人の本性を開發するの道なりと認むればなり。吾人が嫉妬、恐怖、憎惡、諍鬪等の諸情に攪擾せらるゝは畢竟ずるに吾人の心が未だ自ら充分に其の活動を進むる能はずして他に制限束縛せられ居る狀態に在ればなり。吾人は須からく斯くの如き奴隸的狀態(servitus.)を脫して自主自由の境に入らざるべからず。斯くスピノーザが吾人の煩惱に溺さるゝ狀態を排き而して吾人は之れを擺脫して自由自在なるべしと說ける所是れ彼れが論に於ける有名なる一段なり。

斯くの斯くスピノーザは吾人の煩惱を拂ひ去りて心の靜平なる狀態に到ること

を重んせり。是れ即ち彼れの說に於ける寂靜主義の要素なり。されど彼れは決して禁欲主義を唱へたる者にあらず唯吾人の妄見により種々の煩惱に心を擾がしそれに羈さるゝ狀態を脫却するの必要を說けるなり。如何にせば其の如く煩惱を脫して寂靜の境地に到るを得べき。彼れ說いて曰はく、吾人は凡べての事物の起り來たる永恒の理を發見することによりて諸多の妄執を脫却し得べし、凡そ妄想は事物の起こり來たる原因を明らむるによりて夢の覺むるが如くに覺め果つるものなり。吾人の煩惱を起こすは畢竟するに事物の當に然かあるべき筈なるを知らず之れに種々の願望を繫けて自己の心を擾がせばなり。若し其が本躰に於ける永恒の相に於いて萬物を觀ば凡べての事と物とは皆神性の必然により て來たるものなるを悟るに至るべくそれに反抗して種々たる妄想を起こす心は自然に消滅し了すべし。

而して斯くの如く煩惱を靜め妄執を去るは唯乾燥無味なる理窟を考ふるとによりて成さるゝにあらず。情を靜めんには須からく他の情を用ふべし。而して萬物永恒の理を看ることに於いて一種の深奧なる情の伴ひ來たるあり、何となれば斯く萬物の本躰を觀ることは取りも直さず我が本性を全うするものにして、其の性を全うすれば吾人はおのづから大喜悅を覺ゆればなり。而して此の喜悅は是れ萬物の本躰即ち神を知ることによりて來たるものなれば此の喜悅の原因として神を觀るに至るは是れ即ち神に對して愛を覺え來たるなり。かくして吾人が一切の事物は神の必然の性より出で來たるを知るは己に乾燥無味なる智識にあらずして一種の言ひ難き喜悅を以て充たされたるもの而して此の大喜悅の心あるにより吾人は自然に一切の煩惱を忘れ果てゝ神明に和合するを得るなり。此の心是れ即ちスピノーザが神に對する知性の愛 (amor intellectualis Dei) と名づけたるもの也。

神を知るといふは全き觀念を有するの謂なり、而して全き觀念は無限智 (intellectus infinitus) を成すものとして永恒のものなるを以て、吾人も亦其の如き觀念を有することに於いて永恒なることを得。但しこゝに永恒と謂ふは一個人が個人としての存在を時間上無限に繼續するの謂ひに非ず。スピノーザに取りては個人の獨立的存在と云ひ或は時間上の繼續といふが如きは畢竟するに吾人の差別見の

假造したる者に外ならず。蓋し吾人は個人としては有限樣の一なり、大海の一波瀾に外ならず、唯全き觀念を得萬物の本躰(神)を知識することに於ひて時間を脱したる永恒の存在を得へきのみ。

〔二九〕 以上叙述し來たりたるスピノーザが哲學を顧みれば明かに三種の異なりたる要素あるを認むべし。第一は自然論風の思想にしてこはホッブス等に得たる所多かるべく而して此の細要は重に彼れか心理及び國家の論に於いて發見せらる。第二はデカルトに淵源せる主知論(intellectualism)の要素にして此等は主として智識論及び形而上論に於いて認むることを得。第三は神秘論にしてこは彼れか元來の宗教的傾向に基けるもの其の神に對する理智の愛を說ける所の如き最も明かに此の方面を表現せるものなり。但し此の神秘的方面はスピノーザよりも正統にデカルト學派の立脚地に立りてと云はるべきマルブランシに於いても見ることを得れどスピノーザに於いてはマルブランシよりも一層明らかなるものとして現れたり。而して此等の相異なる要素は全く融和せられたりとまでは云ふを得ざるも兎に角それらが一種の結合を成せる所は是れスピノーザが哲學に於いて特殊の面目を成せる所なりと云ふべし。スピノーザの哲學に於いてはデカルト及ひホッブスの共に取りたる機械說亦一の主要なる要素として存在す。而して此の機械說の要素は彼れに於いては凡べての物の實在を一本體に歸する萬有神說と相結合せり。

スピノーザの哲學は其の根本的觀念としたる所を大膽に論理的に推究して其の當に到るべき所に到りたるものと見ゆれど、また其が種々なる要素の連結せる所に於いては明かに論理的關係の看取し得べからざる點あり。彼れの哲學組織は一見恰も刻み上げたる水晶體の如くなれども、其の中には尙ほ說明を要する難點と見らるべきものゝ存在すること啻一二に止まらず。第一には先にも云へる如く彼れが主知論の要素と自然論の要素との調和成就せず、故に彼れが其大著『エテイカ』の初の二卷に於いて說ける所と、後の部分に在りて專ら心理的說明を事とせる所とには相合せざる點あり。次ぎには彼れが謂ふ所なる原因てふ觀念に於いて理由即ち論理上の關係と生因即ち生起上の關係とが混同せられたり。彼れは一面に於いては本體永恒の實相は時間上に在るものならずと云ひながらまた他方

に於いては其が働きて萬物を生ずるかのごとく說ける所ありて其の關係明かならず。次ぎにはスピノーザは善惡美醜の價値の差別は凡べて吾人の差別見に屬するものなりと云ひながら尙ほ宗敎及び道德論の上に立つ時に於いては神そのものに關し又は彼れを觀る上に關して價値の觀念を持ち來たれる所あり。彼れが心理學上及び智識論上情緖を說く所と彼れが宗敎觀に於いて神に對する智性の愛を說く所の如きは强ひて牽き合はせたるが如きの趣なき能はず。終りにスピノーザの哲學に於ける最も困難なる點として哲學史家の間にも其の說明に異論あるは其の謂ふ本體(Substantia)は一なるものにして其を限定する性質の附し難きもの、唯圓滿無限の存在者なりといふの外に言狀すべからざるものと說きながらそれに數限りなき性の存在するかの如く說けるは如何、といふと是れなり。彼れが神に廣がり及び思ひといふ性ありと云ふは是れ正しく彼れに或種類の限定を與ふるにはあらざる乎。それ等の無數の性及び樣と唯一無限永恒なる本體とは如何に相和すべきものなるか。此の點スピノーザの哲學に於いて最も說明を要する所なり。エルドマンはスピノーザの意を解して彼れが本體に幾多の性あるが如くにいふは是れ其の所謂差別見に屬するものゝ謂ひにして本躰其のものに斯かる差別ありと云ふにはあらず、換言すれば性と云ひ樣と云ひ凡べて差別に屬するものは畢竟吾人の心の主觀的の見樣に外ならずといふ意なりと。スピノーザ自ら性の樣たるを定義せる所に曰ふ、性は本躰の本質を成すものとして吾人の知力が本躰に就いて認る所のものなりと。エルドマンは此の定義の語中の吾人の知力といふ言葉に重きを置きて解せるなり。されど又スピノーザは件の定義の中に本躰の本質を成すものとしてといふ語を挾み置けるを見れば彼が所謂性を以て唯吾人の主觀的の見樣なりと爲すはいかゞはし。且スピノーザが本躰の性及び樣といへるものを取りて全く唯吾人の主觀的の見樣に屬すべきものと爲すは彼れが哲學全躰の趣に合せざるが如し。但しエルドマンが委しく證明したる如く、スピノーザは吾人が事物の差別の相を見るをば其の謂ふイマギナシオに歸せり、然れども惟ふに彼れの所謂イマギナシオに事物の差別相を歸すると、其の所謂本躰の性を以て本躰其の物に存在するものとして唯吾人の主觀的の見樣に非ずとするとは必ずしも相和せざるものに非ず。彼れがイマギナシオに屬

するものとしたる差別の相は是れ個々物をば全く斷ち離して獨立のものと見るの見方なり、本躰其の物の永恒の性より必然に來たれるものとして見るに非ず。故にスピノーザに取りては假令本躰永恒の相より見るも性及び樣の差別相は全く滅するものに非ず、唯其の差別相が個々獨立の者として自存すといふ見方の滅するのみ、本躰より必然に來たるものとしては性及び樣の差別相は全く妄見にあらず。彼れが謂ふ無限樣(即ち動靜)及び無限智の如きは全く差別を呈せざるものに非ずして而も之れを以て全く吾人の妄見に屬するものとは云ふ可からず、本躰圓滿の相を發現したるものとしては此等はまさしく眞實のものなり。一言にして云へば、本躰永恒の相よりするの見方に於いては一と多とは相離れざるもの、其の關係は差別即平等、平等即差別なりと說かざるを得ざるなり。しかも差別と平等との相即不離の關係を說く所スピノーザの哲學に於いて尙ほ未だ至らざる所あり。是れ彼れが萬有神說に於ける最も困難なる點と云ふべきもの也。

第三十四章　神秘家及び懷疑家

〔一〕　スピノーザの哲學は當時に於いて已に多少の遵奉者を得たりき。されど全躰より云へば彼れが思想は當時未だ能く了解せられず、之れを無神論と視て烈しき攻擊を加へたる學者多かりき。啻にスピノーザの哲學のみならずデカルトの哲學に對してさへ神秘說の見地より攻擊を加ふる者少からざりき。

今こゝに十七世紀に於いてデカルトよりスピノーザに至れる哲學思想の大潮流の傍にありし神秘家及び懷疑家の說に就きて略述する所あるべし。但しデカルト學派の或者に於いても又特にスピノーザに於いても神秘的傾向は明かに存在せり。こゝに謂ふ神秘家は寧ろ唯神秘說をのみ獨立のものとして懷き、其を一の哲學的組織に編み込むよりも寧ろ之れを懷疑說に聯結せしむるの傾向を有したるものなり。佛人ブレーズ、パスカル(Blaise Pascal. 一六二三——一六六二)に於いては件の神秘的傾向は稍、獨立のものとして認めらる。彼れはポル、ロアヤルの一人にしてデカルト哲學の影響を受けたれども、專ら宗教的神秘說に其の脚を立てたり。彼はまた當時の有名なる數學者の一人にして數學を以て吾人の有する唯一の確實なる智識と見たり。されど彼れは數學によりては吾人は事物の全躰を究むると能はず、而も全躰を知らずしては眞實に部分をも解すべからずと考へ、哲學

上には寧ろ懐疑的傾向を取り而して最後の立脚地を宗教上の信仰に求めたり。以爲へらく吾人の道德的觀念も又數學に於いて吾人が理性の立つる所の原理も、又神を信ずる心も、畢竟するに吾人が心情の感ずる所に基するものにして吾人の思考を以て證し得べきものに非ず、眞正に吾人を導くものは感情なり信仰なりと

[二] 英國人ヂ・セフ、グランヰル亦哲學上懐疑說を取るに傾き宗教上の信仰に安居を求め、デカルト學派の唯理說を攻擊したり。彼れは又ホッブスが因果の關係を知るを以て學術研究の目的となせるに對して、因果の關係は吾人の經驗の能く認むる所にあらず吾人の經驗する所は唯だ一事が他の一事の後に來たるとを見るに止まり、一事が他の一事の故を以て來りたりと云ふとは吾人が思想の附加する所に外ならず、即ち從來一事が常に他の一事と相前後して來りたるを見て其の間に因果の關係あらんと察するのみ、必ず其の間に然る關係ありとは確知する能はずと論じたり。此の因果律の論評によりてグランヰルはヒュームの先驅たりしなり。

[三] ピュール、プアレ (Pierre Poiret 一六四六——一七一九)亦佛蘭西人にして初めはデカルトの哲學に服せしが後に懐疑說を取りて彼れを離れ殊にスピノーザに對しては嫌惡の情を懐けり。彼れの說く所に從へば吾人の知力に自動的のものと所動的のものとあり。自動的のものによりて吾人は數學等に於ける觀念を思ひ浮かぶ、されど此等の觀念は事物の實相を示すものに非ず唯其の影を捉らふるが如きものに過ぎず、且つ數學の精神を究め行かば竟に凡べてを機械的必然の作用と見て吾人の自由を否むに立ち至らざる可からず。之れよりも却りて高尙なるは所動的の智なり、こは自ら觀念を作らずして他より受くるもの、即ち五官に現るゝ世界を見、且神の啓示によりて眞知を得るはこれなり。吾人の知る凡べての事物の中最も確實なるは神なり、彼れは吾人自己の存在よりも更に確實なるものなり。吾人は神に接し神の啓示によりて初めて眞知識に達するを得べしと。

[四] ダニエル、ユエー (Daniel Huet. 一六三〇——一七二一)は懐疑說を取りてデカルト及びスピノーザに對し大に反對の意見を主張せり。彼れは吾人の理性の信憑するに足らざることを言ひ、偏へに天啓に依賴すべき必要を說き吾人の推理したるとも其の信すべきか否かの判別は遂に其の標準を天啓に求めざる可から

ずと考へたり。而して斯く彼れは懐疑説の立脚地より吾人の理性の不能なることを説くと共におのづから感覺論の見地に近づけり。謂へらく吾人の感官によりて得たることの外は吾人の知解に存するもの無しと。

〔五〕　當代の懐疑論者として最も大なるをピエール、ベール(Pierre Bayle. 千六百四十七年—千七百六年とす。

彼れ初めはデカルトの學説に其の心を傾けたりしが後には專ら懐疑説の見地を取りて諸種の學説を評論することに力めたり。其の評論の一結果として見るべきは彼れの有名なる著作『ディクシオネール、イストリック、エ、クリテック』("Dictionaire historique et critique")なり。されど彼れは組織的に懐疑説を唱道するよりも寧ろ其の應接せる幾多の學説に就きて其の中に存する矛盾の點を發見することを好めりしを以て、彼れ自らの説く所に於いても相合はざる所あるを見る。蓋し知識を求むる熱心と、在來の學説に於いて自家撞着の點を發見し破壞を事とするを好む心と、及び宗教上の信仰を重んじ道德心の指示を信ずる堅き心とは彼れに於いて奇妙なる結合を爲せるなり。

ベールは在來の學説を批評し去りて吾人の理性が確實不動の眞理を發見し得ることを疑ひ、進みてデカルトが其の哲學の出立點としたる自識の確實なることをも疑ひて曰はく、我れ自らに就きて吾人の知る所よりも外界に就きて知る所の方却りて確かなりとも云はるべし、何となれば吾人自らは一轉瞬毎に變遷し行くものにして到底我れ自らの如何なる者なるかを確知することは能はざる可ければ也。吾人の理性は寧ろ矛盾の點を發見し破壞を事とするものにして確實なる知識を建設する力あるものに非ずと。斯くの如くベールは在來の諸學説の信憑するに足らざるとを説きしと共に、宗教上教會の唱ふる信仰に關して其が道理に合せざることを論じて忌憚する所なかりき。以爲へらく、宗教上の信仰は必ずしも道理に合ふものに非ず、されど其の然るに拘らず寧ろ却つて其れが道理に合はざるものなるが故に信ずべきものなりと。また彼れは世に存する善惡の問題を取り來たりて、吾人は道理上より考ふれば善なる一神が世界を造れりと云はんよりも、寧ろマニカイ宗の主張したるが如く善惡の二元を説くかた考へ易しと論じたりき。かくの如くベールは哲學上の學説及び宗教上の信仰を批評して其の中に存する

矛盾の點を發見するを好みたりしが、唯彼れの取りて確實なるものと爲したるは吾人のなべて有する道德心の指示なり。以爲へらく、品德は宗敎上信仰の如何に懸かるよりも寧ろ各人の生具し居る性質に因る所多し。吾人は宗敎上若しくは理論上に如何ばかり相異なる思想を有するとも世間に行はるゝ道德的褒貶に關しては皆おのづから相一致する所あり、故に國家は能く無神論者を以ても組織することを得べし啻に然るのみならず世間の道德を實行せんには却りて宗敎に於いて稱揚する所に反せざる可からざる如きことあり。此くの如く行爲の實際に於いては明確なる道德的判別ありて如何なる宗敎上の天啓も之れに撞着すべきに非ず、天啓の是非正否は寧ろ其のかゝる實際の道德に合するか否かを標準として定むべきものなりと。

之れを要するに、ベールは究理上吾人の確實なる智識に到達し得ることを疑ひて多くの懷疑論者の爲せるが如く宗敎上の信仰に其の隱家を求めんとし、而してまた憚る所なく宗敎上の信仰其のものに存する自家撞着の點を暴露して其の非理なるにも拘らず吾人の宜しく信ずべきものなりと爲したりしが、しかも畢竟彼れが安住の地と爲したる所は吾人の道德心の指示に從ふことに在りしなり。

第三十五章　ライブニッツ

〔一〕　以上予輩はデカルトに始まりたる近世哲學究理派の潮流を敘してスピノーザに至り、而して此の大潮流に傍ひて其の影響を蒙りながらまた之れに反抗して神秘的及び懷疑的立脚地を取れる人々の思想をも略敘したり而して此等の思想家中には吾人の感官によりて獲得する實驗を重んずるに傾ける者あることをも述べたり。由來究理に對するの懷疑說は實驗的思想(殊に道德上及ひ宗敎上に於けるもの)に亞きを置く傾向を有せるものなり。デカルトに起こりし究理學派の潮流と相對して近世哲學變遷上の二大勢力を成せるものと云ふべきは經驗學派の潮流なるが此の潮流の淵源は專ら英吉利に發したりき。蓋し近世學術の源頭に立ちて先づ最も明かに自然科學に於ける實驗的研究の必要を唱へ出でたるはベーコンなれども、正當に經驗哲學の祖と云はるべきは寧ろスピノーザと同年に生まれたるロックなり。而してロックの哲學がスピノーザの哲學に對して大に相異なる趣を帶びたるが如くまた他の方面よりしてスピノーザの哲學と大に相

異なる趣を帶ひたる一大組織あり。是れ即ち少しくスピノーザ及びロックに後れて出でたる、しかも其が所説の要旨はロックのとは全く異別に、獨立を成し上げられたるライプニッツの哲學なり。ライプニッツの哲學はスピノーザの哲學とは大に其の趣を異にすれどもまた等しく一種の形而上學的組織にして此の點より見れば彼れを以て究理學派の流れに屬する者の一人と見做し而して之れを經驗學派の潮流に屬する者と區別することを得。蓋しロックが知識論を以て其が哲學の出立點なると共に又其の主要の部分となしたると、ライプニッツが大膽なる形而上學的組織を建てたるとは、大に其の學相を異にせるや明かなり。此の點に於いてライプニッツの哲學はデカルト及びスピノーザの大組織に並ぶべきもの、而してホッブスの唯物論的組織も亦其の列に加へらるべきもの也。予輩はロックに始まれる實驗哲學の發達を叙するに先だちて先づライプニッツの哲學及び其の流派を叙述せん。

〔二〕 ゴットフリード、ヰルヘルム、ライプニッツ(Gotfried Wilhelm Leibnitz)は一千六百四十六年六月二十一日獨逸國ライプツィヒ府に生まる。父は其處の大學に在りて道義學の教授たりき。彼れ幼きより父の書齋に在りて讀書を事とし文學歴史を

初めとして後には廣く中世紀哲學者等の著作にも渉獵しき。其の後彼れは其の生地の大學に入りて更に哲學を初めとして其の他の諸種の學科に心を傾けたり。其の頃彼れはライプツィヒに近き森林に散策を試みし時在來のスコラ哲學を守らんかはた當時の新流の學説に就かんかとの問題を想ひ浮かべて深く思ひを凝らせしとありと言へり。彼れは更に見聞を廣くし特に自然科學上の知識を廣く得むが爲めに益〻諸種の書籍を渉獵し、ベーコン、ホッブス等を初めとしてケプレルガリレオ、ガッセンディ等を讀めるのみならず、尚ほ中世紀の哲學に對しても注意することを廢せざりき。彼れは後にアルトドルフに行き其處にて法律學科を以てドクトルの學位を得、次ぎてマインツに行きて其處の宮廷に事ふることゝなれり。彼れがマインツ公に事ふるや法典及び法律學上の改良を成さんとの企圖を懷き且益〻自然科學を研究すると共に當時に行はれたる新流の學説に其の好尚を傾くることゝなり、一時はスピノーザの徒の説く所に心を寄せたりといふ。後彼れは一千六百七十二年公務を帶びて佛國巴里府に赴きて其處に滯在し時の佛王路易第十四世の獨逸征服の念を防止せんが爲に王の心を埃及征伐に向けんと試みたると

あり。斯かる政事上の職務に鞅掌せる間にも彼れは常に心を學術の攻究に傾け殊に巴里に在りては數學を修めまた此の頃より深くデカルトを研究したり。彼れは早くより廣く當時の學者と交り書簡を以て其の意見を交換し巴里に在りてはホイヘンズ(和蘭物理學者Huy-ghens 一六二九—一六九五)及びアルノール等と親しく交はり又是れより先きホッブスに書を贈れるとあり。彼れが巴里府に在りてツィルンハウゼンと相知るや、ツィルンハウゼンはスピノーザに勸むるに其の著『エティカ』をライプニッツに示さんことを以てしたりしが、スピノーザは尚早しとて肯ぜざりき。後にライプニッツ旅行して和蘭を過ぎれる時スピノーザを訪うて懇談せることあり、遂に請うて『エティカ』を示さるゝを得たり。ライプニッツがスピノーザに對する關係の決して疎ならざりしは彼れが多くの書翰をスピノーザに送れるを以ても明かなり。巴里府に滯在したりし時のことなり、一千六百七十六年に彼れは有名なるフルクシオンの發明を爲したり是れはニュートンの創撥したる微分法と其の趣を同じうせるものにて互に獨立に發明せるものとして後世に傳へらる。千六百七十七年以後ライプニッツはハンノーフェルの宮廷に仕へて宮中顧問となり、又其の圖書館を監督せりしが、ハンノーフェル公の女、ブランデンブルク公即ち後の最初の普漏士王に嫁きてより彼れは屢〻ベルリンに行けり。ハンノーフェル家の歴史の編纂を委囑せられ文書穿鑿のため維納及び以太利に行き其處の宮廷に親密なるの便を得、又歸りて後一千六百九十一年にはデルフェンビュッテル公の圖書館の監督を委托せられたり。ハンノーフェル公エルンスト、アウグストの歿後はライプニッツが普漏士の宮廷に對するの關係ますゝ親密となり、一千七百年ベルリンに新設せられたるアカデミーの建立に與りて力あり、且其の最初の長となれり。普漏士王妃の歿後はベルリンの關係頗に疎くなりゆきそれに代へて維納の宮廷と親密になり、又ハンノーフェル公ゲオルク、ルドヰヒ去つて英國王となるやハンノーフェルとの關係も甚しく冷却せり。

彼れは諸種の學術に關する研究の外政治上及び其の他實際上の事業に與かり曾て宗教上の事にも畫策せり。例せば羅馬加特力教會とプロテスタント教會との和合を圖らんが爲に其の意見をボシュエーに示しゝことあるが如き、またプロテスタント教會内に於いてもルーテル派とレフォルミールト派との一致を計らんと欲

したるが如き是れなり。彼れは少より多讀の人にして其の自家の新見識を開き來たれるも多くは讀書の媒介によれりしが如し。博覽にして兼ねて獨創の才に富めりし者をいふや、人多くは古昔に於いてはアリストテレースを稱し近世にはライブニッツを擧ぐ。上に云へる如くライブニッツは數學に於いても發明する所ありまた法律學及び言語學の上にも其の心を用ゐ其が研究の痕跡を遺せり、其の他一切の自然科學にして彼れの涉獵せざるもの無かりき。

ライブニッツは閑散に其の晩年を送りぬ。彼れは自ら云へる如く多くの業務に鞅掌せしが爲に要るには餘りに遲きに至るまで家を成すの期を得ず遂に獨身にして其の生涯を終れり。彼れの晩年には其の曾て恩寵を受けし宮廷の覺え目出度からざるに至れりとおぼしく、また彼れが寺院に詣づることを力めざりしより宗教家等は彼れが信仰の正しきかを疑ひ其の名を俗語にもちりてレーエニックス(Löwenix)と稱せり(レーエニックスとは不信仰者といふ義なり)。一千七百十六年彼れの歿せる時には其の柩を送れるもの甚だ少なく官人の招れたる者とては一人も會葬せざりきといふ。

ライブニッツには其の學說全躰を纒めたる著作なし、唯種々の場合に應じて其が學說の種々の部分を發表せる著書又は論文等の遺存するあるのみ。また彼れは廣く當時の學者と交り書信により其の意見を交換せるを以て其の哲學を見んには此等の書翰は甚だ肝要なる者なり。彼れが時々公にしたりし論文の數多き中に就き其の哲學の成り上れる大躰の組織の現れたるものゝ最も早きは一千六百八十五年に出版せし『純理哲學小論』("Petit discours de métaphysique")及び一千六百九十五年に『デュルナル、デ、サヴァン』("Journal des Savan")に掲げし『自然界と本躰相互の關係とに關する新說』("Système nouveau de la nature et de la communicaton des substances,)なり。其の外彼れの著述の哲學上主要なるは『ロッグが有名なる著書に對して作りたる、而して其の成るに先たちてロックの逝きしが爲に遂に世に公にせざりし"Nouveaux-sais sur l'entendement humain" (是れ其の著述の最も大なるもの)、及ひ普漏士王妃の求めに應じて作り一千七百十年に至りて世に公にせし "Théodicée" 其の他彼れが一千七百十三年より同十四年にかけて維納府に在りし時オイゲン公の爲めにものせる其の哲學原理の摘要とも見るべき書にして後に『モナド論』("Monadologie")の名

を以て世に知られたる者及び彼れの死後二年を經て世に公にせられしprincipes de la nature et de la grâce"等なり

〔三〕　ライプニッツが哲學に於ける主要なる動機の一はスピノーザが萬有神説に現はれたる結論を逃れんとするに在り。彼れはスピノーザの哲學を以てデカルト哲學の論理的結論となしまた其の結論が萬有神説となり了したるは其の吾人の承認す可からざる見地なるとを正に表白したるものなりと見而して其が如き結論を免れんにはデカルト哲學の根本思想に於いて改むべき所ありと考へたり。故にライプニッツは常にデカルトの哲學は眞正なる哲學の玄關たるに過ぎずと云へりき。次ぎに彼れが哲學の他の動機と見るべきは、デカルト、ホッブス、及ひスピノーザ等が皆一致して取り來たりし所のもの即ち自然界をは機械的に説明するとに對して、目的觀をも之れと共に攝取せんとするに在りき詳しく云へばライプニッツは自然界を飽くまでも機械的に説明せんとする當時の自然科學の精神に對しては本より異論を狹む所ありしに非ず、唯彼れはかゝる機械説を容しながら尙ほ其の根本に於いて之れと目的觀とを調和せんと力めたるなり。件の二動機を以て觀れば、ライプニッツが哲學に於ける根本思想の由來は略了解せらるべし。而して彼れの哲學は固より大躰より見て究理派の流れに屬するもの、換言すれば彼れは吾人の究理心を以て考究する所是れ取りも直さず實在の相なりといふ見地に立ちしなり。然れども、デカルトよりスピノーザに至りて竟に萬有神説となれる思想に反抗したるとの故を以て彼れの哲學は究理學派の中に在りておのづから傾向に反抗したるとの故を以て彼れの哲學は究理學派の中に在りておのづから一大特色を帶びたる組織となれり。

其の論理的歸結の萬有神説となるの困難を免れんにはデカルトの思想に就いて何れの點を變更すべきか。ライプニッツ以爲へらく先づ實躰(又に本躰)てふ觀念を變更せざる可からず本躰を以て不變動にして一なるものと見る是れ即ち萬有神説に陷る所以なり、本躰は靜寂なるものに非ずして寧ろ活動する力と見るべきもの也。何物か實在する。曰はく、物は活動することによりて存す自ら活動すること無くして物の存在すと云ふと莫し、働かざるもの即ち存在せざるものなり(quod non agid, non existit)而して其れ等の活動する力は數多あるものにして其の各か即

ち實在の單元と謂はるべきもの也と。即ちライブニッツはスピノーザの萬有神説に對して活動説及ひ多元説を取れる者なり。

然れども彼れは決してデカルトの云へる本躰てふ觀念を捨てたるに非ず唯其を活動する力と見たる點に於いて該觀念を改めたるのみ。謂ふところ力は自然に生じ又自然に滅するものに非ず唯不可思議なる妙力を以て創造せられ或は消滅せしめられ得るのみ。又そは各一にして分割す可からざるもの又相互の影響を受けずして獨立自存するもの即ち他によりて變化せられざる也。此等の點に於てライブニッツの所謂實在の單元はアトム論者の所謂アトムに似たり。されど彼れの謂ふ所のものはアトムの如く廣袤を有せず、アトムは廣袤を有するが故に思想上尚ほ分かたれ得べきものにして眞に單一なるものと謂ふべからず、ライブニッツの謂ふ所は眞に單一なるもの即ち思想上に於いても分かつ可からざる形而上的の點と名づく可きものなり。されど其れ等多くの單元の各はスピノーザの所謂本躰の如く凡べての存在を含む而してこゝに各單元が凡べての存在を含むと云ふは凡べての存在が想念上にて各單元に縮寫せらるゝを謂ふ之を譬ふれば猶一圓形の周圍より引ける凡べての線が其の中心に集まり其れ等の線を以て成す所の凡べての角度が其の一中心點に保たるゝが如く、各單元は皆凡べての存在を包含する小宇宙と見らるべきもの也。此等の單元をモナド(monad)と名づく。

以上述べたる所によりて知らるゝが如くライブニッツはデカルト派の學説を批評し又アトム論をも批評して遂に其の所謂モナド論に到達したるなり。彼れ自らアトム論の唯物説とプラトーン哲學の理想説とを其のモナド論に於いて調和し得たりと考へたり。ライブニッツ廣く諸種の書籍を渉獵して種々の思想に啓發せられたれたる結果として遂に自家の學説を建つるに至れるにて其の學説を通貫したる一大特色は調和といふ觀念にあり。彼れは幾多の特殊なる思想を調和して一大組織を成し上げんと力めたり。

[四] ライブニッツは實在の本躰を多元的に見て其の各〻を活動する力なりと見たり。而して彼れは機械説と目的説とを其の根本に於いて調和せんと力めたる所より其の所謂モナドの活動を以て發達進歩と見たり。此の點に於いては彼れの説く所發達てふ觀念を根據としたるアリストテレースの哲學思想に似通ひた

る所あり。而して各モナドの發達する狀態は自己以外のものによりて起こさるるに非ずして自發自展するもの即ち其の可能性として本來具有せるものが漸次に開發し來たるなり。此の點に於いてライプニッツのモナド論はまたスピノーザの所謂本躰てふ觀念と相接近する所ありと云ふも可なり、何となればスピノーザの所謂本躰もライプニッツの所謂各モナドも其のものに於ける凡べての事相は其の自性に從うて出で來たるものなればなり。斯くの如く各モナドの狀態は其の性具せる所のものがおのづから開發するなれば、其の既に開發したる所のものは其の現在の狀態に含まれ、また其の將に開發せんとする狀態も其の現狀態に於いて豫想せらる。故に明知を以て見る時は各モナドの現狀態に於いて其のモナドの過去と未來とを讀むことを得。尙ほ語を換へて云はゞ各モナドの現狀態が其の凡べての發達の段階を表現するなり。之れを譬ふれば尙ほ樫の實が其の將に成るべき樫の樹を表現するが如し。

かくの如く各モナドの現狀態に於いて其の凡べての過去と未來との讀まるゝのみならず其はまた他の凡べてのモナドの狀態を表現す、故に各モナドは宇宙の活きたる鏡(miroir vivivant de l' univers)とも云ふべし。されど其の宇宙を映すといふも、其の狀態の他によりて起こさるゝに非ず、各〻之れを自發するなればライプニッツはモナドは窓を有せずと云へり。各モナドの宇宙を映すは他に影響せらるゝには非ざれど、尙其の狀態おのづから相一致して各〻同一宇宙の縮畫たり。而して何故に然るぞと云ふに、ライプニッツ以爲へらく各モナドが本來其の如く相一致するやうに造られたるなりと。こゝに彼れは屢〻時計の比喩を用ゐて各モナドの映ずる狀態の相合するは譬へば豫め一致するやうに構造されたる時計の常に相合ふが如しと云へり。モナドを其の如く相合ふ樣に造れる者是れ即ち神なり。ライプニッツ以爲へらくモナドの調和は其の原因として神の存在を證明すと。故に此の點に於いて彼れの哲學はオッカジオ論を一大組織として打ち擴げたる如きものなり。

〔五〕

此くの如く各モナドは漸次に其の性具の狀態を開發し行くものにして而してこゝにライプニッツの哲學全躰を通貫する一大法則即ち連續律(Uex continui)を認む。何をか連續律といふ。モナドの自發する狀態は本來全く無きものゝ出

で來たるに非ずして已に可能性として其の具有するものゝ次第に開展し來たり而して其の開展は決して間隙を成して飛躍するものに非ず、是れ連續律に從へるなり。ライプニッツ連續律を發見したる由來は彼れの物理的研究に求むべし。彼れ以爲へらく若し一物の溫度が進みて或點より或點に至り、又は一物の運動が或速度より或速度に增進する事ある時には其の增進は必らず其の始まりたる程度と其の到達する程度との間に於ける凡ての程度を通過せざる可からず例へば一〇の速度或は溫度より一〇〇の速度或は溫度に進む時には其の間の凡べての段階を通過すること無くして彼より是れへ飛次昇ること能はず、如何ばかり迅速に彼より是れに移るも必ず其の間に存する凡ての程度を經過し行かざる可からず。自然の現象は凡て此の連續律に從ふ者にして決して飛躍を爲す事無し。又全く運動の無き處に突然運動の生起し來たる者に非ず運動の生ぜんには必ず先づ小なる運動ありて其れが或る速力を以て增進し來たるに因らざる可からず、故に靜は動の小なるものと謂ふべきなり。一切の反對は皆相對的のもの換言すれば皆程度上の差別にして絕對の差別にあらず。固躰は流動躰が其流動の狀態を少なくしたる者流動躰は固躰が其の固形の狀態を少なくしたるものに外ならず。生は伸ぶるなり死は縮むなり。反對と見らるゝ者も畢竟程度の差別に歸する也と。斯く連續律に從うて一切のものが連綿たる程度の差等を成し一切のモナドが皆飛躍を爲すと無くして其の狀態を開發し行く所に其の變化推移する所以を發見するを得。物の一狀態に在るは其れが更に次ぎの狀態に進み行く所以なり。而して一物が一狀態に在るや皆其の當に然るべき十分の理由ありて然るなり、其れが其の狀態に在りて他の狀態に在らざるには其の然る所以なかる可からず。凡そ存在するものは皆それ〳〵に殊相を具ふ一物として全く他の物と同じきは莫し。若し二物全く同じくば其れが何故に二物として存在するかの十分の理由を認むること能はじ。一が此處に在り他が彼處に在りと云ふことに於いて已に其の差別を見る若し其れが全く相同じくは何故に其の一が此處に在りて彼處に在らず他が彼處に在りて此處に在らざるの理由を認むる能はじ。宇宙には一物として相同じきもの無しといふ、是れ卽ちライプニッツの所謂 principium identitatis indiscernibilium なり。然れども其等一切の差別は畢竟皆程度の差別なり種類に於ける

絶對の差別に非ず。故に一物は凡べて他物と異なりながら又必ず相似たり。其の異なるは唯程度の上に於いてのみ、其の事相に於いては皆相類似す、何となれば各モナドは凡べて同一の宇宙を縮寫するものなれば也。故に吾人は類推して一物の狀態より他の狀態を知ることを得と云ふ、是れ即ちライプニッツの所謂類推律なり。

〔六〕 上に各モナドは全躰を表現すと云へり而して謂ふところ表現はライプニッに取りては想念すといふと同一義となる。蓋し一モナドが全宇宙を表現するは多なるものが一に於いて表さるゝ、或は外なるものが内に含まるゝの謂ひにして、是れ即ち想念の作用に外ならざれば也。恰も吾人が事物を想念すといふは我が心の中に多なるものを表現するの謂ひなる如く、各モナドが全宇宙を表現するの活動は想念の活動なり。斯くの如く見るには彼れの所謂類推律が大に彼れを助くる所ありしなり。蓋しモナドの活動の内なる狀態は何によりて知り得べきと云ふに先づ吾人の心の實驗する所より推して知るべきなり。吾人の心に實驗する所を出立點として類推すべく而して其の心は全宇宙を想念するとに於いて小宇宙と見らるべきものなれば亦之れに準じて一切のモナドを考ふべし。(かゝる思想の順序はデカルトが自識を以て出立點としたると相比することを得)。而してモナドの活動即ち想念は其の明かなるの程度に於いて無數の差等あり。其の所謂發達は活動の進むなり、而して活動の進むは不明瞭なる觀念を想ひ浮かぶるの狀態より明瞭なる觀念を想ひ浮かぶるの狀態に至るの謂ひなり(此にはライプニッはデカルト及びスピノーザの思想をもちゐたり)。而して斯くある所以は各モナドの活動に制限あり其れの沮碍せらるゝところあればなり。即ちライプニッは各モナドには活動の方面と其の沮碍さるゝ方面とありと見、而して彼れはアリストテレース及びスコラ學者の用語をもちゐて活動の方面をエンテレキア(entelechia)、沮碍の方面をマテリア、プリーマ(materia prima、素)と名づけたり。所謂モナドの發達は素即ち沮碍の方面の少なくなりて、即ち活動の方面の進み行くの謂ひなり。されどモナドには一として純粹に活動的方面のみのもの(purus actus)無し。純なる活動にして聊かの制限なく些の沮碍なきものは唯神あるのみ。故にライプニッは神を以て一切のモナドの頂上に位する者とし、或は之れを最高

のモナドとも名つけたり。活動の制限されたるは即ち不明瞭なる混雑せる觀念を浮かべ居れるの狀態なり、神に於いては一として不明瞭なる混雑せる觀念なし。以上ライプニッツの所說に於いて如何にプリト、テレース風の思想及びデカルト、スピーノーザ風の思想の相混和されたるかを見よ。

〔七〕 各モナドが同一の宇宙を縮寫するは猶ほ幾多の人が各々自己の立ち場より同一景色を見るが如し。モナドは皆各自に特殊なる立ち場より萬有を映ずるなれば一と他との間に差別はあれど畢竟するに連續律に從ふ程度の差別にして此等皆相契合して同一宇宙を縮寫するなり。斯くのごとく各モナドは其の表現に明不明の差等はありながら又全く相異なるものに非ざるとは先きに說きし類推律を以ても知るを得。蓋し全く相同じきモナドは無けれどもまた全く相異なるモナドも無し、之れを要するにモナドは皆其の類を同じうするもの也。其の類を同じうすとは明不明の程度の差別を具へながら同一宇宙を表現するの謂ひなり。而して斯くの如く各モナドが獨立に性具する所を自發するや其の趣の相契合する、換言すれば類推律に從うて彼れより是れを推知するを得るとの究極的根據は神なり即ち神はモナドの存在と其の調和との原因なり。されどモナドは思想上に於いては本來永恒の眞理として無始より神に存在せるもの、言ひ換ふれば存在するモナドは其の存在を與へらるゝに先だちて已に神の心に於いて存在せるもの、而して神の心に於ける其が存在は神の意志を以て自由に造り出だせるものに非ずして、本來神性に神智に具はれるもの也。而して其が神の心に於ける思想上の存在以外の存在を與へらるゝには其の爾せらるべき理由なかる可らず、換言すれば其れが存在するに至る十分の理由なくして存在すべきものに非ず。然らば其の理由は何處に在りや。曰はく、其の存在するに宜しき所あること是れなり、別言せば物は其れが完全の相を具するの度に從うて實在するなり、全きことの大なる程其の實在する理由は大なるなり。而して神の心に於いて思想上已に存在する數多きモナドの中に就き其の實在し得ることの最も多大なるものが先づ實在を與へらる之れを譬ふれば、猶若干の運動が各、相異なる方面に向かひて起こる時に其れ等の相合したる結果は種々なる運動の最も多くが實現せらるゝ方角に向かひて進むが如く、最も實在の多き(換言すれば最も完全なるとの大なる)モ

ナドの團躰が實在を與へらるゝ也。思想上には等しく存在し得るものも其れが實在を與へらるゝ上に於いては皆同等ならず、彼れ是れ矛盾するものは共在するを得ず、其の中の何れかが撰擇せられざる可からず、而して其の撰擇せらるゝや全きことの大なるもの先づ實在を與へらる。一言に云へば神の心に浮かべらるゝモナド全躰の中より相調和して最も完全なる實在を與へられ得るものゝみ撰擇せられて茲に大調和を實現したる宇宙は形づくられたる也。

斯くの如くライプニッツの思想にはスコラ哲學に更に溯れば已にプラトーンに見ることを得る實在論の彩色ありて、實在と完全とが同一視せられたりと思はるゝ所あり、而してこゝに彼れが哲學の一大動機なる目的觀の和合し來たれるを見る。彼れが諸物の存在には其の存在する十分の理由なかる可からずと云へるは彼れに取りては其が存在するに宜しき目的ありと云ふと同じ。即ち彼れに取りては原因と目的とは究竟するところ同一義となる、而して彼れの哲學に於いて用ゐらるゝ主要なる原理は件の因果律又は理由則なり而して彼れは此の理由則を言ひ表して何物も其の存在する十分の理由を有せずに存在することと無し (principium rationis sufficientis) と云へると共に又之れを言表して優れるもの、存在するの原理 (principium melioris) とせり、謂ふこゝろは凡そ物は其の優れる度に從ふて存在を與へらると云ふにあり。

先きにライプニッツの掲げたる法則の一として世に全く相同じきもの無しと云ふことを說きたりしが、是れは畢竟上述せる理由則に基く。若し二物全く相同じくば其れが何故に二物として存在するかの理由なく、又已に二物として相分かれて其の存在を異にし居る以上は其が二つとなりて分かるゝ理由なかる可からず、換言せば其が相異なる二物として在るは爾あるとに各が其の特殊の理由を有すべきなれば其は決して全く同一なるものに非ず。

〔八〕 萬物は皆モナドを以て成る而してモナドは廣袤を有するものならず心靈的のものなり。物躰と名づくるものも畢竟本躰たるモナドの結合躰に外ならず。然らば廣袤言ひ換ふれば空間は何故にありや。曰はく、空間は吾人の觀る上に存して實在するものに非ず、即ち吾人の心の見樣に屬する主觀的のもの (entia mentalia) なり。譬へば吾人が銀河を視るや其を成す一々の星を認めずして之れを

一面に廣がれるものとするは銀河其のものゝ然るにあらで吾人が視力の足らざるに因るが如く、吾人が感官的知覺の明らかならざるが故にモナドの結合躰が漠然相合して一面に廣がれる如く見ゆるなり。故にモナドの結合躰が廣がれるものとして感ぜらるゝ、即ち物躰として見ゆるは現象(吾人の主觀に現れたる樣)なり。空間が吾人の主觀に現れたる現象なるが如く空間に於いて起こる運動も、亦然り時間もまた均しく吾人の心の見樣に屬するものなり。

志かも斯く物躰が廣がりて見え又空間に運動するものとして見ゆるは全く吾人の感官が吾人を欺くにはあらず、そは其れに相當する實在の相(即ちモナドの團結と各モナドの開發と)が在ればなり。デカルトは先きに物理上より見て宇宙に於ける運動の和(即ち全量)は常に同一にして增減すること無しと云へりしが、ライプニッツは以爲へらく常に同一なるは運動ならで寧ろ運動として現るゝ勢力なり、即ち物理上勢力の全量が增減なく保せらるゝ也(此の點是れ近世の物理學に謂ふ勢力保存論の既に彼れによりて言表されたる者と見て可なり)。物躰に於ける一切の狀態は其を動かす勢によりて生ずるものなるが故に物理上より見れば物躰の諸現象は運動力を以て說明せざる可からず、換言すれば在らゆる物理的現象は全く機械的に說明すべきもの也。されど自然界の諸物が都べて機械的關係を以て活動する所以の究極的原因は何ぞやと尋ぬるに其の爾するに宜しき目的を具へたること是れなり、即ち機械的に活動する物界、全躰の根據は其れの成就すべき目的に在りと云はざる可からず(是れ上に謂へる principium melioris に從へるものなり)。斯くの如く說きてライプニッツは近世の自然科學の大精神なる機械的說明と目的觀とを其の根據に於いて調和せんと試みたり。

〔九〕 若干のモナドが相集合して一團結を成せる中に就き其の一モナドの想念する他所のモナドの志かする所に比して大に明瞭なるときには其の一モナドと該團躰に於ける他のモナドとの間には恰も各モナドに於ける二方面と相比すべき關係を成す。蓋し想念するとの最も明瞭なるモナドはエンテレキア(entelechia)即ち靈魂にして他のモナドは相寄りて其の靈魂を宿す身躰(materia secunda)を成すと恰も各モナドに於ける相と素との關係の如し。かゝるモナドの一團躰これ生物と名つくる者にして其が靈魂と身躰との關係は豫め一致せしめ置かれたる

二個の時計の相合ふが如くに相應ずるものなれども其の間相互に影響することなし。斯く生物は本躰なる各モナドに於ける二方面に類似せる二面を具ふるものなれば無機物よりもさらに高等なる意味に於いて一躰たるものなり、蓋し無機物は偶然に一躰を成したるもの(unum pér accidens)にして有機躰は其れ自身に一躰を成せるもの(unum per se)に近よれる所あり、此の故にライプニッは或は生物を名づけて本躰(substantia)と云へる所もあり。凡そ靈魂は其を宿する身躰を以て伴はれざる無し、而して其の身躰を成す物質(究竟すればモナド)は常に新陳代謝し靈魂の想念する所亦之れに伴ひて變動し行く。一生物の生るゝは連續律に從ひたるものにして、全たく其が靈魂及び身躰の無き所より生出せるに非ず靈魂及び其を宿する身躰は生前より業に已に存在し、而して生物の生まるゝは唯其が身躰を成すモナドの團躰の急速に生長するに外ならず。死も亦全たく靈魂及ひ身躰の消え失するの謂ひに非ずして其の身躰を成せるモナドの急に減少して吾人の肉眼を以て認め得ざるに至るを謂ふなり。而して其の減少或は增加は生物の吾人の眼前に生活し居る間にも常に行なはれ居るものにして、生と云ひ死といひ畢竟するに增加または減少(新陳代謝)のたゝ大なる程度に於いて行はるゝの謂ひに外ならず。

斯く一モナドの想念する所が他のモナドに比して特に明瞭なる時に、他モナドの狀態は其の一モナドの明瞭なる想念に於いて最も鮮明に表現せらる、換言すれば他の狀態をば其の一モナドに於いて最も善く讀むことを得、他の狀態のしかある所以が最もよく其れに於いて了解せらる而して他の狀態のしかある所以を示すは是れ能動の地に在るものにして其しかる所以を示さるゝは是れ所動の地に在るなり。所謂能動所動は直接に彼れが此れに影響を與ふるの謂ひに非ず、他に於ける狀態のしかる理由を開示するが故に之れを能動と云ふなり。されば ライプニッツに取りてもデカルト及びスピノーザに於けるが如く能動の地に在るは想念の明瞭なる判然たるものにして、所動の地に在るは想念の不明瞭なる漠然たる者なり。此の故に一團躰に於ける他のモナドに比して想念することの特に明瞭なるものは即はち靈魂は其の團躰に於ける主宰と名づくべきもの也。

ライプニッは曾に吾人の靈魂及ひ身躰のみならず一切の生物は其の生まれ出づ

る前より已に存在し其の死後にも尙ほ存在するものなることを證明するものとして、當時恰も生物學上唱へ出だされたる微小なる種子的動物の說を取りて曰はく、凡そ生物は本來かゝる種子(身躰と靈魂とを併せ具ふるもの)として存在するもの、其の生死は畢竟該種子の伸長し縮小するに外ならず。蓋し生物も連續律に從うて大なるものより極めて小なるものに至るまで數限りなき段階を成す。一塵の微と雖も亦多くの生物によりて住せらるゝなりと。

〔一〇〕 靈魂も亦連續律に從ひ其が念ひ浮かぶる想念の明不明に於いて多くの差等を成す。之れを大別すれば最下等は恰も吾人の昏倒して無意識となれるが如き狀態に在るもの此等の睡れる靈魂は生物の最下級に位するものにして草木の如き是れに屬す。次ぎの段階は動物の靈魂にしてこれは感覺を具ふ。其の想念することの如何に不明瞭なるものにてもモナドは皆若干の(或ひは無意識なる)想念及び其の想念が更に他の想念に移り行く傾向(appétit 又は tendence)を有せざるは無し、何となれば想念はモナドが自性に具する所の自發せるものにして、而してモナドは若干の想念をおもひ浮ぶるに止まらず更に進みたる明かなる想念を浮べんと力めざるもの無ければなり。而して動物が唯感覺を具ふるの程度より更に上ると一段すれば啻に感覺の能あるのみならず其が自らの活動を自覺するに至る、而してこは記憶作用に基き幾多の想念を相結合せしむるに因りて成るなり。此の段階に至れば靈魂は明なる意識を具ふるものと成る、吾人々類の有する所即ち是れなり。而して斯く明かに意識を有して活動するものに至れば其の想念は思考となり、其が一想念より更に明かなる想念へ移り行かんとするの傾向(或は力求)は意志となる。されど吾人の靈魂なるモナドも純粹に活動の方面のみを具ふるに非ざれば明かに意識して爲す思考及び意志の外に尙ほ不明瞭なる想念をおもひ浮ぶ。通常は之れに注意せざれども吾人は微少なる又漠然たる殆ど無意識ともいふべき感覺を思ひ浮かべ居り、而して其等の結合は吾人の明瞭なる意識に對して重大なる關係を有するものなり。吾人が明かに其を意識せざるは唯それ等の感覺の相互の差別の判明ならざるが故のみ。殆ど無意識なりとは云へども此等は實に吾人の心的生活に於いて決して看過すべからざる要素を成すものなり。斯くライプニッツが其の曾て數學に於いて發見したる微分的計算法を應

用して説ける所は彼れが心理的説明の上に最も光彩を放てる點にして、最近の心理學者が吾人の心作用中漠然たる體機感等の漠然たる感覺が明瞭なる意識の後景を成すと説くが如きは已にライプニッツの眼中に存せし所のものなり。

彼れ尚ほ以爲へらく、身躰に於ける運動の止む時なきが如く、吾人の心も亦常に活動するものにして、勢力保存の法則が普く物質界に行はるゝが如く亦心界にも行はるゝなり、唯恰も勢力が物質界に於いて運動として或は多く或は少なく現るゝ如く心界に於いても想念の或は多く或は少なく意識に現るゝとあるのみ。睡眠の狀態と覺醒の狀態とは畢竟唯程度の差別なり、吾人の注意を轉ずるは是れ取りも直さず幾分睡眠の狀態に入るなり。吾人の感覺は一見甚だ單純なるが如くなれど實は然らず、其れに應對し居る身躰上の運動の複雜なるが如くに複雜なるものなり。之れを譬ふれば、海波の磯邊に打ち寄する音の恰も一の單純なる音の如く聞こゆれど實際は幾分の波濤の幾多の運動に對して幾多の微小なる感覺起こり、而して其等感覺の結合がさながら一の感覺なるが如くに意識せらるゝ也。

而して各個人に於ける意識の一時期と他の時期との關係は殆ど意識に上らざる此等幾多の觀念によりて初めて了解せらるゝを得。蓋し若し其躰の極微なる感覺ありて其間に連續を爲すこと無くば一時期に於ける意識の狀態が何故に變じて他時期の意識の狀態となるに至るかは解すべからず。個人と個人との間に於ける性情氣質の差別の如きも亦此等曖昧なる想念の結合の趣きを以て説明すべきもの也。一人として其の氣質性情の全く他人と同一なるもの無し、而して此等の不明瞭なる幾多の想念の相集結せるものが各個人の氣質の差別を成すは恰もモナドとモナドとの差別が其れの活動の制限さるる方面(即ち想念の不明瞭なる所)あるによりて起こるが如し、蓋し其の活動の制限さるゝ所(prima ma-teria)是れ即ち個別の原由(principium individuationis)なり。運動は其の全く無かりし所より起こると無く唯微小なるものゝ增大し行くに外ならぬが如く、吾人の想念も亦全く無き者の生ずるに非ずして本來の心性に具はれるものが其の漠然たる無意識の狀態より漸次に明瞭になり行くに外ならず。而して明不明の度によりて其等吾人の想念を大別すれば大凡そ三段と爲すとを得。其の最下等に位するは上に謂へる漠然たる躰機感の如き者にしてライプニッツは此等を名づけて微小感覺(petites der-

ceptions)と云へり。次ぎなる段階は意識を以て伴はれたる感覺(sentiment)にして例へば視聽の感覺の如きもの、此等は能く更に分析して其の定義を下して他人に示すこと能はざるもの節に言へば尚ほ未だ判然たらざるものなり。更に上れば想念が最も明瞭なる意識を以て統一されたる狀態に至る、是れ即ち自意識の統一(apperception)の行はるゝ段階なり。

〔一一〕 斯くの如く吾人の想念は不明瞭なるより瞭明なるに至るまで幾多の連續せる段階を成すものなるが、要するに此等は凡べて吾人の性具する所がおのづから開發しゆくもの、換言すれば先きに無意識に具へたるものが漸次に意識せられ來たるに外ならざれば、其の如き意味にて吾人の觀念を凡て生得のものなりと云ふを得(是れロックが生得の觀念を排斥せるの論に對してライプニッツの云へる所なり)。吾人の不明瞭なる觀念を以て知る所は唯事物の現象なり、吾人が物躰を空間に廣かれるものゝ如く見るは是れ不明瞭なる五官の知覺を以てするが故なり。眞理を認むるは吾人の理性にして是れは吾人に具はれる知識の原則に從ひて働くもの而して其等理性の依りて働く原則は吾人の初めより明かに意識するものには非ざれど、凡ての觀念と均しく吾人の心に本具せらるゝものにして吾人の精神的活動の進むに隨うて之れを自覺し來たるなり。吾人の心は全く白紙の如きものならず、寧ろ知識を開發すべき特殊の性を具ふ。之れを譬ふれば、恰も定まれる理を元來具へたる大理石の如し、其を刻まんには其が自ら具へたる理に從ひてせざる可からず。故に曾て吾人の感官に在らざりしものにして吾人の知性に在るもの無しといふとも尚ほ之れに附加して但し知性其のものは然らず(excipe nisi ipse intellectus)といふ條件を附せざる可からず蓋し知性其の物は吾人が生來の活動の仕方としてそれに具はれるものなれば也。

〔一二〕 理性の依りて以て働く原理に二あり、一は自同則(principium identitatis)或は矛盾則(principium contradictionis)一は理由則なり。吾人が眞理と認むるものゝ中に就き其が最も單純なる基本と見るべきは自同判定なり、こは一物を取りてそれに就きて其れ自らを言ひ表す判定にして是れ直接に明瞭なるものとして吾人の承認せざるを得ざるもの也、委しく云へば判定の主位に在るものと、其れに就きて言表さるゝもの即ち客位に在るものとが相同じきが故に他に何等の證明をも待た

ずしてそれ自身に明瞭なるなり。凡ての理論上の判定は其を證明しもて行けば皆途にかゝる自同判定に歸せしめ得べきもの、而して是れは吾人の理性に具はれる自同則に從へるものにして論理上一物に就きて正當に立言し得ることの究極の根據はかゝる判定に在るなり。而してライプニッツに取りては件の自同則と矛盾則とは畢竟は差別ならず矛盾するものは在り得べからざるもの也。吾人の知識を組成する幾多の判定を推し究めて其を成るべく少數の自同判定に歸せしめたるもの是れ論理上知識の究極原理にして、之れを基本とし論理によりて(即ち矛盾則に從ふて吾人は須からく論究を進め知識を正確にすべきなり。

右述べたる所は論理上の形式に於ける理性の原則なるが、事實即ち內容の上に於いて用うべき他の原則あり理由則是れなり。蓋し前に謂へる論理上の原理に逆ひて矛盾を含むものは是れ固より在り得べからざるもの、矛盾を含まざるものは在り能ふものなれど、在り能ふもの必ずしも皆實に在るものならず、實に在るか否かを知らんには理由則に從ひて其が存在すべき充分の理由あるか否かを見ざる可からず。在り能ふものゝ中に於いて實に在るものは其れが在るべき充分の理由を有するものゝみ也。斯くの如く事實の穿鑿に理由則を用ゐて考ふるは是れ吾人が理性のはたらきなり。斯程明かに論理上の則と事實上の則とを分かち各〻に特別の原則ありとして之れを掲げ出だしたるは先づライプニッツを以て嚆矢とせざる可からず。

事實上の穿鑿に於いても吾人は其が據りて立つ所の若干の根本的事實を言ひ表す判定を掲ぐるを得、而して此等の根本的事實は先づ許多の事實を蒐集し比較し而して其が基本となるものを發見することによりて得らるゝなり。凡そ吾人の知識する所は其が證明を追ひ行けば終に一は若干の根本的自同判定に基し一は根本的事實を言表する若干の判定に基するものとなる、而して此等は共に吾人の認識に對しては直接の關係を有するもの、即ち共に他の媒介を要せずして直接に吾人に承認せらるるもの也。生得の觀念も亦其の理由を問ひ質すに於いては件の若干の根本的判定の上に其の證明を求めざる可からず。此等の根本的判定を基として推究し結合し行かば吾人は正確なる知識を組立つることを得べし。斯くまへてライプニッツは其等の根本的判定にそれ〴〵適當なる記號を與へんとし、而

して此等の記號を思想のイロハとなして恰もイロハを以て一切の言辭を造るが如く此等思想のイロハ(alphabetum cogitationum humanarum)を以て凡て吾人の思想を形つくりて人類一般に通用するものたらしめんの企圖を胸中に懷きたりき。

〔一三〕 以上は思ひ浮かぶる想念の方面より吾人の心を見たるもの、即ち其かの知識の邊を說明せるものなり。ライプニッは吾人の想念より離さずして其れの傾向、換言すれば其が更に明瞭なるものとなり行かんとする衝動を說きたり。以爲へらく件の衝動の明かに意識さるゝに至りたるもの是れ即ち吾人の意志なり意志の活動は想念によりて決定せらるゝものにして絕對に自由に決斷するものに非ず、換言すれば其の決斷は其が理由によりて決定さるゝものにして、吾人がしかく思惟せざるは唯そを決定する所以のものが漠然と意識さるゝこと多きが故なり。漠然たる種々の觀念に結ばりて漠然たる傾向衝動あり、而して通常所謂意志の決定は此等に根據して爲さるゝものなれども、吾人は唯意志の決定をのみ明かに意識してそを然らしむる所以の心理的作用を自覺せざるが故に意志は理由なくして絕對に自由に意志自らを決定するものなるが如くに思ふなり。されど意志に於いても想念に於けるが如く幾多の段階ありて極めて漠然たる所より進みて其の發達したる狀態に至る。而して吾人が其等傾向、衝動、意志の充足せられ增大せられたる狀態に進める所には快樂を感じ之れに反せる場合には不快感を起こす。吾人の本能と名つくるものは此等意志的作動中の下級に位するものなり。更に進めば快感を得んとする吾人の好みといふ狀態に至る、されど此等はなほ唯個々の快感に向かふの意志にして其が發達の至れるものに非ず。意志の最も發達したる狀態に於いては吾人に取りての善福を明かに目的として常に之れを求むるに至る。茲に善福といふは一時々々の個々の快感に非ずして、吾人の全躰の活動が益〻完全に成り行く所に覺ゆる幸福の狀態即ち永續したる快樂の狀態と名つく可きものなり、而して吾人の道德の根據こゝに在り。吾人の德行と名つくるものは吾が活動の全くなる所に在り、全くなるとは諸性能の開發し且つ調和したる狀態をいふ、一言に云へば圓滿調和の狀態に進む是れ德に進むなり、而して斯かる狀態に在るや吾人はおのづから快樂を覺ゆるなり。

吾人は啻に自己の活動の進みて完全となり隨うて幸福なる狀態に在らんことを

求むるのみならず自然に他人をも完からしめ幸福ならしめんと力むる傾向を具ふ、而して一切の社會的道德、即ち人と人との間に自然に成立する權利義務はこゝに其の根據を有す。所謂自然の道德法に三段階を分かてば、曰はく第一には何人をも害ふ勿れ」といふ正義の德 (jus strictum) 第二には各、與ふるに其の得るに償する所を以てせよといふ公義の德 (aequitas)、第三即ち最高の段には「禮を盡くせ」といふ、修禮の德 (pietas)、是れなり。

〔一四〕 ライプニッツ以爲へらく、萬有は凡べて調和を現じ居るもの、而して吾人の知識は其の調和を知らんことを以て目的とし吾人の行爲は吾人に於いて圓滿なる調和を實現せんことを力む。而して同しく調和を認知するにも其を明瞭に知るは是れ即ち學理的知識にして、其を漠然と知る所には所謂觀美の感を起こす、換言すれば一物を見て美はしと思ふは其の物に於ける調和を漠然と思ひ浮かべたる也。例へば音樂を聽きて其の美を感ずるは其の音曲に具はれる音律の調和を漠然と認識せるなり。數理上其の調和を明かに意識するは是れ即ち學理上の明瞭なる知識なりと。斯くライプニッツの所說は道德を言ふ上に於いても學理的知識をいふ上に於いても、又觀美的品評を爲す上に於いても其の根本的思想とする所は調和といふ觀念なり、而して所謂調和は其の圓滿、完全、てふ觀念を相離れざるものにして是れ彼れが哲學全躰を貫徹する思想なり。ライプニッツは人と爲り和を好めり。

〔一五〕 宗教論に於いては彼れは當時教會の唱へたる教義を辯護せんと力め、彼れが著『テオディセー』はベールに對して論じたるもの也。ベールは宗教上の教義は道理に合はざるとを言へり。ライプニッツは答へて曰はく、其等教義は悖理のものに非ず、そは悖理とは論理上矛盾を含むか又は理由則に逆ふの謂ひなれど、教會が唱ふる所の教義は決して論理上矛盾を含むものに非ず、また理由則に逆ふものとも云ふこと能はず、凡ての物の存在する理由は究極すれば世界の全躰の目的に存するものにして種々の事物は畢竟件の全躰の目的如何によりて生じ來たるものなるが故に、奇跡の如きも是れ亦た理由則に逆ふものに非ず、其れが生ぜらるべき十分の理由ある所に生じたりと見ることによりて其の毫も怪しむ可きものならぬことを知るべし。唯吾人が其等の理由を(換言すれば全躰の目的を)發見し

得ざる所あるのみ。語を換ふれば、教會の教義には吾人の理性以上のものありと云ふを得れども、之れに戻れるものありと云ふこと能はず。吾人の理性は限りある所のものなり、吾人以上の理性を具ふるものより見れば吾人の解し得ざるものも了解し得らるならん。

〔一六〕　以上は專ら教會の教義即ち天啓によりて教ふるものに就きての論なり。ライプニッツ尙ほ曰く、吾人が自然に具ふる理性をもつて宗教上吾人の知識し得る所のものあり、而して其等は凡ての宗教に於ける神體とも云ふべきものにして吾人の具せるもの、唯そを開發して明かに認識するに至りて所謂自然神學の組織を成す。所謂自然神學の綱領は一には世界以上にその造化主なる神ありと云ふこと、二には吾人の靈魂は不死なりといふと是れなり。吾人が靈魂の不死なるは其のモナドなるとによりて知らる。神の存在に就きては嚮に掲げたる論證、即ち宇宙に於ける調和より推して其の原因として神の存在を知るの論(aposteriori)の外に神の在り能ふと云ふことより其の實に在ることを證するの論(apriori)を加ふるを得、何となれはモナドの最高のものに在りては其れの在り能ふことゝ其の實在することゝが一なれば也、圓滿なるものに於いては其の在り能ふと云ふことは其の實在することゝ合一す、(是れ畢竟中世紀このかた用ゐ來たれる神即ち無限者ふ觀念より必然に神の存在を證明する論のアリストテレースが可能對現實論の彩色を帶ひて其の形を變じたるものに外ならず)。凡べての物の究極は神にして彼れはあらゆる眞理と盛德との淵源なり。神の光榮是れ萬物の向かひ進む目途にして、而して其の光榮は世界の調和を現すること及び生きとし生ける者の幸福なることゝ異別なるものに非ず。

然るに茲に問ふべきことのあるは、斯くの如き目的を以て造られたる世界に何故に災禍の存在するかと云ふこと是れなり。ベールは曾に此の世界は善惡の二元を有すと見るかた事實にかなへりと云ひしがライプニッツは之れに對して道理上より考ふるも此の世界は善良なるものにして前に所謂其が目的と決して相戻るものに非ざることを證せんと力めたり。彼れは先づあらゆる不善を三種類に別かち、一、哲理上より見たる不善、二、物理上の不善、三、道德上の不善となして曰はく、哲理上より見たる不善とは萬物の皆有限なるを云ふ、これは所造物たるものゝ免る

可からざる所にして造られたる個々物が存在する以上は其等は各〻其れ〻の制限を以て存在せざる可からず。而してかく所造物は凡べて制限を有するものなるが故に苦痛即ち物理上の不善と名づけらるゝものゝ亦茲に生ずるは止むを得ざることとなり、何となれば制限され抑壓さると云ふことと苦痛と云ふとゝは全く離れ得べきものに非ざればなり。又かくの如く限りあるものなるが故に罪惡即ち道德上の不善の生ずるも亦た止むを得ざること也。されど此等の罪惡も其の根據する所は制限即ち缺乏と云ふことにて神が罪惡を造れりと云ふことには非ず、神の造れるは唯罪惡を免れざる限りあるものにして而して神は其等のものゝ限りある所よりして罪惡の出で來たるべきを豫知せりとは云ふを得。

以上列擧したる不善を以て限りある所造物の免る可からざる所のものと爲したる上にて更に提出せらるべきは、何故に神が必然に不善を以て伴はるべき有限の個々物を創造せるかといふ問題なり。若し其の如く不善の伴ふことの免る可からざるものならば、初めより其等有限の萬物を創造せざるの勝れるに若かざるに非すや。ライプニッツが之れに對する解答に曰はく、斯く不善は在りながら尙ほ全躰より云へば世界は最も善なるものなり、神の心の中に於いて種々の世界が想念として存在し而して中に就き最も善なるものが選ばれて創造せられたる也。人若し此の世界の最善のものたることを見ずは、そは唯其の一部のみを見て全躰を考へず、また人類の目的及び幸福のみを標準として考ふればなり。世界の善なる所以は其が全躰を見、其が全躰の目的よりして考へざる可からず。

斯くの如く唯世界の一部分のみを見る時は不善なることの多きが如くなれども、其等は全躰より見て不善と云ふ可からざるのみならず、現實吾人の應接する世間に於いても決して不善多しと云ふことを得ず。啻に消極的に、全躰の目的より見ば全世界は最も善きものなるかも知るべからずと云ひ得るのみならず、吾人は現實此の世界の善なることを證明するを得。人動もすれば不善なることの此の世界に多き樣に言ひ做せど實際は然らずして唯吾人は善事には慣れ易く災禍苦痛は些少にても之れを大なる樣に言ひ做すの傾きあるなり。生物の此の世に在るや概ね其の生を樂み生きながらへんことを欲す。啻に善事に比して不善事の少なきのみならず、大なる善を來たさんが爲には寧ろ不善の必要なる理由あり。吾人

の活動を奬勵し隘ひて吾人をして大なる幸福を獲得せしめんには、多少の障碍の吾人を刺戟するもの無かる可からず、多少の苦痛は之れあるが爲に却つて吾人が強大なる快樂を感ずるは、譬へば食物に少許の藥味を添ふることが却つて全躰の風味を增し、音曲に少許の不調子を挿むことが却つて曲全躰の調子を高むるが如し。世に多少の不善の存在するは世界全躰の調子を害ふものに非ずして、なかなかに其を高むるものなりと云はざる可からずと。是れをライプニッツの有名なる樂天論とす。

〔一七〕 以上ライプニッツの哲學を陳述したる所を以ても知らるゝが如く、彼れの所說は一根本的觀念より出立して其を論理的に開發したるものに非ず、寧ろ從來存在せし種々の學說に對し批評を用ひたる結果として種々の思想を發揮し來たり其等が相結合して一大組織を成せるものなり。是れを以て彼れの哲學には種々の見地に屬する思想の多く攝取綜合されたるあり。アリストテレースが哲學の要素もあれば、スコラ哲學の思想も其の痕跡を遺し、ルネサンス時代の大宇宙小宇宙の論もあれば、元子論も攝取され、デカルト哲學及び其れより出でたるオッカ

ショオ論に由來せる要素もあれば、又自ら反對しながらスピノーザの哲學に負へる所もあり。斯くの如く夥多の要素の攝入せられて其處に一の新和合を成せる所是れ彼れが哲學の一大特色なり、而して其の和合は論理的推究の結果として成り上がれるものと云はんよりも寧ろ美術的結構を以て成し上げられたるが如き趣を呈せり。故にライプニッツの哲學は全躰より見れば調和てふ觀念を主眼として一種の美術趣味を帶びたる所あれど、深く其の內部に立ち入りて考ふれば未だ其が諸要素の調和の成らさる點あるを認め易し。彼れの哲學組織の中に於いて最も不調和を感ずるは祭といふ觀念なり。彼れの所謂神はモナドの調和を說かんが爲に止むを得ず外より附け加へたるが如き趣あり、蓋し彼れの所謂衆多のモナドの想念する所が何故に相調和するかを解す可からざるが故に、其の調和を豫定したる神ありと說きて神なる觀念をモナドの頂點に添へたるが如きものにして其の觀念の地位の甚だ安からざるは深く考へずして明かなり。彼れはモナドを以て一切他によりて强響せられざる本躰と爲しながら又其れが奇跡的に神によりて創造せられたることを說かざるを得ず。之れを要するに、彼れの說く所はオッ

カッオ論に附着する困難と同一の困難に觸れざるを得ざるなり。

次ぎに吾人はライプニッツが所謂モナドの想念する事柄の何なるかを知るに困まざるを得ず、換言せば其が想念の內容の何なるかを了解し難し。何となれば彼れは各モナドは其の自性に具ふる所を自發するものなりと說くものから、其が自發する想念の何なるを尋ぬれば、是れ他のモナドの狀態を縮寫せるものに外ならずと云ふ而して他のモナドの狀態は何ぞやと尋ぬれば是れ亦他のモナドの狀態を表現するものに外ならずと云ふ。されば到底各モナドの想念は他のモナドの狀態を表現するもの也と云ふに止まれば、恰も寫すものゝみありて寫さるゝ內容の來たる所なきの難に陷る、換言せば一モナドは他を表現し而して表現さるべき他のモナドに何事のあるかと尋ぬれば其はまた他を表現すと云ふに止まる。されば想念さるべき事柄の出で來たる所以は竟に之れを解すべからず、若し其の事柄を得んとすれば唯之れを神といふ原因に歸して、神は各モナドにそが想念の內容を與へたりといふ說明に其の隱れ家を求めざる可からず。之れを要するに、ライプニッツは竟に說明に困却せるの極、神てふ觀念を借り來たりて、あらゆる困難を之れに投じ込むが如き究策を用ゐざるを得ざるに至れるなり。是を以て彼れの所謂神は唯此等の困難を救ふの究策として、提出されたるもの(deus ex machina)に外ならずと評せらるゝなり。

斯くの如くライプニッツの哲學に少なからざる困難の點あるは畢竟彼れが多元を說きて其の各〻を獨立のものとしたる上に尙ほ其の一致を說明せんとすれば也。換言すれば彼れはスピノーザの萬有神說に陷らざらんとして多元說に走れると同時に多元說の困難に陷れるものと云ふべきなり。斯くの如く彼れが哲學に困難の點はあれども連續律を根據として唱へ出でたる其が種々なる思想の中には後世の學界に記憶せらるべきもの少なしとせず。殊に彼れが心理上の所說の如きは今日に至るも尙ほ大に價値ありと云はざる可からず。

第三十六章　ヂルフ及び其の學派

〔一〕　ライプニッツは其の哲學思想を組織的に叙述することを爲さず、且彼れが學說を說ふに肝要なる論文及び書翰等は廣く世人の見るを得るの便を缺きたる

ものなりき。彼れに次ぎて起こり其の哲學の主要なる思想を取りて其を組織的に論述し且つ廣く之れを當時の學問界に傳へたるはクリスチアンヴルフ(Christian Wolff)の功績なり。ヴルフは一千六百七十九年を以てブレスラウに生まれ後イエーナ大學に入りて數學、物理學、哲學及び神學を修め殊にデカルト及びライブニッツを研究して大に得る所あり、又ツィルンハウゼンの書を讀み且つ後には其の著者とも相知りて其が思想の影響を受けたり。彼れが論述の組織的方面に於いて大に具はれる所あるはツィルンハウゼンが學術研究法の論に得たる所ありしに因ると考へらる。彼れ後にハルレ大學に招かれて數學の教授となりしが、其の後該大學にて哲學の講義を以て大に名聲を揚げたり。されどピユーティスト派の宗教家等は彼れが唱導したる唯理説を危險なるものとして彼れを排斥せんとし、其の説を曲解して其の唱ふる所に從へば國王に屬する兵士の脱走するも敢て咎むること能はざる如きことゝなるとの旨意を時の普漏士王フリードリヒ、ヰルヘルム第一世に告げて彼れを陷れんと試みるに至れり。ヴルフは遂に此の詭計のために陷れられハルレを逐はるゝことゝなり、四十八時間以内に國王の地を退去せずば笞刑に處せらるべしといふ條件の下に追放せられぬ。ヴルフは是れよりマルブルグに行き其處の大學に教授となりて一千七百四十一年に至りしが、フリードリヒ大王位に即きて後またハルレナに召喚せられ、一千七百五十四年即ち其の死に至るまで其處の大學に在りて教授に力めたり。

〔二〕 ヴルフが獨逸の哲學に致せる特殊なる功績の一は獨逸語を以て哲學を論ずることに力めたるに在り。當時に至るまで獨逸の學者が哲學を講ずるや概ね拉丁語或は佛蘭西語を用ひ、ライブニッツの如き亦爾したりき。然るに此の頃より次第に獨逸語の用ゐらるゝに至り獨逸語をも哲學を叙述するに堪ふるの國語と爲したることに於いてはヴルフが力の與れる所頗る多かりき。彼れが造りたる哲學上の用語が模範となりて後代の用法を定めたるもの少なからず。

右の外ヴルフが功績の一に數ふべきは、彼れが(上にも既に一言せる如く)哲學を組織立てゝ叙述せること是れなり。彼れに從へば哲學は凡そ可能なることの全躰を攻究するものにして其の立てたる組織に曰はく、吾人の心には知識の能力(facultas cognoscitiva)と意欲の能力(facultas appetitiva)との二あり是れライブニッツの所説に

山來せるもの)而して哲學には此の二者の各〻に關係する部分即ち二部門あり。一は理論的方面にして純粹に吾人が知識の能力に屬するもの、之れを稱してメタフィジカ(純理哲學)といふ。次ぎに意欲の能力に關係するものは吾人の行爲を論するものにして之れを實踐哲學(philosophia practica)といふ。而して件の哲學の二部門に入るの準備として論理學(Logica)の一科あり、是れ哲學的研究に於いて其れが純理哲學たると實踐哲學たるとを問はず常に吾人の從ふべき思想全躰の成立及び運用の方法を論ずるものなり。純理哲學を分ちて總論及び各論とす。總論といふべきは實在其の物に就きて全躰の研究を爲すもの、換言すれば實在が如何なる特殊の形を取れるに拘はらず一切實在と云はるべきものに通ずる事相を論ずるものにして之れを實躰學(Ontologia)といふ。而して各論は更に三部分に區別せらる。第一は世界の成立を研究するものにして之れをコスモロギア(Cosmologia)といひ、第二は心に關する研究にして之れを心理學(psychologia)と云ひ(心理學に對して云へはコスモロギアは廣き義にての物理學と謂ふべきもの也)而して第三は心界及び物界の全躰の原因なる神に就きて論ずるものにして之れを神學(Theologia)といふ。次ぎに實踐哲學も純理哲學と同じく總論と各論とに分かる。其の總論は實踐哲學全躰の基礎と見るべきもの、論にして之れを(philosophia practia universalis)と云ひ而して各論と見るべきものは亦三部に分かたる、吾人を個々人として論ずるものにして之れを道德學(Ethica)と云ひ一家族を成すものとして吾人を論ずるもの之れを經濟學(Oeconomica)と云ひ、國家なる團躰を成すものとして吾人を論ずるもの之れを政治學(politica)といふ(此の區別はアリストテレースに由來せり)。

〔三〕 哲學攻究の方法よりいふ時は究理(又は唯理)學派の特色は其の極端の形を具して特に明かにヂルフの思想に現れ來たれるを見る。彼れに從へば哲學は吾人の概念を以て推究し行くもの、專ら分析を用ゐ行くものなり。此の故に彼れの立脚地よりすれば吾人の出立點としたる所の概念を分析して其の中に含まれたるものを分かち出だすによりて能く吾人の一切の哲學的智識は組成せらる。是れ正さしくデカルトが其の疑ふべからずとしたる自我の意識より出立して論歩を進め、スピノーザが本躰の觀念を根據として推究したるの論法を尙ほ一層明かに演繹的のもの又概念的のものと爲したるなり。斯の如くヂルフに從へば哲、

學の研究は種々の事物を經驗し其の經驗に基きて攻究を進むものに非ずして先づ吾人が心を以て形づくれる根本的概念より出立して演繹的に進み行くものにして、是れ彼れに於いて唯理學派の攻究法が經驗學に對して最も極端の位置に達せる者と見らるべき所なり。ヂルフは斯く哲學研究を以て專ら演繹的のものと見たりしが、彼れはまた其の傍に經驗上の事柄を取扱ふ所の學問をも置き、概念の推究を以て進み行くものと經驗的事實を蒐集し行くものとの二者はおのづから相並び行くもの也とし、又眞實の學問に於いては前者は後者によりて實例を供せらるゝもの也とせり。此故に彼れがコスモロギアに於て物理の論を爲すに方たりては其が出立點となる概念より論理的に其の凡べての知識を演繹するものゝ外に實驗的に(experimentell)攻究しゆく物理學をも置けり。彼れ以爲へらく、物界に生起する一切の現象は物躰を組織する細微分子(coposcula)と其の運動によりて起こり來たる。而して物理學には此の二者に關する概念より出立し、經驗を待たずして物理的に造り上ぐるものと物界の經驗を多く蒐集しゆくものとの二種あり、前者は原理を立つるものにして、後者は原理の行はるゝ實例を供するものなりと。

心理學も亦之れと同じく、心理學上の材料を蒐集し行く者即ち經驗的心理學(psychologica Empirica)と吾人の心といふ概念(換言すれば想念する力を有するものと云ふ觀念)より心理上一切の作用能力を論じ出だすもの即ち純理的心理學(Psychologica Rationalis)との二つに分かる。ヂルフか論述の方法は斯くの如く一方に於ては經驗的研究に基するものを許容したるのみならず、彼れが實際爲せる所を見れば單に概念の推究によりて進み行く方(即ち純理の方)に於いても常に吾人の經驗より得たる觀念を挿み來たれること明かなり。されど其の目的と爲せる所は兎に角明かに唯理學派の傾向を極端まで持ち行けるものにして、此れは彼れが論述の方法とライブニッツのとを比べ見れば明かに了解せらるべし。ライブニッツは吾人の理性が用ふる原則として自同則と理由則とを並べ掲げたれども論理的に一より他を論じ出だすとは試みざりき、ヂルフは之れを試みて謂ふところ理由則も畢竟ずるに自同則より出でたるものに外ならずと爲せり。其の意に曰はく、若し一物の存在することに全く其の理由なかりせば、由りて以て其の存在する所以を了解すべきもの無きが故に、其の物は無より出でたりと見ざる可からず、然るに無より

は何物も生じ出でざるべし、此の故に凡べての物は其れの存在する十分の理由を以てして初めて存在し得べきものなりと。斯くしてヂルフは單に論理的思考を以て理由則を證明せんと試みたれども、其證明の無効のものたることは見るに難からず。何となれば彼れの證明は循環論證の似而非推論に陷れゝばなり、そは彼れは理由則を論證せんとして無よりは何物も生ぜずと云へど、無よりは何物も生ぜずと云ふことが既に理由則を假定し居ればなり。

ヂルフが學説の長處は其の組織的なる點に在り。其の論旨は(假令彼れはライブニッツの學徒たりと云はるゝことを甘諾せざりきと雖も)概ねライブニッツに由來せるが故に茲に委しく之れを繰り回し説くの必要なし。唯特に取り出でゝ注意する價値ありと思はるゝ三四の點をのみ左に摘出せん。

〔四〕 ヂルフは全く定限されたる者を以て實在の相となし個性を具へたるものゝ外に實在なるもの無しと見たり。蓋し個別の原理に從ひ個々物として其の定相を具へたるもの是れ實在なりと云ふことはライブニッツが已にスピノーザに對して唱へ出でたる多元説の見地をば更に言表せるものに外ならず。斯く實在は個々各、定相を具ふるもの而已は以ゐ各、をして定相あらしむる所以の原理は即ち理由則にして、其れに定相を與へし所以が其の物自身に在る時には其は絶對に必然に存在するもの、換言すれば自存のもの(a se)なり、若しまた其れに定相を與ふる所以のものが他に在る時は其の依他のもの(ab alio)即ち偶然のもの、換言すれば他に依りて初めて必然に存在するものなり。ヂルフが斯く説ける所は是れライブニッツ風の思想にスピノーザ風の思想の加味せられたるものに外ならず。ヂルフは物界を以て一の機械と見做せり。以爲へらく凡そ物界に生起する事件は皆機械的に必然に出來するものにして、物界の最小部分と雖も其の現實あるに異なりて在らんには全物界の別世界となることを要す。斯く物界の事は凡べて必然に起こるものなれど、こは畢竟、依他の必然にして唯他に一の物理的變化ありしに依りてこゝに亦一物理的變化の必然に起こるもの也。かるが故に物界に於ける一變動は唯他に一變動ありしが故に然るのみにて、此の機械的必然の關係を以ては物界全躰の然る所以を説明するに足らず。物界全躰の然る所以を説明せんには目的觀を持ち來たらざる可からず、即ち世界の存在するに宜しき目的のあるが

は何物も生じ出でざるべし、此の故に凡べての物は其れの存在する十分の理由を以てして初めて存在し得べきものなりと。斯くしてヲルフは單に論理的思考を以て理由則を證明せんと試みたれども、其證明の無効のものたることは見るに難からず。何となれば彼れの證明は循環論證の似而非推論に陷れゝばなり、そは彼れは理由則を論證せんとして無よりは何物も生ぜずと云へど、無よりは何物も生ぜずと云ふことが既に理由則を假定し居ればなり。

ヲルフが學説の長處は其の組織的なる點に在り。其の論旨は(假令彼れはライブニッツの學徒たりと云はるゝことを甘諾せざりきと雖も)概ねライブニッツに由來せるが故に茲に委しく之れを繰り回し説くの必要なし。唯特に取り出でゝ注意する價値ありと思はるゝ三四の點をのみ左に摘出せん。

〔四〕 ヲルフは全く定限されたる者を以て實在の相となし個性を具へたるものゝ外に實在なるもの無しと見たり。蓋し個別の原理に從ひ個々物として其の定相を具へたるもの是れ實在なりと云ふことはライブニッツが已にスピノーザに對して唱へ出でたる多元説の見地をば更に言表せるものに外ならず。斯く實在は個々各々、定相を具ふるもの而已。

個々各々をして定相あらしむる所以の原理は即ち理由則にして、其れに定相を與へし所以が其の物自身に在る時には其は絶對に必然に存在するもの、換言すれば自存のもの(a se)なり、若しまた其れに定相を與ふる所以のものが他に在る時は其の依他のもの(ab alio)即ち偶然のもの、換言すれば他に依りて初めて必然に存在するものなり。ヲルフが斯く説ける所は是れライブニッツ風の思想にスピノーザ風の思想の加味せられたるものに外ならず。ヲルフは物界を以て一の機械と見做せり。以爲へらく凡そ物界に生起する事件は皆機械的に必然に出來するものにして、物界の最小部分と雖も其の現實あるに異なりて在らんには全物界の別世界となることを要す。斯く物界の事は凡べて必然に起こるものなれど、こは畢竟、依他の必然にして唯他に一の物理的變化ありしに依りてこゝに亦一物理的變化の必然に起こるもの也。かるが故に物界に於ける一變動は唯他に一變動ありしが故に然るのみにて、此の機械的必然の關係を以ては物界全躰の然る所以を説明するに足らず。物界全躰の然る所以を説明せんには目的觀を持ち來たらざる可からず、即ち世界の存在するに宜しき目的のあるが

爲に此くの如く機械的關係を以て變動する物界ありと考ふるより他に之れを了解するの道なきなり。

世界の存在する目的は畢竟するに其が圓滿の相を現ずることに在り、換言すれば其れが最も完きものなるが故に存在するなり而してゲルフは物の完きといふことを說きて多なるものゝ一致なりと云へり、蓋しライプニッツの所謂調和と完全とが同一にせられたるものに外ならず。

〔五〕 空間に廣がれる形を有する物躰は悉れ即ち吾人に現れたる樣(phenomena substantiata)にして其の眞實の相は廣がりを有するものに非らず。其の眞實の相は個々の力にして其の一々は凡べて單一なるもの也、ゲルフは之れを活力と云へるのみにて凡べて其れに想念する力の見はるゝことを說かず故に彼れはライプニッツの用ゐたりしモナドといふ語を用ふることを避けて寧ろ多く自然原子(atomi naturae)といふ語を用ひんとせり。此の所ゲルフがライプニッツの說より離れたる最も著き點なり。彼れに取りては想念する力あるものは唯吾人の有するが如き靈魂のみ吾人の靈魂は意識を有し而して意識は統一作用を有す。靈魂が意識の統一作用を有することは以て其れの單一なるものなること換言すれば他の物の結合によりて初めて成れるものに非ること、即ち其の本躰なることを證するに足る。

ゲルフがライプニッツと其の說を異にせる他の一の著き點は豫定の調和の範圍を堺限せる所にあり。ライプニッツは凡べてのモナドに就きて豫定調和論を說きたりしがゲルフは唯其を吾人の心身の關係に就きてのみ云へり。此等の點により て考ふれは彼れは其の主要なる思想をライプニッツより得たるものにして而して其の相異なる點は重に唯彼れがライプニッツの說をなだらかならしめて却りて其が特殊の意義風趣を埋沒せしむる加き結果に立ち至れる所にあり。

〔六〕 以上述べたる所よりもゲルフがライプニッツに對して獨立の地位を取れるは其が倫理及び法理に關する論なり。此の方面に於いては彼れはグローシウス及びプーフェンドルフを研究せるによりて得たる所少なからず。彼れは先づ吾人が道德上の目的を明かに幸福と區別して完全になることに在りとせり。所謂完全になるとは一には其の活動が活動する者の本性に相合することを意味す、換

言すれば眞實の性より見て其の物の當に在るべき樣に其の物の現實の樣の合したるが即ち完全なるなり、之れに加へて又吾人の行爲が行爲の結果と相調和することに完全といふことなり。所謂幸福は唯完全に達せる狀態に於いて附加せらるゝものに外ならず眞正の幸福は吾人の眞心が其の如き狀態に在ることを嘉する所に存するもの也。ヂルフは斯く明かに幸福と完全になることゝを相分ちて道德上の目的を說けりしが故に、倫理學上所謂完全說がライプニッツに於けるよりも彼れに於いて更に善く其の形を成せりと云ふべし。彼れ尙以爲へらく、一個人の完全になることは他人の完全に成ることゝ相離れたるものにあらず、是れ吾人がおのづから夫婦親子及び主從の關係を成して一家を形つくり又家族相集まりて更に大なる社會を形づくることの必要なる所以なり。社會を組織したる民約の根據は畢竟するに人々各々完全にならんとするの目的に在り、國家全躰の安寧を增進すること是れ國家の最高法律なり、安寧ならずんば人々相互に完全の域に達することを能はず、而して件の國家に於ける最高法律よりして凡べての法理を論じ出だすことを得と。

〔七〕 ヂルフが哲學の大要は以上叙述せる所によりて知るを得べし。而して彼れの哲學は整然たる組織を成し且つ何人も採用し易き研究法を以て說き出だせるものなるの故を以て、一時獨逸の學問界は靡然として此れに傾き茲に所謂「ライプニッツ、ヂルフ學派」を成し、アンドレアス、リューディゲル(Andreas Rüdiger. 一六七三—一七三一)クリスチアン、アウグスト、クルーシウス(Christian August Crusius. 一七一二—一七七六)等の如きありて多少之れに對して反對の聲を擧げしかども獨逸の哲學界はなべて此の學派の押領する所となれり。今此の學派に屬せる者の中著名なる人々を擧ぐればルードヰヒ、ヒリップ、ティムミュ(Rudwig Philipp Thümming 一六九七—一七二八)ゲオルグ、ベルンハルド、ビルフィングル(Georg Bernhard Birfinger. 一六九三—一七五〇、此の人初めてライプニッツ、ヂルフ學派といふ名稱を用ひたり)アレクサンデル、ゴットリーブ、バウムガルテン(Alexander Gottlieb Bummgarten.)ゲオルグ、フリードリヒ、マイエル(Georg Friedrich Meirr. 一七一八—一七七七)等にして中に就き最も吾人の注意を惹くべきをバウムガルテンとす。

バウムガルテン

〔八〕 バウムガルテン(一七一四—一七六二)はヴルフが組織的に攻究せる所を

ば更に歩を進めて其の詳細なる點にまでも整然たる形を與へんと企てたり又哲學上の用語の彼れに定められたるものが後にカントに用ひられて長く後世に傳はれるもの少からず。彼れが說ける所の中最も後世に記憶さるゝは美學上の論なり。畧にヴルフは其の謂ふ純理哲學及び實踐哲學に入る前に學問研究の順序として論理の學を置けり而して論理學とは吾人が事物を明瞭に知識することに於いて思想の成立及び規則を論するものを謂ふ。而して吾人の知識は、ライプニッツの說く所に從ふ者なれば、漠然たるもの即ち感官を以てする所の者と、及び明瞭なるもの即ち所謂知解に屬するものとの二段階に分かる、前者は下等のものにして後者は高等の者なり、然るにヴルフの論じたるは唯高等なるもの即ち論理學に止まりて終に下等なるものに論じ及ばざりき。此のゆゑにバウムガルテンは以爲へらく吾人の知識の論(彼れの所謂 Gnoseologie)を全からしめんにはヴルフの說きたる論理學を說くに先だちて感官の知覺を論ずるものを置くべしと、而して彼れは之れをエステーティカ(Aesthetica これは希臘語より來たりて元と感官の知覺を論ずるものと云ふほどの意味を有せる語)と名づけたり。彼れ以爲へらく、吾人の知識は其の漠然たるものなるとを明瞭なるものなるとを問はず共に完全なるものを以て其の對境とすと。ライプニッツ已に事物の完全の相を明かに知識する是れ即ち學理的知識にして、其を漠然と認知する、是れ即ち美を認むる心の狀態なりと云へりしが、バウムガルテンの審美說に要するに此の思想を開發し行けるものなり、之れに從へば亦吾人が明瞭なる觀念を以てするの判定は此れ知解の判定にして論理的のもの漠然たる觀念を以てしたるの判定は觀美の判定即ち品評と名づくるものにして是れ感官的のものなり。斯くしてバウムガルテンに取りては吾人の感官の知覺を論ずるもの是れ即ち吾人の觀美心を論ずるものとなりたり。彼れが所謂エステーティカは此の理由によりて後世美學といふ意義を帶ぶることゝなり、又此の故を以て彼れは初めてかゝる名稱を用ゐて哲學組織中の一部分として斯の學を論ぜんとせる者なりと云はるゝなり。

彼れ說いて曰はく完全とは一物が其の物の本性即ち概念に相應するの謂ひなり、

而して吾人が明瞭なる知識を以て其れを了解すれば茲に眞理を得たりと稱せらる。又吾人の心作用の中に就き意欲の方面を以て之れを接すれば件の完全といふことは吾人の當さに得んとすべき善と名づくるものとなる。又吾人の漠然たる感官の知覺を以て之れを接すれば其は茲に美として吾人に認めらるると。斯くの如く眞善美の三者が明瞭に區別されたるは美學に於ける一大進歩と云はざる可からず。此の故に美と名づくるものは畢竟事物の完全なる相に外ならず唯其の相が吾人の五官に現れたるの樣(perfectis phaenomenon)なるのみ。而して美に於いて吾人が看取する一事物の完全の相は吾人の感官的知覺が其の事物の概念に相應する所に在るものなるが故に言を換へて美は吾人の五官を以て知覺する調和に在りといふも可なり。而して事物の相が其の本性に調和し居る所は美に於いては正さしく其が部分相互の調和及び部分と全體との調和として現れ來たる。自然界は最も完全なるものを目的とする造化主の活動の作る所なるが故に美なるものゝ最高模範なり、從ひて吾人の作爲する美術の模範も亦こゝに存するなり。此のゆゑに自然を模倣すと云ふことが美術家の最高目的となり來たる。斯くの如くライプニッ、デルフ學派はバウムガルテン等の唱道によりて獨逸の學界に偉大なる勢力を振ふことゝなり、而して此の學派が哲學思想發達の上に功績を遺せるものあるは固より認めざる可からざる事なれども、デルフに至りては唯理學派は其の極端に至れると共に最も明瞭に其が弱點を發表し來たりたり。彼れは概念より出立し之れより論理的に演繹して全哲學を組織すといふを其の主眼と爲したれとも、其の實際に爲す所を見れば唯だ論理的に演繹し來たるのみに非ずして常に吾人が經驗によりて得たる種々の事件を挿入せり。哲學的研究が概念の分析に止まり居る間は吾人の知識は新しく其の歩を進むること能はず以て能く吾人が知識の事柄なる千差萬別の事物を捕ふるに足らざることは此等學派の人々の實際論述したる所によりて容易に認めらる。又彼等の出立點とする所謂概念其のものは何處より得來たれるぞと尋ぬれば吾人の思想は茲に其の方向を轉じて別路を取らざるを得ざるべし。吾人は經驗に依らずして概念を形づくり其を確實なる論理的研究の根據と爲すことを得べきか、凡そ吾人の思想を組織する觀念は如何なる起原を有するものなるぞ、這般問題を提出して歐洲近世の哲學に

一大潮流を起こせるを彼のロックによりて最も明瞭に唱へ出だされたる經驗學派の哲學とす。而して此の經驗派哲學はライプニッツ、ヴルフ學派が獨逸の學界に瀰漫したる時には已に英吉利及び佛蘭西に於いて其が種々なる發達を遂げ居りし所のものなり。予輩はライプニッツ、ヴルフ學派以後獨逸に於ける廣くは歐洲に於ける哲學史上の新時期に入るに先だち眼を經驗學派の哲學に轉ずべし。

第三十七章　ヂョン、ロック

〔一〕

實驗哲學の故郷とも云ふべきは英國なり。ベーコン出でゝ早く已に自然科學に於ける實驗的研究の必要及び其の方法を論じ、ホッブス次ぎて當時の自然科學の根本的思想を取りて其が哲學を組織せんと試みたりき。されどベーコンの功績は專ら自然科學の精神を說ける所に在りて其の所說は能く經驗哲學の組織を成せるものと云ふべからず。又ホッブスは自然科學の根本思想を採用したれども其の攻究の方法は專ら演繹的なりしが故に彼れの哲學は寧ろ一種の究理派學說たるの趣を帶びたり。彼等の後に出でゝ最も明かに實驗哲者の建設を爲さんと力めたるをロックとす。故に或は彼れを名づけて歐洲近世哲學に於ける經驗學派の開祖ともいふ。但しロックの說ける所は經驗主義に基づけるものとは云ふものから、委しく考ふれば尙ほ彼れの思想には究理學派に在りてのみ許し得べき假定を含有する所少なからず、殊に其の思想の明かにデカルトの哲學に影響せられたる所あるを認めずんばあらず。されど大躰上先づ最も明かに經驗哲學を唱へ出でたる者は彼れなり。經驗主義に基きて考ふれば未だ彼れの所說に滿足す

る能はざる所あること、是れ爾後此の學派發達の動機たりしなり。

〔二〕　ヂョン、ロックは(John Locke)　一千六百三十二年八月二十九日を以て英國ブリストルの邊りウリングトンと云ふ邑に生まる、父は法律家にて彼の內亂の起れるに際してはパリメントに黨與したり。ロックは一千六百五十二年オックスフォルド大學に入りしが當時尙ほ其處に說かれたりしスコラ哲學風の思想には甚だ慊焉たらず、其の頃よりデカルトの著書を讀みて大に哲學上の興味を覺え、且つガッセンデ及びホッブスをも研究せり。メーシャム女史の記せる所によればロック自ら屢〻語りて彼れデカルトの著述を繙きて始めて哲學の書を讀むの興味を覺えたりと云へりと。當時英國は恰もクロムエルが統治權の下に在りし時にしてオックスフォルド大學に於ては思想の自由を束縛せず、殊にロックの在りしクライスツ、カレッヂ學長ヂョン、オーエンは宗敎上寬容に富めりし當時の名士にしてロックは少なからず此の人の感化を受けたり。彼れ初めは宗敎家たらんと志したりしが、王權復興して後は英吉利の監督敎會ピュリタン宗派に取りて代はるとなりしかば、其の自由なる宗敎上の懷抱は彼れをして敎職を滯ぶるの念を斷たしめたり。後又彼れは醫師とならんと欲して醫學及び化學の研究に心を傾けたりしが、醫師も亦彼れが身を立つるの職業にはあらざりき。一千六百六十五年サー、ヂョーダー、エーンがブランデンブルグの宮廷に使するに方たり其の書記官として行けり。翌年オックスフォルドに歸りて其處にロールド、アンソニー、アシュレー即ち後のシャフツベリー侯(Lord Anthony Ashley, Earl of Shaftesbury)と相知り爾來其の交情益〻親密となり後に侯が家に師傅及び侍醫として招かれ又侯のためには常に或は書記として或は顧問として助力を與へたり。一千六百六十八年にはノルソムバーランド侯に伴はれて佛蘭西及び伊太利に旅行せり。彼れは政治上に於いても宗敎上に於けるが如く自由主義を懷き盛んにホイッグ黨の政論を主張し後にシャフツベリー侯の政府に立つや彼れまた登用せられたりしが一千六百七十三年侯其の位地を失ひロックも亦從ひて其の官を失へり。千六百七十五年療養のため佛蘭西に行き、千七百七十九年シャフツベリー侯再び朝に立つや彼れ亦召されて歸りしが、侯久しからず貶せられ一千六百八十三年は自ら身を以て英國を逃れざるを得ざることゝなりし時にロック亦後を追うて和蘭に行き、其處に滯在せる間著作を事とし又當事の名士と交るとを得た

りしが又時には本國よりの嫌疑のために名を變へ潜伏せざるを得ざりしともあり。一千六百八十八年オレンヂ侯ヰルリアム英國の王位に即き翌年ロック英國に歸り爾後正く王に用ゐられて當時の政策及び英國立憲政治の基礎を固くすることに與かりて大に力ありき。

ロック和蘭に在りし時拉丁語を以て書翰の躰裁にものしたる信教自由を論ずるの書を著し千六百八十五年其の第一書を公にし(但し匿名にて)一千六百八十九年更らに其の第二書及び第三書を出版せり("Epistola de Tolerantia") 其の後一千六百九十年其の哲學上の大著吾人の知解力を論ずるの書(Essay on Human Understanding)を公にせり。此の書は一千六百八十七年即ち彼れが和蘭に在りし時已に全く完了せしものにして彼れ自らものしたる其の梗概は其の翌年佛蘭西語に翻譯せられて當時和蘭にて彼れの一友人の發兌せる雜誌『ビブリオテーク、ユニヴェルセル』("Bibliotheque Universelle) に掲げられたり。ロックがこの書を著さんと志しゝは一千六百七十年又は七十一年の事にして彼れが數年間佛蘭西に滞在したる時にはまさに其の著作に從事し千六百七十九年には既に大抵に其の業を卒へたりしものゝ如し。ロック自ら其の書を序文に記して曰はく「曾て數人の朋友等と論議したりし時其の論議の問題が滿足なる解釋を得ざりしより已れおもへらく其等の事柄を論議する前に先づ吾人自らの能力を研究し而して吾人の知解力が如何なる事柄を取扱ふに適し如何なる事柄を取扱ふに適せざるかを見分くることを要すと」而して件の著作に志したりと。英國博物館に保存せられたるロックが此の書の一古本に彼れの友ヂェームス、ティルレル (James Tyrrel) の手記せる語あり、曰く「回顧すれば我れ亦其の折の討議の席に列りし一人にて道德及び天啓的宗教の原理に就きて論ぜられたることを想ひ起す」と。一千六百九十年彼は政治論二編(Two Treatices on Civil Government) を出版せり、是れ即ちオレンヂ侯ヰルリアムを英國に迎へたる政事的革命の正當なることを論じて英國立憲政治の基礎を堅固にせんと力めたるものにして爾後の憲法政治論に於いて大に重きを爲せる著述なり。一千六百九十三年には『教育意見』(Thoughts on Education) 同九十五年には『基督教の合理なることを論ずるの書』(The Reasonableness of Christianity as delivered in Scriptur) を出版せり。宗教上にロックは當時の神學者等の攻擊を受けたりしが其の攻擊は彼れの神學よ

り延きて其の哲學に及べり。彼れを攻擊せし敵手の最も有名なるは監督スティリング、フリート (Stilling Fleet) にして、ロックも亦屢之れに答辯したりき。其の攻擊の劇しかりしや、オックスフォルド大學にては彼れの『知解力論』を用ふることを禁ずるに至れる程なりき。ロックは終生娶らず、晩年にはケムブリッジの哲學者カッドチルスの女婿メーシャム氏 (Masham) の家に寓し一千七百〇四年十月二十八日其の家に沒せり。彼れ資性温厚、朋友に對して交情頗る厚く、又常に思想上及び政事上の自由を主張し人權を擴張することに熱心せり。

〔三〕 上に引けるロックが其の大著に序せる語を以ても明かなるが如く彼れが哲學的研究の主眼は吾人の智識の起原、成立、及び其の界限を明かにせんとするに在り、即ち彼れの此の思想に於いて知識論の研究は歐洲近世の哲學に先つ最も明らかに提出され且つ哲學の主要の部分と爲されたり。是れより先き吾人の知識に關する多少の論は已にデカルトにもスピノーザにも又其の他の學者の所說にも存したれども明かに知識の成立を研究することを哲學攻究の出立點と爲したるはロックを以て嚆矢とす。一言に云へば吾人の知識其のものよりも寧ろ實在の

相に眼を着けたる從來の見地より移りて吾人の知識其ものを以て先づ研究の對境となしたること、是れ近世哲學に於いてロックの占め得たる特殊の位置なり。以上の目的に從うてロックは先づ吾人の觀念の由來を穿鑿することを以て其の研究を始めたり。彼れ問ひ起こして曰はく、吾人に生得の觀念と名づくべきものありやと。而してみづから答へて曰はく、之れ無しと。かくて彼れは力を極めて生得觀念論を攻擊せり。先きにデカルトは生得の觀念といふ語を用ゐたりしが、彼れの用方に二つの意義の交はれることは已に彼れが哲學の條下に述べたる所なり。而してデカルト以後此の語を用ふる學者等は、彼れの先づ用ゐたりし意味即ち直接に明かなる觀念といふ意義に用ひずして專ら生まれながら具有すといふ意味に用ひたり。英國に於いてはケムブリッジの新プラトーン派學者の如きは此の語をかゝる意義に用ひたり。而して此の意義にて生得の觀念の存在を主張する人々は多くは其の觀念の人類に遍通なること、即ち萬人の一致すること (consensus gentium) を以て其の理由となせり。ローレルト、ハーバートは實に此の論法を用ひて自然道德及び自然宗教の基礎となる觀念を立てんとせり。ロックが之れに對

する所に曰く假令萬人の悉く有する觀念ありとするも、其の事は未だ以て其等の觀念の生得なることを主張するの理由となすに足らず。假りに世に無神論者なる者なしとするも、神の存在を信ずる心を以て吾人の生得のものとなすこと能はず、何となれば吾人は皆同一の世界に住居し世界の事柄より推究して初めて其の如き觀念に達したりとも考へらるればなり。一言に云へば人類は凡べて生活上同樣なる事柄に接するの故を以て若干の同樣なる觀念を懷けるに至れりとも考へらるべければなり。斯くの如く萬人に通せりといふことが、以て其の觀念の生得たることを證するに足らざるのみにはあらず、萬人に通ずといふ其の事がまた明瞭なる事實として承認せらるべきものにあらず。道德上の規律と雖も諸種の人民に通じて悉く同樣なるものを擧ぐること難く且つ數理及び物理上の原理の如きものも亦た小兒野蠻人等に於いては見るを得ず。蓋し吾人は實際其の如き原理を生來思ひ浮かべ居れるものにあらず、通則と云ひ一般の概念といふが如きものは吾人が多くの個々の事物に接したるの後初めて思ひ浮かぶる所のものなり。人或は言はん、其等原理通則等の觀念を有せるが如く思はるゝものあるは、本來具有したるものが唯其の境遇習慣等によりて埋沒せられたればなりと。されど境遇習慣等によりて埋沒せらるゝの恐れなき小兒等に於て之れを發見せざるを奈何にせん。又或は辯じて曰はん、其等の觀念の小兒及び無敎育者等に存せざるが如くなるは是れ唯彼等の心の未だ其れらの觀念を思ひ浮かぶるまでに發達せざればなり、野蠻人と雖も若し其の知力を充分に用ひ得るまでに進歩せば、必ず其等の觀念を思ひ浮かべ來たるべきなりと。されど若し吾人の知力が進歩したる時に及びて初めて思ひ浮かべ得る觀念を以て生得のものとなさば、如何なる觀念と雖も亦それと均しく生得のものなりと云はるべし。何となれば其等の觀念を思ひ浮かぶるに適當なる準備を其の心に具へたらんには其の觀念の何たるを問はず何人も之れを思ひ浮かべ來たることを得べければなり。故に尙ほ生得觀念の存在を主張せんと欲する者は唯吾人が其の觀念を意識せずして心に有せるなりと云ふより外に取るべきの道路なし。されど我が心に有しながら其の觀念を意識せずといふことのあるべき理なし我が意識せざる觀念の吾が心に存すといふは其の何の意義たるを解すべからず、そは心に在りといふことは心に識ると

いふことに外ならざればなり。かくの如く論結してロックは終に吾人には全く生得の觀念なるものなしと斷じ、デカルトの哲學に於ひて重要なる地位を占めし「我」及び「神」といふ觀念、又其の他一切論理上、教學上、及び純理哲學上の原理と稱せらるるものも一として吾人に生得したるものにわらずとなせり。然らば吾人の觀念は何處より來るか。

〔四〕 吾人は何處より吾が觀念を得たるぞと問ふにロックは答へて曰はく其の起源は經驗の外に在るべからず、而も彼れに從へば經驗には一には吾人の感官を以て外物に關して得るものと又一には吾人が自ら吾が心作用を省み其の作用に就きて得るものとの二つあり。而してロックは前者を感官(sensation.)と名つけ後者を反省(reflection.)と名つけ又は前者を內官(internal sense.)後者を外官(external sense.)と名つけたり。以爲へらく吾人が觀念を得るの順序より云へば感覺は反省に先きだち而してまづ感覺によりて得たる觀念を以てするの心作用を覺知することに於いて反省即ち內官よりするの觀念を得るなり、此等の二つを除きて他に吾人に觀念の來たるべき道なし、故に吾人の心には唯た二つの窓あるのみ。ホメーロスの詩が凡べて二十四文字を以て綴られたるが如く吾人の有する千差万別の觀念は元來智上に所謂二つの窓より入り來たれる觀念を以て成れるものなり。吾人の心は拭へる板または白紙(tabula rasa.)に譬ふべし、之れに觀念を記する者は經驗なり。內官及び外官によりて觀念の浮べらるゝ時にのみ心は其の內容を有す心は絶えず思念すといふは物躰の不斷に運動すといふと等しく共に確實なる根據を以て主張し得べきことにあらず。

〔五〕 吾人が感覺及び反省によりて得る原始の觀念は之れを分析して更に原始なるものとなすべからざるが故に之れを單純觀念(simple ideas.)と名つく。單純觀念の種類は之れを大別して四種となすことを得。第一は唯一つの感官のみより來たるもの色、音、香味、溫熱の感及び障礙の感等是れなり。第二は一つ以上の感官(即ち視官及び觸官)より來たるもの廣袤、形狀、動靜等是れなり。第三は唯反省によりて來たるもの即ち吾人の一切の思想及び意思のはたらきを覺知することに於けるの觀念是れなり。第四は內官及び外官の二者より來たるもの、例へは決苦、存在、力、一、繼續等の觀念是れなり。此の最後のものを細說せんに、吾人は內官及び外

官の何れによりても能く快樂苦痛の感を覺え、又外官によりて事物の存在するを認め內官によりて吾が心に種々の思ひの存在するを認むることによりて存在といふ觀念を得、又外物の吾人にはたらき且吾人の意志のはたらくことを覺知する所に力といふ觀念を得又感官によりて一物を知覺し心に一想念を覺ゆる所に一といふ觀念を得、又種々の事物が連續して感覺に現じ特に想念の相次ぎて出沒することを覺知する所に繼續といふ觀念を得。此等凡べて吾人の心に意識する所のものをばロックはデカルトの用語に從ひて觀念と名づけたり。

〔六〕　吾人が內官及び外官によりて得る所のものは凡べて我が心に屬するものたる觀念に外ならず。されど其の中感官によりて得る所のものにつきては特に區別するを要するものあり。吾人は五官によりて外物に就きて感ずる所のものをば通常其の物躰の性質と名づく而して此等性質といふものも要するに觀念として吾人に意識せらるゝものなれども其うちに就き物躰そのものに屬して離れざるものと唯吾人の感覺するところにのみ存するものとを區別し得べし。物躰その者に屬して離れざるものとは廣袤、形狀、數、動靜及び塡充性(solidity)を謂ひ、此等は唯吾人の五官に感ずる所に存する色、聲、香、味、及び溫熱等の感覺とは區別せられざるべからず。但しロックが此等後者を主觀的のものと見たるは嚮にデカルトの唱へたる所と同趣意なるが但だデカルトは廣袤のみを以て物躰其の物に屬する性質なりしと見、ロックは之れに加ふるに空間を塡充するの性を以てせり。(ヘンリー、モーアは已に質礙の性 (impenetrability.) を以てデカルトが謂はゆる物躰の性に加へざるべからずと說けり)ロックはかくの如く物躰の性と云はるべきものに二つの區別をなし、スコラ哲學者の已に用ひたる又ロックと相知れるロベート、ボイル (Robert Boile.) も已に用ひたる語を襲用して物躰其物に屬する第一性質 (primary qualities.) と名つけ吾人の感覺する所にのみ存するものを第二性質 (secondary qualities.) と名つけたり。こゝに第二性質と名つくるものは其れを以て直に物躰其のものに屬せりといふを得ざれども、唯其れらの感覺を吾人の心に起こすべき力が物躰に具はれりといふを得べし、尙ほ委しく云へば物躰の第一性質即ち其を組織する分子の大さ、數及び運動等によりて吾人の心に色、聲、味、香等の觀念を起こすの力が物躰に具はれりといふを得べし。

〔七〕　上に説けるが如く內官よりするの觀念は畢竟吾人の心作用(而して其の作用は感覺によりて得たる觀念を用ふるもの)を自ら覺知する所に起こるものなるがそれらの心作用を更に委しく述ぶれば第一に知覺(perception)といふ作用あり、是れは吾人が初め感覺によりて觀念を得る時に其の觀念を自ら有し居ることを覺知する所に已に存せり。斯く吾が觀念を知覺するのみならず、又其を保存するの作用あり、保存(retention)の作用とは第一には浮かひ來たれる觀念を引き止めて其が知覺を繼續せしむる作用にして吾人が注意して一事物の觀念を把持し居れる即ち是れなり、第二には一旦心に失はれたる(即ち忘られたる)觀念を再び想ひ起こすことに在り。而して其を再び想ひ起こし而も其を新しく得たる觀念とせずして曾て已に知覺したりしものとして認むる是れ即ち記憶なり、屢〻想ひ起こすことなくしては一たび得たる觀念も總ておのづから朦朧となりゆくものなり。次ぎに吾人は觀念の異同を差別するの心作用を有す。次ぎにまた一觀念と他觀念とを差別するのみならず、種々の觀念を比較して其の間の關係を認むる心作用あり。次ぎには又幾多の觀念を結合せしむる心作用あり。然れども此等諸〻の心作用は最初外官よりして得たる觀念に依りて存するものにして其れらの觀念なくして起こり得るものに非ずされど其れらの作用を自覺する所に吾人はおのづから別種類の觀念を浮かべ來たるなり。

〔八〕　斯くして吾人の心は曾て得たる觀念を更に結合し又比較することによりて複雜觀念(complex ideas)を形づくり來たる。複雜觀念の形つくらるゝ趣を更に詳しく云へば一には單純なる觀念を結合すといふと、次ぎには其れらの觀念を比較して其の關係を認むるといふと、三には其れらの觀念を相比較して其の幾多のものに通じたる相をば差別の相に相分かち離す所謂抽象作用によりて形成せらるゝなり。是れを要するに複雜觀念は吾人の心が單純觀念を以て造り設けたるものに外ならず。而して其れらの複雜觀念を分かちて凡そ三種類となすことを得。一に曰はく狀態の觀念即ち自立して存在するものに非ずして他の者に於いて始めて存在する所のものゝ觀念二に曰はく本躰の觀念即ち種々の性質を具するものとして吾人の想ひ浮かぶるものゝ觀念三に曰はく關係の觀念即ち二つの物を比較する所に吾人の想ひ浮かぶるもの即ち是れなり。

〔九〕 狀態の觀念を區別して單純なるものと雜合せるものとの二つとなし得べし。單純なる狀態とは其れを成すところのものが凡べて同樣のものなるを謂ふ。例へば一ダスといふ觀念の如きは自立して存在するものゝ觀念にあらず、何等かの事物に於いて始めて一ダスといふことの在るなり、而して其は又同樣のものを幾何か重ねたるものなれば單純狀態なり。次ぎに戰ひといひ、又は盜みといふ如き觀念も亦何物かに於いて在るもの即ち狀態なれどもこれは同樣のものを累積せるに非ずして種々の異なりたる單純觀念の結合したるものなれは雜合狀態と各つくべきものなり。單純狀態の中特に吾人の注意すべきものは廣がりといふ觀念より得來たる所のもの即ち一切空間に關するもの例へば距離、容量、形狀等即ち是れなり、次に繼續といふ觀念より得來たる所のもの、是れ一切時間に關する觀念にして吾人は繼續する事柄の相去る間隙を計りて時日等の觀念を作る而して其の計量を何處までも延ばし行く所に永遠といふ觀念を得次ぎには一といふ觀念より其を重ぬることにより數といふ觀念を作り又それを何處までも重ね行く所に無限といふ觀念を得其の他力といふ觀念より能動所動といふが如き觀念を得來たる。雜合狀態は吾人が唯假りに種々の觀念を繫ぎ合はして作る所のものなるが故に人民の習慣等の異なるに從ひて其が有する所のもの亦大に異なり特殊なる雜合狀態の觀念を表はす特殊なる言語の一人民にありて他には無きもの少なからず。

〔一〇〕 本躰といふ觀念は吾人が一物に種々の性質の變はることなく常に相結合するを見而して其の性質の斯く結合して保たるゝことをば其れらの性質のみが自立して存在するものと見ては解すべからざる所より、別に其れらを保持するものなかるべからずと思ひ到る所に得る觀念なり。されど其れら本躰は如何なるものなるかと云へば吾人は毫もそれに就きて知る所なし。若し人ありて色又は重さの具せられ居る所は何處に在りやと問はゝ唯廣がりを充たし居るものに在りと答ふるの外あるべからず、而して又其の廣がりと質碍とは何物に具有せられありやと問はれんには吾人が其の物の何たるかを言ひ表す能はざること、恰も印度人が世界は大象に保たれ而して其の大象は大龜に保たると云ひて龜を保つ者の何たるかを言ひ得ざるが若し。是を以てロックは本躰といふ觀念をば混雜

せる觀念(Confused idea.)となせり。(デカルト及びスピノーザに於いて緊要なりし又最も明瞭なるものなりし此の觀念がいかにロックによりて取り扱はるゝかを見よ)。斯く本躰に就きては其の何たるかを言ひ得ざれどもなほ吾人は種々の性質を具有せるものとして其を考へざるべからず。吾人は種々の物躰上の性質を具有するものありとして茲に物躰的本躰を考へ又種々の精神上の作用を爲すものあるがゆゑにそこに精神的本躰を考ふるなり。されどロックはその物躰と云ひ精神といふものゝ本躰の何たるかは吾人の知り得ざる所なりと思へるよりしていへらく、吾人は吾人の靈魂の如何なるものなるかを審かにすること能はず故にそを物質なりとも又物質ならずとも斷言すること能はず。蓋し造物主が物質に賦與するに知覺等の精神作用を以てしたりとも必ずしも考へられざるにあらず、其れら精神作用が他の本躰に賦與せらるると考ふるに比して其れか物質に賦與せらるると考ふるは決して難きことに非ずと。されど尙ほロックの意に從へば物質に精神作用の賦與せらるといふが如きことは造物主といふ如きものゝ力に依るとせざれば考ふること能はざる所のものにして、唯物質といふものをのみ思ひては何故に其れに精神作用の具はるかを解すること能はざるなり。蓋しロックは猶ほデカルトの二元論を脱し居らざるなり、但し彼れは本躰といふものゝ存在を否みはせざれど其の何たるかを知るべからずといふ所より其の所說のデカルトとは異なれる趣を帶ぶるに至れるなり。

〔二〕 關係の觀念は一物と他物とを比較する所に吾人の想起する所のものにして一事物そのものに存するにはあらず。此の關係の觀念の中最も主要なる者の一に因果といふ觀念あり、蓋し一物又は其の變動によりて他物又は其の變動の生ぜらるゝを見る所に彼れを因とし是れを果とする觀念の浮かび來たるなり。次ぎに同一異別といふも關係の觀念にして二物が同時に同一の空間を占領すること能はざるが故に同時に同一の空間を占領するものは其れ自身に同じきものとせられ之れに對して他を異別のものとす。無機物に於いて同一といふは同時に同處を占領する物躰の部分に在り生物に於いて同一といふとは其の部分は新陳代謝しながら猶ほ其の組織の同樣に保たるゝをいひ、而して人格を同一と云ふことは意識の繼續することに在りて心の本躰の同一といふことゝは異なり、何とな

れば假令心の本躰は異なりとも若し記憶によりて一より他へ同一なる意識の繼續されれば人格上同一のものといふべく、又本躰は同一のものにても意識全く斷絶して異別のものと分かるれば人格上異なる人と云はざるべからざればなり。其の他空間及び力等に就きての觀念は多くは關係の觀念なり。

かくの如く觀念の相比較せらるゝことによりて種々の複雜觀念の形つくらるゝが、其れら觀念相互の間には其れに自然に存する關係もあれば又それか偶然に相結ばれ習慣によりて相喚起し來たるもあり。此等が所謂聯想(Association)と名つくる現象を成して種々なる觀念が吾人の心に相聯結し相喚起し來たるなり。

〔一二〕　吾人が觀念を複雜に作り上ぐるとに於いて大なる關係を有するは言語なり。一人が其の觀念を他人に傳ふるには其れの記號を以てせざるべからず而して其の記號の最も便利なるものは即ち通常謂はゆる言語なり。言語はもと事物を示すの記號と云はむよりも寧ろ吾人の觀念を現す者として用ゐらる。然れども各觀念に各一つの言辭ありと云ふにはあらず、かくては却て觀念を取り扱ふに不便なるが故に特別に一物にのみ名つくる固有名詞を除きては凡そ言語の或種類の物を一般觀念(general idea.)の記號として用ゐらる。而して一般觀念の造り上げらるゝや個々の事物を觀察して其共通の相を差別の相より引き離して考ふると即ち抽象作用によれり。故に抽象作用と言語とは親密なる關係を有する者にして他の心作用は動物と雖も多少具有すと見て不可なきも唯抽象作用のみは彼等の有せず特に吾人々類の有するところなり。而して此の抽象作用により て造り成されたる一般觀念は是れ唯吾人の思ひに存する一種の複雜觀念に外ならず。眞實存在する者は凡べて個々の物なり、故に吾人の觀念の發達も亦個々物に對する者を以て始まり、最初より遍通の理若しくは一般觀念といふが如きものを思ひ浮かぶるにあらず。之れを要するに普通名詞と名づくる者は一物を示す者にあらねば個々の物を一々に指すものにも非ず唯或事物の種類を指示するものなり。而してかゝる言辭の意味是れ即ち其の種類の本質(essence)と名づくる者なり。例へば黃金の本質は黃金といふ言辭に含有すとせられたる意味なり。此の言辭の意味を以て物の種類の分別を爲す。ロックは之れを精しくは命名上の本質(nominal essence.)と云ひて實在上の本質と別かてり、以爲へらく凡そ吾人が物の

種類を別かつは其の者が實在に於いて有する本質の何たるを以てするに非ずして、唯吾人は假りに一名辭が意味すと見たる若干の性質の有無を以て別かつなり、實在上の本性に就きては吾人の詳にせざること多しと、以上のロックの論は畢竟中世紀の末葉に興隆したる一種の唯名論又は概念論と名つくるものゝ立ち場を受け繼げるなり。

〔一三〕　吾人の觀念に對して其れに應ずる者ある時には之れを對實觀念(real idea)と云ひ眞實其れに對應するものなき時には之れを非實觀念といふ。對實觀念のうち、一觀念が實際其の指示するものに善く應合したる時には其の相應觀念(adequate idea)と名づけられ、それに應合するとの足らざる時には不相應觀念(inadequate idea)と名つけらる非實觀念は實際あるべからざるものゝ觀念にして例へば卑怯なる勇者と云ひ又は人頭獸身の怪物と云ふ如きは是れに屬す。されど雜合狀態及び關係の觀念は唯だ吾人の心に假造したるものにてはあれど是れ必ずしも右云ふ意味にて非實のものにあらず、そは其れ等は元來吾人の假造したる觀念として存するより外にそれの對應すべきもの(それの指示すべきもの)を有せざれば

なり。故にそれ等の非實となすべき所以のものがそれ等以外に在るにあらず、其れ等はそれ自らが原型(archetype)なれば其れと相對せしめて是れを非實となすべき者なし、唯若し其の如き一觀念を意味する辭をそれの正當に適用されざる觀念に用ふるときにはそれか非實となると謂ふべし、例へば物惜しみせぬと云ふ觀念を公義の觀念と呼ふが如し。斯くそれ自身が原型なる觀念に對しては單純觀念は他に其の對境を有するもの(ektypa)と謂ふべし物躰の第二性質と名づくる觀念も亦それに對應する何等かのものが物躰に實在せるなり。

孤立せる一言辭又は一觀念は其の明不明の度に於いては大に相異なるあるも未だそれに眞妄の別はあらず。眞妄の別は一言辭と他言辭とを結びて「一命題」を形づくるところに存するなり。されば世に眞理と名づくるものは畢竟相合ふ觀念を合はせ相合はざる觀念を分つに在りと謂ふべし、委しくは之れを思想上の眞理(mental truth)と名づけ而して其れら觀念の相合ふと相合はざるとに從て其れらの觀念を言ひ現す言葉を相關係せしむるこれを言語に於けるの眞理(truth of words)といふ。

斯く觀念を言ひ現す言語を相關係せしめて命題を形づくるにも、或は其主語として取れる言葉の中に已に含有せる事をいふに過ぎざる者あり。此等の命題は吾人の知識を廣むるものに非す、此等を唯言葉のまゝの(verbal or trifling)命題と名づけん、例へば三角形は三つの角を有する形なりといふが如き是れなり。此等とは異なりて吾人に特に教ふる所ある(real or instructive)命題あり例へば三角形の三つの角度の和は二直角に等しといふが如き是れ也。ロックの信ずる所に從へば凡そ數學上の命題は皆後者の種類に屬するものなり。斯く吾人の智識を廣むる者と唯一言語の意味を繰り返すに過ぎざるものとの區別はあれと吾人の智識は凡へてかくの如き命題を以て言語に云ひ表はさる、約言すれば智識は一觀念が他觀念と合ふか合はざるかを認むるに在りて觀念が觀念ならぬ或物に對するの關係にはあらず、即ち智識は觀念相互の關係に存するものにして其が相互の關係の範圍外に出づべきものに非す。

〔二四〕 觀念の合不合を認めて吾人の正確なる智識を形づくらんには先づ直覺的に明かなるものを以て基礎とせざるべからず。吾人の觀念を比較すれば其の合ふか合はざるかの直に見定めらるゝもの是れ最も確實なるものにして之れを直覺的知識(intuitive knowledge)と云ふ其の次ぎに確實なるを論證的知識(demonstrative)といふ、蓋し論證的智識とは二箇の觀念を比較して直に其の合不合を認むると能はざれども其の間に挾むに他の觀念を以てし而して其の媒介によりて件の二觀念の合不合を見定むるの謂ひ也。此の論證的智識が確實のものたらんには如何に多くの觀念の媒介を挿入するも、其の一歩々々が各〻直覺的に明かなるものならざるべからず。例へば甲と丁とを直接に相比較し其の相合ふことを直覺して甲は丁なりと云ひ若しくは其の相合はざることを直覺して甲は丁ならずといふは直覺的知識なるが、それが斯く直覺的に明かならざるも尙論證によりて明かにならんには乙丙を挿みて甲と乙との相合ふことを認め、又乙と丙と及び丙と丁との相合ふことを認めざるべからず、而して甲と乙との相合ひ乙と丙と丁との相合ふことが各〻直覺的に明かなるによりて初めて其の論證は確實なるものといはるべし。故に確實なる論證は直覺的智識を連續せしめたるものといふも不可なし。唯論證によりて初めて得る智識は其の直に明かなるに非ず且つ多くの思想を其の間

に挾むを要して其の複雜なる思想作用の中に過誤を生じ易きことに於いて直覺的知識と區別せらるゝを得。斯くして直覺的にも認むることを得ずまた論證的にも確實に認むること能はざるものは皆或然的知識の範圍内に在る者にして吾人は唯之れに對して然るならんといふ信念を持し得るに過ぎざるものなり。上に述べたるが如く直覺的知識と論證的知識とを別かつことに於いてはロックはオッカム等に倣ひたるものと見て不可なし。又論證を以て確實に吾人の知識を進め行かんには其の一歩々々が直覺的に明瞭ならざるべからずと云へる其れまさしくデカルトの唱へたりし所なり。

右云へる觀念の合不合といふことを尙ほ詳細に述ぶれば一つには觀念の同一又異別といふこと、二つには觀念の關係、三つには觀念の共在、四つには其の觀念に對する實在物の有無を認むることゝなる。此等もろ〳〵の點より觀念相互の關係を定むることに於いて種々の知識は存在するなり。

〔一五〕　上に擧げたる、觀念の合不合を見るに就きての四種の點の中先づ最初の二つに就きて言はんに、直覺的に或は論證的に確實なる吾人の知識は多く此等の種類に屬す、蓋し觀念の異同或は關係を直覺的に或は論證的に認識する時に於ては其は其の觀念が他のものに應ずるか否かを見るを待たずして吾人の當に承認すべき所のものなり、何となれば是れ觀念と觀念との關係に外ならざればなり。凡そ論證的に確實なる知識を形づくり得るは吾人自らの作り設けたる觀念相互の關係を見る所に在り數學の如き即ち是れなり。例へば三角形の角度の和といふ觀念と二直角といふ觀念との關係は吾人の思ひ浮かぶる所に在るものにして其は觀念の上に於いて明かに認めらるゝがゆゑに他に其を證するものを要することなく、特に一物を捕らへて其を三角形なりとも又二直角なりともいふを要せず、茲に實在する三角形は眞實の意味にて三角形といふべきものならずとも若し其を三角形なりとせば其の角度の和は必ず二直角に等しといふことを承認せざるべからず。かくの如く數學上の命題は唯だ觀念と觀念との關係を見るものなるがゆゑに其は論證的に確實なるものなり。ロックは以爲へらく倫理學も亦能くかく論證的に確實に建設せらるべし、何となれば倫理學の目的とする所は吾人が實際行ひ居る個々の事實の如何なるかを穿鑿するに非ずして寧ろ吾人が人間と

して當に爲すべき事柄の關係を定むるに在ればなり。例へば正義は實際しかじかの所に在りや否やと云ふ事實の鑒索を事とせざるも唯正義てふ觀念を形つくればその觀念を思ひ浮かぶることに於いてそを吾人の當に行ふべきものなりとするの關係を認めざるべからざるなり。此のゆゑに倫理學は數學と共に論證的學科の一として數へらるべきものなりと。此のロックの論は彼れが知識論の一端として特に吾人の注意を引くに足る。

〔一六〕　次ぎに觀念の共在といふことに於いて合不合を見るの知識は概ね必然のものならず。そは吾人は種々の性質の一物に共在することを發見すれども其の性質相互の間に必然の關係あることを發見するものとては甚だ少なし。形ある物には廣がりといふ性質なかるべからざることと及び相衝突して運動を傳ふるには其の物が各〻質礙の性を有せざるべからずといふことの如きは必然に相關係し居る性質として吾人の認むべきものなれども斯かる少許の例を除きては吾人は唯一性質と他の性質とが相共在することを認むるのみにて其れらに必然相伴はざるべからざることを知了すとは云ふこと能はず。其の故は第一に吾人は感官を以て感ずる種々の性質が如何に多く結合して如何に運動することが如何なる感官上の性質を吾人の心に喚起するかを詳かにすること能はず、假りに其を詳かにしたりとするも何故に第一性質の或成り立ちが第二性質の或ものと必然に相關係すべきかを發見し得ず唯物質上かゝる運動の存する所には斯かる感覺の生ずといふことを見るに過ぎずして其の間必然の關係あることを吾人の知識の量り得る範圍にあらず。故に其れらの事に關して吾人が實驗によりて知り得る事柄は畢竟するに個々の事相を認むるに過ぎず唯經驗上此の性質と彼の性質とが相共在せりといふことを認むるのみにて其の關係の遍通又必然なることを斷ずる能はず。此のゆゑに物質に關する經驗的學問は畢竟ずるに確實に學理的のもの(scientific)となるを得ざるなり。吾人の有する遍通の知識は要するに吾人の思想上の關係に存在するものゝ外に出でず。斯くロックが自然科學は要するに實驗的學問ならざるべからずと說き而して又其れが實驗的學問なるべきが故に遍通にして全く確實なる知識を與ふるといふ意味にて學理的のものとなることを能はずといふ表白は經驗哲學の開祖の言として特に吾人の注意を引くべきもの

なり、且つ其の表白の意味と價値との更に悉しくは如何に考ふべきものなるかは是れより以後の哲學思想の發達に於いて徐々に吾人の發見し行くべきものなり。

〔一七〕　終りに觀念に對する實在物の存在に就きての知識には第一に吾人自らの存在を直覺的に認むるの知識あり。ロックが此の點を論するや殆んどデカルトの言葉其のまゝを用ひたりとの批評を免れず。彼れ曰はく吾人の存在することに優りて更に明瞭に認識さるべきものとてはあらず、我れは思慮を回らし快苦を感ず、而して此等の思慮快苦を感ずといふことの明かなると同じく之れを感ずる我れの存在は明かなり、我れ若し凡べての事を疑はゞ疑ふといふことによりて已に疑ふ我れの存在することを明かに直覺すべきなりと。

次ぎに實在物の存在に關する知識の中に吾人が論證を以て神を認むる知識あり、此の神の存在を論證するに於いてもロックはまた明かに多くデカルトに負へり。彼れ曰はく、神は彼れにつきての生得の觀念を吾人に與へず、然れども吾人は論證して善く彼れの存在を認むることを得べく、而して其の論證には我れの存在を根據として考ふるより外に他の者を假らずして充分なり。蓋し我れの存在すること即ち我れの或實在物なることとは疑ひを容るべからざる程に明瞭にして而して之れと共に、全くの無が實に存在する或物を生じ得ずといふことも亦吾人の直覺的に明かに確認し得べき所なり。（無が有を生ずといふは無が二直角に等しといふと同じ程に妄なるものなり、若し何もなきものが二直角に等しきことの有り得べからざることを知り得ざる者あらば其の者は到底イークリッドに於ける論證を解することを能はざるものなり。此のゆゑに若し茲に或實在物あらば之れにより て吾人は何物かゞ無始より存在することの明瞭なる證明を得たるなり、何となれは無始より存在せざるものならば其れには存在の始めあるべく、存在の始めを有するものならば其は無より生ずること能はざるものなるが故に其れを生ぜしめたる或物が已に存存し居らざるべからざればなり。斯くして吾人は我れの存在すといふ直覺的知識より推究して永遠に存在する者の存在を承認することを得るなり。且つ又他より其の存在を得たるものは其れの具有するものも亦他即ちそれに存在を與へたる者より得たるものならざるべからず、故に永遠に存在する者は他のものに於ける凡べての力の淵源たらざるべからず。而して吾人は我れ

に於いて智慮の存することを認む、故に凡べてものゝ原因と見らるべきものは又智慮を具へたる者ならざるべからず、若しそを全く智慮なきものとなさば何故に智慮といふ作用の吾人に存在するかを了解すべからざればなり。且つ吾人は天地萬物に現れたる秩序調和及び其の美を考へても能く一つの永遠に存する無限智ある者即ち神の存在を承認せざるべからずと。ロックに取りては神は直覺的に知るべからざるものなれども其の存在を證するの論證に少しも疑訝を挾むことは能はざるほど明瞭確實なるものと思はれたりき。蓋しロックが此の論證はデカルトが因果律を直覺的に明瞭なるものとして神の存在を證するに用ひたりし如く矢張り之れを直覺的に明かなるものとして用ひたるなり。

次ぎにロックは實在物の知識中には吾人が感官を以てする外物の存在に關するものあるを說きて曰はく吾人の五官に現するものが吾が觀念以外に存すといふことも亦吾人の承認せざるべからざることなり。但し其の外物に就きて吾人の直接に心に浮かぶものは我が觀念に外ならざれども其れらの觀念は我が隨意に思ひ出たし得る他の觀念とは異なり、吾人のおもひ起こすことを避け得ざるものなり。故に其の如き觀念に對しては吾人は外在の原因の無かるべからざることを推知し得べし。此處またロックは因果律を根據として論じたり。且つ外物の存在に就きては吾人の五官は相互に其の證明を合はする所あり。例へば眼により て火の在ることを見ると共に手に觸るゝといふことが亦其の存在を示すが如し。されど此の外物の存在を知るの知識は上に擧げたる直覺的に知る神の存在及び論證的に知る神の存在の知識に比すれば、確實なることに於いて其の下に在るものなり。されど實際生活の用を達する上に於いては吾人は不足を感することなきほどに外物の存在を確むることを得。斯くロックが知識論上我れの存在を以て吾人の知識の直接に確かなるものとし、次ぎに神の存在を確實に推知し得と云ひ、而して最後に感官を以てする物躰の存在に關する知識を置けるところ、是れ亦明かにデカルトの所說に由來せるなり。

〔一八〕 ロックに從へば凡べて論證的に確實なりと云はるべき知識は觀念と觀念との關係を認むるに止まりて實在物の存在に及ぶものにあらずされど彼れは唯一つの例外を容れて神の實在は確實に論證するとを得と考へたり。此等の論證、

的知識及び前に述べたる直覺的知識の外は吾人は凡べて或然の度に從ひて吾人の判斷を定め行かざるべからず、而して這般或然的知識は或は信念と名づけらる。吾人の信を來たすには多くの差等あり、而して吾人が其を信ずるの根據は一つには吾人自らの經驗觀察にして二つには他人の證言なり。理性の作用は上來述べたる吾人の知識の成り立ちに從ひて一場合に於て吾人の知る所が全く確實なるものとして承認せらるべきか、はた唯或然のものとして承認せらるべきか、若し後者に屬するものなる時には其の或然の度即ち其れが如何ほどの根據を以て吾人に信ぜらるべきものなるかを見定むるに在り。而して是れを見定めんためには必ずしも論理學者の謂はゆる三段論法を用うるを要せず、吾人が實際推理の作用を爲す上に於いては三段論法といふが如き形式は寧ろ不用なるものなり。

幾多の或然的知識の中、個々の實際の事柄に關する知識は、必竟するに吾人が親しく其れら個々の事柄に接して得たる觀察を以て根據となすものにして、他人の證言に依る時に於いても他人が亦親しく其を觀察したることに根據を有せざるべからず。而して吾人が直接に觀察實驗し得ざる事柄即ち宗教上の信仰の如きに於いては其の根據は之れを神によりて與へられたる證言に措かざるべからず。故に道理と信仰とを相對せしめていふ時は、前者は吾人が其の理由を親しく我が經驗上に求むることを得るものにして後者は神の與ふる證書を以て確實なる根據とする點に於いて兩者は相異なりといふを得。このゆえに宗教上の信仰には吾人の理性を以て親しく發見し得ざるものあり、されど此等も決して全く信ずべき道理なきものにわらず何となれば充分の理由ありて神の證言を確實なるものとすと云はゝ其れほどの道理は其處に存在すればなり。されど右爲せる如く道理と信仰とを區別して云へば後者を以て道理以上のものとなすを得。斯かる趣意に基きてロックは中世紀の哲學者以來已に唱へ來たれる區別に從ひて合理悖理及び超理の三種を別かち、宗教上悖理なることは固より信ぜらるべからざれども、超理の事はよく信ぜられ得るものなりと云へり。されば宗教上たゞ吾人の理性を以て定め得る所のものゝ外に天啓によりて示さるゝものあれど、是れ畢竟前者を補充し、そを更に擴張せるものと見るを得何となればそれが天啓なることを證據(即ちそれが眞實に神の示現なりといふことの證據)は終に吾人が理性の判斷に

証へざるべからざればなり。但し神の證言する所たる以上は其が吾人が信ずべきものなることは本よりなれど其が果たして眞に神の證言とせらるゝの理由あるか否かを定むるは畢竟するに理性の範圍内の事と云はざるべからず。

〔一九〕以上ロックが吾人の知識の起原、成り立ち、界限を明かにせんとて説き出だしたる彼れが哲學、即ち世に彼れの經驗哲學と名づくるものゝ要領を陳述しぬるが、今顧みて委細に其の哲學思想を成せる要素を考ふれば著るくデカルト學派の唯理的學説に由來せる動機を認むることを得。ロックが吾人の觀念の淵源に二種ありとして外官と内官とを説ける所に於いてデカルトの二元説が其の形を裝うて潜めること明かなり彼れが物躰の第一性質の或成り立ちが何故に第二性質の或ものを吾人に思ひ浮かべしむるか、換言すれば物躰分子の種々なる結合及び運動が何故に吾人の意識上のものなる感覺を起こし來たるかは了解すること能はずと云へる所の如きは正しくデカルト學派の口吻なり。ロックに取りてはデカルトに於けるが如く心作用と意識とは同一不二のものにして、心に思ひて其を意識せざることなしとせられ、而して所謂意識の作用と物躰の運動とは嚴然として相對峙するとせられたり。

且またロックが心理上觀念生起の順序を論ずるや、外官を先なるものとして之れに重きを措きたれども後に知識上の價値を論ずるに及びては其の輕重を倒にし吾人の内官によりて發見する所のものを優れりとせり。蓋し感官上外物の存在を、知るの知識は彼れに取りては全く確實のものといふを得ず、其れと異なりて吾人が内省的實驗によりて我れの存在及び觀念相互の關係を認むるの知識は全く確實なるものなり。此の點亦明かにデカルトが哲學思想の痕跡を止めたるものなり。

ロックはまた吾人の心を白紙に譬へて吾人の觀念は凡べて吾人が所動的に受け入るものなるかの如くに説けり。されどこの有名なる白紙の譬喩は彼れの本意を表するには不適當なりと云はざるべからず。彼れが所謂經驗説は本より唯吾人の知識の淵源を五官によりて得る感覺のみに歸する感覺説とは異なり。彼れは別に内官によりて得る觀念を説けるのみならず、其の觀念を何處より得るかと尋ぬれば其は吾人が外官によりて得たる觀念を以てする我が心作用に就いて得る

なり。而して其の心作用はもとより外官によりて得たる觀念なくして有り得るものならねど、それは外官によりて得たる觀念とはおのづから別なるものにして吾人の心性に具するの活動と云はざるべからず。此の處より見れはライプニッツが吾人の知性其のものは感官より來たれるものと云ふべからずと說けるは、ロックが所說の必ずしも否める所にあらず、何となれば彼れは感覺によりて得る觀念と共に吾人の心作用をも說き而して此の心作用は寧ろ能動的のものと見ざるべからざればなり。蓋し感覺よりするの觀念は經驗に待たざるべからず即ち其處に於いては吾人の心は所動的なりと謂はるべけれど其れらの觀念を比較し結合するは心の能動的作用と云はざるべからず。ロックに從へば觀念は本來心の能動的に造り出だせるものにあらざれども、其を比較するとせざると結合するとせざるとは心其のものゝ作用に在りて他に待つ所あるにあらず、而してまた其を比較し結合したる以上は其の觀念に具はれる關係を發見せざるを得ず。而してロックは其の觀念の關係を見て恰も觀念其のものに必具して離れざるものゝ如くに考へ、吾人は唯そを發見するを要するのみと思惟したるがゆゑに、其の關係を認むることに存する吾人の知識は彼によりて遍通必然のものとせられたり。一言にいへば彼れが觀念を取り扱ふや恰もこれを以て一定不變の關係を具へ居る如きものとせり。此の點に於いてはロックは唯理論者の考へ方を脫し居らずと云はざるべからず。但し彼れは吾人の推理と云ひ知識といひ皆吾人の心に存在する觀念を以てするの作用に外ならずとなし、而して其れら觀念は唯個々のものにして存在して、其れら觀念其のものゝ遍通なるにあらず、遍通といふことは唯それに附屬せることにして、それは一個物のみならず多くの個物が其の一觀念によりて表示せらるゝことの外にあらずと云へり。然れども一個の觀念に外ならざるものが何ゆゑに多くの個々の物を表示し得るか、換言すれば何ゆゑに遍通性を得來たるかと云ふことの說明は猶ほ彼れによりて明かにせられず。彼れは吾人の有する觀念は其が存在の相に於いては畢竟個々のものたるに外ならずと說きながらなほ時に觀念相互の間に遍通不動の關係のおのづから具はるあるが如く說けるは畢竟彼れの知識論に於いて相反對せる二つの動機が相錯綜せるがゆゑなり。

ロックはまた關係の觀念及び雜合狀態と名づけたる複雜觀念は皆吾人の心の造れ

る所に外ならずしてそれらの觀念以外に其れに對應すべき實在物あるにあらずと說きたれども、本躰といふ觀念に於いては其れに對應する實在物ありとなせり。されど彼れが知識の淵源を說く所より考ふれば、件の本躰といふ觀念は何處より來たるべきものなるかを認め難し、外官によりて來たるものにもあらねば、また外官によりて來たる觀念を結合せしめたる單純狀態及び雜合狀態の觀念にもあらず、又觀念相互の關係にもあらず、遂に本躰として指す所のものゝ觀念の來たる所以を解し難し、是に於いてロックは本躰と稱して指す其の物の何たるかは吾人の知識する所に非ずとして其の觀念の價値を蔑視し其のこれを言ふの日吻は大にデカルト及びスピノーザと異なりながら、なほ其のものゝ存在を承認せり。こゝ亦ロックが猶ほデカルト學派の羈絆に繫がるどころと云はざるべからず。

ロックはまた關係の觀念の一種として因果といふ觀念を擧げ、而して關係と名づくるものは吾人の心にて觀念を比べたる上にのみ存在するものにして實在物を示すものにあらずと云ひながら此の關係の觀念を其據として神の實在を證せんとせり。且つ彼れは因果律を以て遍通の價値を有して直覺的に明瞭なるものとせり。然るにロックが吾人の知識の起原を說く所に從へば吾人の最初に知るところのものは個々の事柄に外ならず。故に彼れの說によれば實物に就きての吾人の知識を律し得る遍通の理としての因果律が何ゆゑに直覺的に吾人に明かに認めらるゝかを解し難し。畢竟彼れの何心なく因果律を取り扱ふ仕方は少しも他の唯理學派の論者と異なる所なし。

彼れはまた吾人の知識は觀念と觀念との關係を認むるものに外ならざるがゆゑに觀念其のものゝ外に出づること能はずといふことを屢〻明言しながら、なほ吾人の知識の中實在物の有無を認むるものありとなせり。以爲へらく我れの存在と云ひ、神の存在と云ひ、是れ唯吾人の心に在る觀念の存在をいふにわらずして觀念以外に本躰としての存在をいふなり、また吾人の感官を以て全く確實なりとは云ふことを得ざれども、外物の存在を知ることを得と。されど觀念と觀念との關係にのみ止まる知識が何ゆゑに觀念に對する實在物の上に及び得るか。ロックは觀念の合不合といふこと、の中に觀念と其れに對する實在物との關係をも籠めんとすれども是れ明らかに彼れの爲し得べからざるとなり。彼れは物躰の性質に第

一第二の區別を爲して前者は唯吾人の心に觀念として存するのみならずして物躰其のものに離れざるものなりといふ。されど何故に此の種の性質に於いてのみ觀念に對して尙ほ外物の實在するありといふことを知り得るか。此れらの點に就きてロックが所說に改むべき點の存するは見難きことに非ず。彼れが知識を論ずるや其の言頗る錯雜せる所あるなり。

以上述べたるが如くロックは本より實驗哲學の要旨を先づ最も明かに唱へ出でたるものなれども、なほ彼れが如何に多くデカルト學派の思想を維持し居れるかは決して見るに難からず、而して其のデカルトに負へりと見ゆるところのものゝ中には實はデカルトと共に其の共通の淵源なるスコラ學者の思想に由來するところもあるべし。ロックは明かにオッカム等が唯名論の系統を引けると共に、又スコラ學者の脫し居らざりし而してデカルトに傳はりて彼れが唯理學派の說に入り來たれる要素をも繼承せる所あり。彼れはスコラ風の學問に慊焉たらざりしかども、なほ明かに其を學びたる痕跡を止めたり。

ロックの學說は歐洲の學問界に一大潮流を起こして哲學上多くの學說の淵源となりたれど右論じたる所によりて知らるゝ如く彼れが所說には整頓せざる所なほ甚だ多く從うて種々の點に於いて批評を受くることを免れざりき。一方には彼れとは反對の立場よりして其の說を批評し得ると共に又他方には彼れの立場に在りて彼れが說の中途に彷徨せる所あるを改めそを其の當に進むべき所に進ましむるを得。前者に屬する批評の中最も有力なるものはライプニッツによりて爲されたり。ライプニッツが批評の最も深くロックの學說に觸れたる點は其の說を以て吾人の心性作用に於ける無意識的方面を看過せるものとなす所に在り。ロックは以爲へらく吾人の心に本具するものなる以上は其は我れ自らに意識せられざるべからずと。ライプニッツは曰はく否必しも然らず、吾人の意識は其の極めて漠然たるものより漸次に發達し來たるものなり、知識の進步は其の初め可能的に具へたるものを發揮し來たり初め無意識的に爲せる作用を漸次に意識し來たるに在り吾人の心性に本具せざるものにして他より入り來たり得べきものなしと。ロックは曰はく吾人には一として生得の觀念なるものなしと。ライプニッツは曰はく吾人の觀念は悉く生得たりと。ロックは曰はく若し吾人の知識の發達するに從

ひて其の觀念の浮かび來たるべき條件の具はる時に初めて浮かび來たるものを生得と云はゞ一切の觀念は等しく生得と云はるべきなりと。ライプニッは曰はく、實に然り、漸次に發達の條件に從ひて吾人の心識に浮かび來たるといふことは其が本具のものなりといふことゝ決して相容れざることにあらずと。即ちライプニッによりては生得といふことがデカルト及び其の繼續者に於けるとは異なれる新しき意味に解せられ、而してロックの非生得説に對して頗る意味深き反對の見解をなせるなり。

予輩は次ぎにロックの創始したる觀念の研究及びそれに基ける哲學(Ideal system.)の爾後の發達を叙せんとするに當たり先つロックの立場よりして當に引くべき結論を引き出だしたる者として吾人の注意すべきバークレーの哲學に移らん。

第三十八章　ジョージ、バークレー

〔一〕　ジョージ、バークレー(George Berkeley.)は一千六百八十五年愛　に生る、其家はもと英吉利より移住せるものなり。ダブリンなるトリニティー、コレッジに入りて學べり。彼れは夙に心を哲學の研究に傾け意味なき諸多の抽象的なる空漠なる觀念を去り、直接に吾人の實驗し得ることに基きて其が思想を運ばし、而して其の結果として知識と信仰との爭ひを排除せんと心掛けたり。彼れは一千七百〇九年其の最初の著作にして心理及び知識の論に於いて一新見地を開き出だしたる著書『視覺新論』("New Theory of Vision.")を著し、其の翌年には彼れが哲學上の大著『人知の原理』("Principies of Human Knowledge")を公にせり。其の後倫敦に來たりて其處の文學社會に交り、其の學識好尚及び其の性質の温雅にして君子の風趣あるを以て大に交友の敬愛を受け、また其れら當時の文士と交りを訂せし所よりスティールの發兌し居たる雜誌『ガーデアン』("The Guardian")に投書せるとあり其の後ビータ―ボロー侯がシシリーに使するに侍して往けり。千七百十三年對話体にものして文章美はしき『ハイラスとフィロノウスとの對話』("Three Dialogones Between Hylas and

Philonous")を著し、尙ほ後には歐洲大陸を旅行して巴理府に在りし時にはマルブランシに會して盛に哲學上の論議を闘はしたることもあり。一千七百二十四年には英國教會に於ける一教職を授けられたりしが後彼れは其の教職に伴ふ少なからざる收入と共に其の位地を棄てゝ北亞米利加に行き其所に教化を布かんことを思ひ立ち遂に政府の補助を受くべき約束を得て太西洋のかなたに航し居をロード、アイランドにトして彼れが歐洲に在りては行ひ難しと見たる其理想を新國に試み其人々をして自然なる生活を送らしめ文藝及び宗教を布きて彼等を新しき教化に浴せしめんと企てたり。されど政府が其約束を守らざりしが爲め大なる困難に陷り數年間自費を以て支へしが遂に之れが爲めに自己の財産の多部分をも擲ち一千七百三十一年遂に空しく其故國に歸れり。一千七百三十四年監督の職に擧げられ彼れは之れを辭せんと欲したれども國王之れを許さゝりき。彼れが其の監督の下に在る區域の人民に對するや、貧者を救恤する等種々の社會上の事業に力を致したり。一千七百五十二年居をオックスフォルドに移しゝが翌年一日讀書し居ける時急に心臟痳痺のために逝りぬ。

バークレーは啻に哲學及び宗教上の事柄に心を傾けしのみならず、自然科學の方面にも廣く其の眼を着け且つ社會上の問題にも注意を怠らず、其の歐洲に旅行せる時の如き諸國の風土風俗等を始めとしてそれらを觀察することに疎かならざりき。彼れの著書は其の文章の美はしきを以て知らる。上に擧げたる著作の外『アルシフロン』("Alciphron or The Minute Philosopher") 一千七百三十二年『サイリス』("Siris") 一千七百四十四年)等あり。

(二) バークレーはロックが研究の問題を繼ぎて吾人の觀念の起原を考へ而して其の知識上の價値を明かにせんとせり。而して彼れが此の研究に於いて新路を開き出だせるは其の視覺新論なり。彼れ論じて曰はく、吾人は眼を以て直に物躰の大さ及び遠近を見るが如く思へど實は然らず吾人が今唯視覺のみを以て斯く距離及び物躰の大さを見るが如く思ふは久しき經驗の結果にして其の起原を考ふれば他の感覺即ち觸感(現今の心理學上の語にて委しく云へば筋肉運動の感覺をも含めたる者)によりて得たる經驗を視覺に結び附けたるに起これるなり。蓋し手もて探り足もて歩みたる心持が基礎となり、吾人の眼にしか〳〵見ゆるも

のは手に觸るゝ時かくの如くまた其の物に觸るゝまでには如何ほど脚の運動をなさいるべからずといふとが眼に見たる感覺に結合し來たりて後には目に見たるのみにて直に物躰の大さと距離とを心に浮かぶるに至るなり。視覺の示すところは寧ろ物躰の大さと距離とを示す記號たるに過ぎず。此の故に同一の月にても或は大に或は小に見え又た同じく谷を隔てゝ同一の山を望むにも其の時の氣象の有樣によりて或は遠く或は近く見ゆ。生來の盲者が醫術によりて視覺を得たる時に凡べての物が遠近を爲さずして悉く皆眼に附着するが如く見えたりといふも亦一例證なり。物の大さと云ひ其の距離と云ひ畢竟觸覺と視覺との結合するによりて思ひ浮かべらるゝもの、即ち視覺によりて得たる感覺に吾が心を以て附加する所あるに起これるなり。目を以て遠近を視ると云ふは恰も目を以て吾人の顏色に喜怒哀樂を視ると云ふが如し。運動と云ひ廣さと云ひ、遠近と云ひ此等は凡べて感覺にあらずして寧ろ吾人の心を以て感覺に附加する所の關係なり、而して其れが感覺相互の關係なりと云ふことが已に其の吾人の知覺を離れて客觀的に存在して居るものにあらざることを示すなり。

〔三〕 上に述べたるバークレーの視覺論は心理學上の一の新生面を開き出だし延いて知識論上頗る重大なる結果を來たしゝ者なり。其論に從へばロックの所謂第一性質及び第二性質の區別は破れざるべからず、そは物の廣さも、又從ひて空間上に於ける物躰の一切の狀態も凡べて吾人の主觀的に思ひ浮ぶるものと見ざるべからざればなり。ロックが第一及び第二の性質を說きて唯吾人の目もて感ずる色等は主觀的なれども、廣がりを有し遠近を爲すものとして物を見るとは主觀的ならずとせる理由は是に至りて全く破れたり。ロックの所謂塡充性といふものも究竟する所吾人が手を以て物に觸れて障礙を感ずる感覺より來たれる觀念に外ならず。(バークレーに先だちてはホッブス又オッカム等は第一性質と第二性質とを區別せざるに近よりデカルト及び古くはデモクリトスはこれを區別せるものと見るべく而してロックは此の後者に從へるなり)。斯くの如く空間的關係は吾人の視覺を以てする感覺と觸感との結合によりて生ずるものに外ならず、ロックの語を假りて云へば一の複雜觀念に外ならずといふバークレーの結論はロックによりて始められたる觀念の研究を其の當に行くべき所に持ち來たれるものと見ざる

べからず。第一性質及び第二性質の區別を毀却し去りて其れらを凡べて吾人の心に思ひ浮かぶる觀念に外ならずとなし、觀念ならぬ物の存在すといふことの證據は其の中より得らるべからずと見たる所、是れ即ちバークレーがロックの所說に於いて未だ整はずして中途に止まれりし點を改めて其が正當の結論を發表したるものと見るべきなり。

〔四〕　次ぎにバークレーが心理研究の出立點ともいふべきは其が抽象的概念の駁難なり。ロックは曰はく凡べて實に存在する所のものは個々物なり、されど吾人は個々物に共通なる性質を抽象して我が心の中に其が概念を形つくるを得と。バークレーは更に一歩を進めて曰はく吾人は其の如き概念を形つくり得るものにわらず是れ吾人が心作用を自ら省みても明かなることなり、吾人の思ひ浮かぶる所は或一つの特殊の相を具へたるものに限る、其れに明瞭不明瞭の差こそあれ兎に角一殊相を具へたる概念ならざるべからず。若干の事物に共通なる性をのみ思ひ浮かぶるといふ如きとの到底爲し得べからざるは、例へば運動といふことを思ひ浮かぶるにも速くもなく、遲くもなく、右せずまた左せざる運動といふが如きものは到底思ひ浮かぶるにはよしなし、若し浮かぶればそは必ず何ほどかの速力を具へ何方へかの方向を取り、行く運動なり。人間といふ觀念を思ひ浮かぶるも亦然り、色の白からず又黑からず、軀高からず又低からず、男にもわらず女にもわらず、老ならず若ならぬ唯人間といふ如きものを奈何で吾人の心中に思ひ浮かべ得んや。唯吾人が一個物を觀るや特に其の一部分にのみ注意を向くるを得べく、而して其の部分が他物と相類したるものにてあることを得るのみ、そを其の個物の他の部分より引き離し一の獨立なる觀念として思ひ浮かぶることを得ず。然れども一物の一部分にのみ注意してそを考ふることを得るがゆゑに其れに就きて吾人の考へたることを其れと同じき部分を有せるものに就きて言ふことを得るなり。例へば一つの三角形を畫きて數學上其の角度の和は二直角に等しと論證せんには一つの抽象的三角形を思ひ浮かべてしかすることを得るにあらず、特に今畫ける一つの三角形に就きて論ぜざるべからず、されど其の三角形の大さと云ひ又は直角三角形なりと云ひ又は鈍角三角形と云ふことは論證に關係なきこととして見ることを得るがゆゑに一つの三角形に就きて論證せることを他の三角

形につきてもいふことを得るなり。之れを要するに吾人の思ひ浮かぶる所は個々のものならざるべからず、唯其の一個のものを以て他の多くのものを代表せしむることを得るのみ即ち吾人が一種類のものを考ふるや其の個々の例を以てするなり。斯く一觀念を以て多くの物を代表せしむる所に吾人の用うるものは言語なり。例へば吾人は色の黑白軀幹の大小、及び其の男女なると老若なるに拘はらず人間といふ言語を用ゐて之れを表すが如し。このゆえに若し通性或は抽象的のものありとせば、其の言語に外ならず。言語あるが故にそれに應當せる觀念ありと思ふべからずと。此のバークレーが論に於いて名目論は更らに其の極まれる形を取りて現れ出でたり。斯く吾人の思ひ浮ぶる所は要するに個性のものに外ならずといふ彼れの論は心理上頗る價値あるものにして是れ亦彼れがロックの論に更に一歩を進めたるものと見るべき所なり。

〔五〕 上に述べたる第一性質と第二性質との區別を除去したる論と、抽象的概念の存在を否みたる論とは是れバークレーが哲學研究の根本思想となれるものにして、之れより推究し行けばロックの哲學が如何なる點に於いてバークレーに改めらるべきかは見るに難からず。ロックの哲學に於いて其が正當の居處を占め得ざる本躰といふ觀念正さしくバークレーによりて排除せられたり。其の意に以爲へらく、本躰といふが如きものは實際吾人の思ひ浮かべ得るものに非ず、個々の相を具へたる性質とは別にして其の性質を具有するものといふが如き最も甚だしき抽象的觀念にして吾人の心を反省すれば實際其の如きものゝ吾人の觀念中に入り來たることなし、吾人の實際思ひ浮かべ得る所は種々の性質の結合に外ならず。例へば此の一脚の机につきて云はゞ、其の形、大さ、重さ、色等の一切の性質を取除きて而して後に何物の殘るべきものあらんや。知るべし此の一個の机といふは畢竟其れらの性質の相結合するに外ならざることを。而して其れらの性質は凡べて吾人の觀念なり故に個々物は畢竟するに觀念の結合なりといふべし。

〔六〕 かくの如くバークレーが本躰といふ觀念を打破したるは專ら物質的本躰と名づけらるゝものに就いて云へるなり。物躰を何ぞと問へば形を具へ空間を塡充するものと云ふの外なく、而して其れら物躰の性質は吾人の觀念に外ならざるがゆゑに、吾人の觀念以外に其の觀念とは異なりたる物躰の存在することは

承認すべからざることなり。是に於いてロックが吾人の感官を以て確實なりとはいふべからざれどもなほ外物即ち物躰の存在を知り得と說きたるところ亦バークレーに拋棄せられたり。バークレーが物躰の存在を否めるは唯ロックの立場よりせるのみならずまたデカルト學派の思想に由來せるなり。彼れ曰はく吾人の觀念とは異なりて別に物躰界ありといふは畢に不用なるものを想像するものたるのみならず、實に考ふべからざることなり、何となれば我が心の思ひとなるものは我が觀念無外に無きを以て吾人の物躰を思ひ浮かぶるや其を觀念としてより外に思ひ浮かぶること能はず然るに其の觀念によりて何故に觀念ならぬ物が思ひ浮かべらるゝか、人は觀念ならぬ物躰ありて而してそを吾人の心に寫すといふ然れども觀念ならぬものが何故に又如何にして觀念に寫さるゝを得るかと。是れデカルト學派の二元論に立ちて心物を相對せしめ而して結局物躰界を否めるものなり。以爲へらく、物躰の存在は其れが或心あるものに知覺さるゝといふことに外ならず(Esse est percipi)即ち實に存在すと云はるゝものは精神及びそれに思ひ浮かべらるゝ觀念に外ならずと。彼れは此の論を以て唯物說を其の根柢より覆すの利器と考へたり。かくて物躰の存在は知覺さるゝと云ふことゝ同一にして知覺するとを以て其の性とする心の所造となり了せり、デカルトが掲げたる心物二元の一方なる廣がれるものは遂に觀念を思ひ浮かぶるものなる他方のものゝ中に沒了せられたり。是れ即ちデカルトが重きを心自識即ち內觀的實驗に置き之れを由立點となしたることが其の二元說と相和し難くして遂に之れを打破し去りたるものなり。

〔七〕 存在すとは唯知覺さるゝの謂ひなりとは是れ物躰に就きての言にしてバークレーは心は知覺する者として存在すと考へたり即ち觀念のあると共に觀念する者ありと考へたり。此の點に於いては彼れはなほデカルトの思想を維持せるものといふべし。唯彼れは心作用を說きて、そを專ら意志の作用となし靈魂は意志なりともいへり。曰はく、吾人の思ふところのものは即ち觀念にして思ふ作用は觀念ならず、其れ即ち意志なり。意志もて活動するものゝ外に實在するものなし。故に一言にして言へば唯精神的のものゝみ活動的のものにして、唯活動するものゝみ實在するものなり。

〔八〕　かくの如くバークレーは精神的のものゝ外に凡べて實在するものなしと論じ來たれども彼れは決して全く吾人の通常所謂外界の存在を否めるにはあらず。以爲へらく吾人の俯仰して見る天地萬物は凡べて吾人の觀念に外ならざれどもなほ外界といふ觀念を吾人の思ひ浮かべ來たるは何故ぞ。若し之れを解して觀念ならぬ物躰界と云はゞ其の誤謬なることは已に前に辯じたるが如し。然れども其の如き外界といふ觀念の起こるにはまた然るべき所以なかるべからず。而して其の所以の何たるかを尋ぬるに、吾人の思ひ浮かぶる觀念の中吾人の隨意にし得ざるものあり、吾人の妄想する所のものと吾人に不隨意に起こさるゝ(所謂外物の)觀念とは區別せられざるべからず。後種の觀念は吾人の自ら造り出だせるものに非ずして寧ろ吾人に與へられたる所のものなり、故に其を與へたる原因は吾人以外に存せざるべからず(こゝ亦バークレーはデカルトに倣ひて因果律を用ひて考へたり)。而して其の原因は思考し意志する所のもの即ち精神ならざるべからず、何となれば觀念を有せざるものが吾人に觀念を與ふること能はされば なり。

而して其の原因の何たるかに關しては吾人は我が心に實驗する所より推考して其を吾人の如く精神的のものなりと見るの外他に途なし、而して斯く天地萬物として吾人の思ひ浮かべ居る觀念を吾人に與ふる原因是れ即ち神なり。吾人の俯仰して視る天地萬物は是れ神が直接に吾人に思ひ浮かべしむるところの觀念に外ならず、而して斯くする神の活動におのづから規律あるところ是れ即ち吾人が自然界の法則と名つくるものなり、吾人が自然界の出來事を亂雜ならずとして信ずるは、神の活動が理由なくして規律を亂すものにあらざるを信ずるがゆゑなり。されど充分の理由ある時に於いて神が其の活動を常規外に出でしむることあるは少しも怪訝すべきことにあらず、即ち奇蹟といふものは在り得べきものなり、何となれば自然界といふも神より離れたるものにあらずして畢竟神が直接に吾人の心に觀念を起こす其の活動に外ならざればなり。而して吾人の心に起こさるゝ其れら觀念は本來神の心に存在する永遠の觀念なり。此のゆゑに假令我れ一人の心が其の存在を失ふとも世界は之れによりて其の存在を失ふに非ず、そは唯我れの觀念として思ひ浮かぶる世界の其の存在を失ふのみ他の者の觀念として

は世界は依然として存するなり。又假令有限なる造られたる精神的のものが其の存在を失ふとも神即ち無限精神の觀念として世界は存在す。但し神をも無きものと考ふるに於いては其れ以外に如何なるものも存在する筈なきこと本より なり。かくバークレーは世に實在するものは神といふ無限精神及び神に造られたる有限精神のみなりと見たり。故に彼れの論は或は唯心論と名づけらるれども、まかいふ意味は寧ろ精神論(Spiritualism.)と解釋すべきものなり。

〔九〕 實在するものは皆精神的のものなりと說くことに於いてはバークレーとライプニッツとは其の所見を同じうすといふも不可なし。されどライプニッツの所說は凡べて明かに意識を具へ居るものをのみいふに非ず、ゆゑに精神作用と意識とを全く相合するものとして見る時は彼れの所謂モナドを形容して半ば精神的のものといふも不可なく、而して之れに對すればバークレーの云ふ所は全く精神的のものなり。無意識なる精神なしと考へたるところ是れバークレーがデカルトの說を維持せる所にして、之れに對してライプニッツ獨り新見地を開きたるなり。且つまたライプニッツは其の謂はゆるモナドの活動を以て悉く自發の作用なりとなし、バークレーは自發の開展を說かざる點に於いて二者相異なれり、蓋し本具し居るものゝ開發すといふ思想はデカルト學派に無き所、またバークレーに於いても見るべからざる所のものなり。吾人の觀る天地萬物はバークレーに從へば神の直接に吾人に與ふる觀念、ライプニッツに從へは、各モナドの自ら念ずる所に外ならず、而して各モナドの獨立に自ら念するところの相合ふ所以を說明するにはライプニッツは豫定の調和を以てしてオッカシオ論の趣を傳へたる點に於いては彼れはデカルト學派の二元論の脈を引きたるものといふべし。右二者は同じくデカルト學派の二元論の影響を受けながらバークレーは二元の一方なる物界を沒了して無限精神即ち神と有限なる吾人等の精神との間には直接に影響を及ぼすことを得と考へライプニッツはデカルト學派にて心と物とをともに本躰と見而して其の間相互に影響する所以を解し得ずと考へたる所を受けて凡そ本躰として存するものゝ間には他より影響を受くることのあるべきやうなしと思惟せるなり。デカルトに於いては神の觀念は恰も神が吾人の心に與へたる印象の如きものと認められバークレーに於いては天地萬物についての觀念は凡べて皆

神によりて與へられたるものなりと認められき。

〔一〇〕　其の說の相類似せる點に於いてバークレーと比較すべきにライプニッツなるよりも寧ろマルブランシなり。其の二者を較ぶれば同じくデカルトの二元論より出立して推究したる結論が如何に相類似せる所に到達したるかを認むることを得べし。蓋しバークレーの所說はロックの觀念論即ち其の經驗主義の思想に結べる所あるが爲めにマルブランシの所說とは一見頗る其の趣を異にせるが如きも細思すれは二者の說の如何に相類似したるかを見るは少しも難きとにあらず。マルブランシ曰はく吾人は萬物を神に於いて見ると、バークレーは曰はく吾人の見る天地萬物は神によりて與へられたる觀念にして其の模型は即ち神に於ける觀念なりと。

バークレーとマルブランシとが其思想の根底に於いて如何に親密なる關係を保ちたるかはアーサー、コリヤーがマルブランシより出立していたくバークレーの說に似通へる說を唱へたるを見ても之れを知るべし。（英國に在りてマルブランシの說を受けて之れを唱へたる人にはノリス(Norris)あり其の著書はコリヤーも之れなり知れり　コリヤー(Athur Collier　一六八〇——一七三二)はバークレーと同じく英國教會に教職を帶ひたる者にして彼れ自ら言へる所に從へは一千七百三年には已に自家の說に思ひ到れりと、且つバークレーが其の『視覺新論』を公にせる前年、彼れが自稿の一論文に其の說の述べられたるを見ればバークレーとは獨立に其の立場に到達したる者なるべし。されど彼れが一千七百十三年に公にせる『大鍵』("Clavis Universalis, or a new Inquiry after Truth, being a Demonstration of the Non-existence or Impossibility of an external world.")に說ける所は幾分バークレーの說に影響せられたる所あるが如く見ゆ。彼れ論じて曰はく吾人が現に外物を觀て知覺する所も、又吾人が曾て知覺したるものを想ひ起こすも畢竟其の間に强弱明不明の差等あるのみにて皆我が觀念に外ならず、吾人の視る世界が吾人の視るといふ心の作用を離れたる外界として存在すべき筈なし。吾人の視覺に現れたる所是れ即ち吾人の心に於ける觀念たるに外ならず吾人に見えたる世界の裏に別に見えざる知られざる世界を置くは全く不用のことなり。吾人の心の外に物界を存在するものと見るは矛盾の見に陷るを免れず、故に諸哲學者の物界に就きて說を爲すや同一の物界が或者によりては空間及び時間に於いて無際限なるもの

とせられ他の者によりては際限あるものとせらる、又或者は物界に於ける凡べての物を以て無究に分割せらるとなし、他の者は然らずとなす。畢竟ずるに觀念以外に物界の存在を說くは無用の事に屬す、唯だ神の心に於ける觀念として存在する物界を說くを要するのみと。是れ即ちマルブランシが吾人は直接に物界を知覺するとを得ず唯物界の模範として神の心に存在する永久の觀念を見ることを得るのみと云へる論の自然に到達すべき結論として即ち神の心に於ける觀念にもあらず、また吾人の心に於ける觀念にもあらざる物界を無用のものとして排除したるなり。

〔一一〕　上に開陳したる所を以ても知らるゝごとく、バークレーはロックの思想より出立して其の當に到るべき所に到らんとせる者なるが、彼れの所說はまたデカルトの所說に於いて出立點を有し居りて或處にはロックよりも尙ほ明かにデカルトに其の思想を結び付けたる趣あり、從ひてまたロックの唱へ出でたる經驗主義より一向に考察し行かば必然に到達せざるべからざる所に進むにいたらずして中途にとゞまれる點あり。彼れはロックの謂はゆる本躰の觀念を打破したれども物界ならぬ心界の方面に於いては尙ほ此の觀念を維持したりと云はざるを得ず、何となれば彼れの謂はゆる精神は唯觀念の結合にあらずして觀念する者また其を結合せしむる所以のものにして、此の點に於いてはデカルト學派が精神的本躰を說けると更に異なる所なければなり。彼れ自ら說いて曰はく、吾人の觀念は吾人の精神の作する所にして精神其の物にあらず、精神其のものに就きては吾人は觀念を有せずと。然らば如何にして精神其の物の存在を知り得るか。吾人はそを直接に知識すと彼れの云へる所もあれど、要するに此の點に於いては彼れの說ける所は甚だ明瞭ならず。且つまた彼れが因果律を取り扱ふ仕方はロックがデカルトの爲せし所に倣ひて爲したると毫も相異なる所なし、而して此の本躰及び因果の二觀念は是れ即ち究理學派の哲學組織に於ける大柱石ともいふべきものにしてロックすら又バークレーすら未だ件の究理學派の柱石を覆すに至らざりき。而してこゝに鋭利なる批評を用ひて此の二大觀念を打破せんとし、而して遂にロックの唱へ出でたる經驗主義をば其の當に到るべき究極の所に到達せしめ、又それが爲めに近世の哲學思想に甚大なる影響を與へたる者をダヰッド、ヒュームとなす。

第三十九章　ダヴィッド、ヒューム

〔一〕　ヒューム(David Hume.)は一千七百十一年四月二十六日を以てエディンボローに相應の資産ある家に生まれき。エデンィボロー大學に學び早くより文筆をもつて一世に名を學げんことを熱望し、また早くより哲學的問題に其の心を用ひて新思想を開かんと力めたるが如し。嘗てヒポコンドリーを患ひて少らく學問上の研究を廢し、後まばらく實業界に入りたれども彼れは永く畢生の名譽を得んと欲したる學問より離るゝこと能はず、やがて佛蘭西に行き靜閑なるところに居を卜して止まること四年其處にて彼れの大著『人間性情論』("Treatise of Human Nature: being an Attempt to introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects.)の著作に從事し後龍動に於いて其の第一卷及び二卷を一千七百三十九年に其の第三卷を一千七百四十年に發免せり、されど此の大著は當時世人の注意を惹かざりき。ヒューム自ら之れに就きて言へらく「此の書は活版より死して生まれたるなり、迷信家の苦情を惹き起こすの榮譽をすらも得ざりき」と。彼れは實際之れがために大いに失望し更に其の名を揚げんと欲して一千七百四十一年に其の『論集』("Essays and Treatises on Several Subjects.")第一卷を著しゝに頗る時人の注意を惹きたるを以て、彼れは一千七百四十八年より同五十二年に至るの間更に尙ほ論集の四卷を出版し、而して彼れが最初の大著に論じたる其の哲學を更に世間に發表せんが爲めに之れを改竄して論集の中に入れたり。最初の大著の第一卷("Of the Understanding")は『論集』第二卷に("Inquiry concerning Human Understanding")とせられ、前者の第二卷("Of Passions")は『論集』の第五卷に("Four Desultation of the Passions.")とせられ、前者の第三卷("Of Morals.")は『論集』第三卷に("An Inquiry concerning the Principles of Morals.")と改められたり。ヒュームみづからは其の熟成したる思想は彼れが最初の著作にあらずして後の『論集』に在りと例へれど後のヒュームを論ずるもの多くは其の論集に書き替へたるものを以て、哲學上の價値に於いて劣れりとなす。彼れが鋭利なる批評を以て從來の神學及び哲學に於ける主要なる觀念を打破したる論の中『論集』に於いては幾分微弱となり且全く省かれたるもあり。彼れが何故にしかなしゝかに就きては後人の說く所一ならざれど、畢竟彼れが前說を飜しゝにあらずして唯時人の惡意を買ふことを避け成るべく一般の讀者に入り易からしめん

と力めたるならんと考へらる。一千七百四十七年にはクレール將軍(St. Clair.)に從うて維納及びテューリンの宮廷に使しき、彼れが最初の著作を論集の中に書き更ふことに從事したるはテューリンに在りしときなり。一千七百四十九年に故國蘇格蘭にかへり一千七百五十二年にはエデンボローの辯護士會に屬したる圖書館の監督者となり廣く書籍を見るの機會を得こゝに彼れが其の『論集』によりても尙ほ其の名を弘めたる『英國史』を著せり。彼れが此著を爲すや從來史家の多く爲したるが如き唯の戰爭史たるに止まらずして風俗文學美術等凡べて社會上の情態をも叙述せり。彼れはまた一千七百五十五年に("Natural History of Religion.")を著はせり。一千七百六十三年ヘルトフォルド侯が平和條約締結の爲めにフルサイユに使したる時彼れ其の書記官としてこれに隨行し、巴里府に於いて大に學者社會の歡迎を受けルソーとも相識れり。一千七百六十七年より同六十八年にいたるまで英國政府の外交事務係として其の職を奉じ、其の後生地エデンボローに退隱して閑散なる日月を送りしが久しく病みて後一千七百七十六年八月廿五日遂に瞑す。其の著("Dialogues on Natural Religion.")は彼れの死後一千七百七十九年に出版せられたり。

(二) ヒュームにさきだちてロックが哲學の結論を感覺論(Sensualism.)の方面に引かずとしたるものあり、ピーター、ブラウン是れなり(Peter Brown.)愛蘭土人コークの監督一千七百三十五年に死す。彼れ論じて曰はく曾て感官に於いて無かりしものゝ知性に於いて存することなしといふ立場より正當に考ふれば吾人の外官を以て得るところの外に觀念の淵源といふべきものなし、吾人の心は眞實白紙の如きものにして外界に關しても其の他の何物に關しても本來具有する觀念なし、觀思の來たるべき道は唯五官によりてする者あるのみ、其の他に反相によりて原始の觀念を得といふは誤れり。吾人の知識は觀念を以て形つくられ、而して其の知識には直覺的のもの、論證的のもの、或は他人の證書に應するもの等の種類はあれども畢竟するに其の由來する所は一として感覺にあらさるはなし。但し吾人の心の狀態を自覺することは爲し得れともこは直接に其を自覺するにて觀念を以てするにはあらず故に吾人の思想力に就きては明瞭なる觀念を有せず、吾が心の作用を自覺するに正當なる意味にて知識といふべきものにあらず。されば感

官を以てするものゝ外(即ち感官以上のもの)に就きては吾人は毫も知識を有せず、其等に就きては吾人は唯比喩的に考ふるを得るのみ、此の故に神を考ふるに於いても吾人は必ず感官上の形象を假るなりと。ブラウンは斯くてロックの說を感覺論の方面に引き來たりて感官以上のものに就きては吾人は知識を有せずと說きたれどもなほ彼れは宗教上の思想に拘束せられたる所ありて其の謂はゆる比喩的に考ふるといふことを以て正當の意味にては知識といふを得ざれともなほ吾人のそれに賴るべき價値あるものなりとせり。且つ彼れは吾人は我が心の作用に就きては觀念を有せされど、なほ直接に其れを自覺することを得と云へるは其の說截然たらず。ヒュームもブラウンと同じくロックの立場より出立して其の當さに到るべき所に進ましめんとしたるものなれとも別の方面より其の說を改めんとしたるなり。

(三) ブラウンはロックの謂はゆる二つの窓の一方を捨てんことを求め反省は觀念をもつてする吾人の知識の淵源となるものならずと見たれども實は一方にそれを閉ぢ出だして他方に別異の名をもつて(觀念を以てせざれども直接に之れを自覺すといふ名稱の下に)それを容れたり。ヒュームは觀念の種類としてロックの言ひしごとく感覺より來たるものと反省より來たるものとを分かつ代りに印象(impressions)と狹義に謂ふ觀念(ideas)とを掲げたり。彼れが謂はゆる印象は凡べての感覺又は感情等の初めて吾人の心に現れたる狀態をいふ例へは机に對して机を見る如き又二つの色を見て其の差別を認むる如き又我が心に現實に悲痛悅樂を覺ゆる如き是れ皆印象の部類に屬するなり。彼れが所謂觀念は印象の影像(image)即ち其の再現したるものゝ謂ひなり。故に印象と觀念との區別は前者は其の心の狀態の如何なるかにかゝはらず、他の影像即ち他の再現として現れざる新鮮なる狀態を意味し、觀念は如何なる心の狀態にても曾て經驗したる心狀態の模寫として心に現れ來たるものを意味するなり例へば眼前に机を見るは印象なり、眼を閉ぢてふたゝび其を思ひ出だすは觀念なり。ヒュームはロックがデカルトに從ひて觀念といふ語を以て廣く吾人の心の一切の狀態を意味するものとなせるを非とし其を其の正當なる狹き意味に引き戻すを可としたり、故に彼れの謂はゆる觀念は其の想念と名づけ得べきものなり。(觀念といふ語を廣義に用ふれは觀念は

印象と想念とに分かるといふも不可なし)。彼れの所謂印象はロックの語を以て云へば其の中に感覺よりするの觀念と共にまた反省の方に屬する觀念をも含む。斯く印象と想念とを別かつものから想念は印象の模寫なれば吾人の心に於ける凡べての觀念の淵源は畢竟一なりといふべきなり。印象より來たるものゝ外に吾人に觀念の內容なし想念に思ひ浮かぶるものゝ何たるかを尋ぬれば曾て印象として心に覺したるものより取り來たる外に其の淵源あるべからず。ゆゑにヒュームは吾人の心作用に就きて印象、想念の二つを別かてど其の差別は畢竟其の强さと明かさ(force and vividness)との差異に歸するとせり。彼れ以爲へらく或少數の場合に於いては想念の印象と區別され難きほど强くまた明かなることあり、又印象が想念と區別され難きほど弱く且つ不明瞭なることあり、されども通常此の二つは吾人の惑ふことなく區別し得る所のものなりと。

〔四〕 かくのごとくヒュームは凡べて吾人の知覺する所のものを印象及び觀念(即ち想念)の二つに別かち、後者は要するに其の內容を前者より得るものとなし、而して此の心理上の見によりて其の知識論を爲したるにより、凡べて吾人が有する知識の價値は吾人の想ひ浮かぶる所が如何なる根據を印象に有し居るかによりて定まると考へたり。語を換へて言へば一見極めて抽象的なる觀念も其の本源は印象に在らざるべからず、而して吾人の知識は其の觀念の印象に合ふほど事實を示す上に於いて、確實にして印象に合はざるほど不確實なりと。是れヒュームの心理說より自然に來たる所の知識論上の根本思想といふべきなり。

斯くヒュームは印象をもつて吾人の知識上原始のものと爲したるが印象の究極原因に就きては論することをせず、印象に對する對境ありて印象は其の對境より直接に來たるものなるかはた吾人の心を以て生じ出だすものなるか、はた吾人を造りたる造化主ありて彼れより來たるものなるか、這般の問題は到底吾人の知識を以て決することを能はざるものと考へたり。ヒューム自らもことわれる如く印象といふ語は其が吾人の心に與へらるゝ仕方を表はす爲めのものにあらずして唯吾人の心に知覺したる其の物を指して謂ふなり、故に印象に對して其れとは別なる對境即ち外物を名つくるものありて其れが恰も印を紙上に捺するが如く吾人の心に其の形を印すといふ意味にて印象といふに非ず、唯吾人の知識の由來を考ふ

れば先つ最初に他の模寫或は再現とは考ふべからざる新鮮なる狀態ありて之れを印象と名つくべく、而して知識の材料は凡べて之れに求むべく吾人の研究亦之れを出立點とせざるべからず、其の背後に分け入りて其れを超絶したる、其を起こす所以のものを其の外に求むること能はずと考へたるなり。

吾人が或一物を以て實在とするの思ひも廣き意味にていふ一種の感情(feeling)に外ならず、換言すれば一印象の活き〳〵として新鮮なる(liveliness)をいふに外ならず。されば一物を存在するものと見るは畢竟するに吾人の心に於ける印象の强さを云ふなり。印象の强さを有するものとして一物を思ふと其を存在するものとして思ふとは二つのことにわらず。即ち實在又は存在といふことの觀念も元來皆印象の强さを意味せるなり。之れを要するに印象として吾人の心に浮かべらるゝ是れ即ち其が實在するものとして知らるゝなり。

唯吾人の想像に思ひ浮かぶることゝ記憶するとの區別も其れに伴ふ感情的狀態の强さに外ならず、換言すれば記憶として思ひ浮かべたるものには其を事實と信ずる感情の伴ひ居りて唯想像として思ひ浮かべたるものには其れの伴はざる點に於いて相異なるのみ。而して信ずるといふは畢竟一觀念が强き感情を以て吾人の心に現れ來たることを意味するなり。吾人の思ひ浮かぶるものゝ中一つをば唯想像として之れを信ぜず、他を事實として信ずるは後者が印象たるの强さと活き〳〵としたる所とを吾人の心に思はしむればなり。

〔五〕　吾人が印象に於いて有するものは之れに解釋を附加するとなくは直覺的に確實なるものなり。例へば今白紙の色が我が目に見ゆとせんに其の印象の內容則ち白色は之れに種々の解釋を附せずして唯白き色として知覺さるゝことに於いては聊か誤謬なし。即ち印象の內容其の物は直覺的に確實なるものなり。而して其れら印象の內容は凡べて時間及び空間に關係を爲し居るものとして知覺せらる。例へば白紙の白き色は幾何かの廣がりを成して其の一部分は他の部分に隣接し、又耳に聞く音響に時間上連續を成す。空間に於ける共在と時間に於ける繼續とは原初の印象と相離れざるものにして其の印象の吾人に覺せらるゝや時間及ひ空間に於ける或關係を以てしかせらる、故に其の共在及び繼續、換言すれば時空に於ける隣接は是れまた直覺的に確實に吾人に知覺せらるゝものなり。

されど其の直覺的に確實とせらるゝ、換言すれば其れが疑ふべからざる事實とせらるゝは決して吾人の心を離れたる有樣をいふに非ず、委しく云へは吾人の心に斯く直覺的に確實なるものとして知覺さるゝが是れ即ち其れが事實として存在するなり。

印象が時空に於ける隣接的關係の直覺さるゝのみならす印象の類同といふことまた確實に吾人に知覺さるゝものなり。例へば一の紙の色と他の紙の色とを見て其の色を相似たり或は相似ずと認むるは是れ異同の印象とも名つくへきものにして一種の印象なり(ロックの語をもつて云へは內官より來たる觀念に屬すべきものなり)而して此等異同の印象がまた吾人の知識を形づくる要素となるなり。之れを要するに吾人の知識は印象を以て出立するものにして而して印象を以て出立する所に於いて時空に於ける隣接と其の印象の類同とはおのづから吾人の知識內の事として含まれ居るなり。

〔六〕 ロックが吾人の知力の作用を云ふや本來吾人の所動的に得たる種々の觀念をば其の作用をもつて能動的に結合せしむるがごとく說きしが、ヒュームは特に知力の作用と名つくることを要するものを說かず、觀念の結合を以て全く觀念相互に相喚起し來たるの關係に歸せしめたり。是れ即ち謂はゆる聯想の規則にして、ホッブス先きに之れに着眼したりしがロックは其の言たゞ之れに觸れたることあるのみにて特に之れを用うることを爲さず、ヒュームにいたりて心理學上有力なる說明の利益としてもちひられたるなり。而してヒューム以後英國に於いては聯想律を基礎として一切の心理的現象を說かんとする學者多く出で遂に所謂聯想學派を成すにいたれり。ヒュームは聯想の規則として三ヶ條を揭けて曰はく一に類同律(Association by resemblance)即ち吾人の觀念の類似せるものが相喚起すといふこと、二に隣接律(Association by contiguity.)即ち空間及ひ時間に於いて相接近せるものゝ觀念が相喚起すといふこと、三に因果律(Association by causality.)即ち原因結果の關係をなせるものゝ觀念が相喚起すといふこと是れなり。但し仔細に推究し行けば(後に委しく論ぜん如く)三個の規則の中第三は第二に歸せしめ得べきものなれども、吾人の觀念の相聯續し來たる有樣を說くに便利なる爲め少らく之れを相別かちて揭げたるなり。

かくの如く吾人の觀念は相互の關係に從うて相聯結すると共に一觀念に伴ひ居る所の感情の狀態も亦其の觀念に結合し來たる他の觀念に移り行く傾向を有す。例へばィなる觀念に上に謂はゆる信念てふ感情の活き〳〵たる狀態が伴ひ居れりとし而して右に云へる聯想律に從ひてロなる別の觀念がィに聯結し來たる時には元來ロには伴はざりし信念の狀態がィより移りて之れに伴ふに至る。此の聯想の規則と共れに附着せる感情の擴張せらるゝ規則とは是れヒュームが依りて以て其の鋭利なる心理的分析を從來の哲學上の主要なる觀念に試みたる武器なり。

たゞしヒュームは上に掲げたる三個の聯想律は必ず吾人の觀念を支配するものなりとは云はず。又一切の觀念の聯續が皆これによりて解釋せらるべしとも云はず。吾人の觀念が必ず之れに支配せらると云はざる理由は、吾人が一物を思ひ浮かぶるに當たり注意を以て其の一觀念に住止し聯想律によりては當に誘起すべき觀念をも思ひ浮かべずして止むことあればなり。又一切の觀念の聯續を之れによりて說明し得べしと云はざる理由は吾人の觀念の出沒には頗る不規則なるものありて唯かゝる聯想律に從ふものとしてのみは考ふべからざる場合もあればなり。かくのごとくヒュームは吾人の觀念の聯想律に從はずして不規則に出沒することをも許し居るものから、吾人が心理上何等かの規則を立てゝ觀念の相結合する所以を說かんとするに於いては聯想律の外に吾人の由るべきものなしと考へたるなり。斯くしてヒュームはロックが說ける如く知力其れ自身の作用によりて吾人の觀念を結合せしむといふ代りに觀念相互の間に存する聯想律上の關係を持ち來たりて觀念以外のものに假る所なりと。是れまさしくロックが觀念を根據として心理及び知識論上の說明を爲さんと試みたる立場より當に到達すべき結論に達せるものなり。

〔七〕 上に述べたるヒュームの論據より考ふれば本躰といふ觀念が如何なる運命に遭遇すべきかは見るに難からず。本躰てふ觀念に於ては其が內容となるところのものを何等の印象の中に發見し得べき。ロックも已に云へる如く本躰其の物は吾人の智識せざるものにして其の根據となるべき印象は何處にも存せざるがゆゑに其れに應ずべき實在といふべきものなし、何となれば實在といふは前に

も云へる如く要するに印象の強く活きく〳〵としたる所に名つけたるものに外ならされはなり。一言にして云へば本躰といふものは實に存在するものに非ず。然らば吾人は何によりて其の如きものを思ふに至れるか、曰はく是れたゝ印象の結合するによりて生じ來たれるのみ。例へば茲に一の机を見んに其の色、形及び其の他吾人の机に對して得る印象の内容として吾人の心に知覺するものは凡べて空間に共在す、故に聯想律に從ひて其の一を思へばおのづから他を思ふに至る、而して其れら印象に於ける内容の共在し居ることが屢〻吾人に知覺さるゝほど其れらの聯結はいよ〳〵強くなりて其の一を思へば他を思はざるを得ざるに至る、而して遂にかゝる主觀的感情を其の物に移して其處に本躰の存在するが如くに思ふに至るなり。尚ほ語を換へて云へば茲に一の机を見るに當たりて吾人の有する種々なる印象の内容があるのみならず其れらを一つに結合せしめて維持する本躰あるが如くに考ふるは吾人の心に主觀的に生じたる觀念の結合を其の物に移して考ふるがゆゑのみ、約言すれは吾人は其の印象の内容の一を思へば他を思はざるを得ざる主觀的傾向を生するがゆゑに之れを机に移して机其の物にも其れらを結合する或一本躰の存在するが如くに想像するのみ。

ヒュームは本躰てふ觀念の批評をばたゝ物躰の上に用ひたるに止まらずして心躰即ち我といふ觀念の上にも用ひ來たれり。以爲へらく我と云ひ心躰と稱して常に心の種々なる觀念の基本となり其を統一して存在する一物あるかの如くに思ふは外物に於いて其が種々の性質を統合する基本あるが如く想像すると少しも異なることなし、外物と名つくるものに於ける本躰が印象に於いて其の内容を示し得ざるが如く、心の本躰も亦印象に於いて其の内容を示すこと能はざるものなり。我と云ひ心躰といふも畢竟するに種々なる觀念の常に結合せらるゝことの結果として吾人の想像したるものに外ならず。

吾人の意識すると意識せざるとにかゝはらず外物の不斷絶に存在するが如く思ふも畢竟一種の信念にして、其の信念は聯想の結果として吾人の想像に結び來たれるものに外ならず。例へば今眼を開けば机が印象の強さを以て活きく〳〵と吾人に知覺され、又まばらくして眼を開けば同じ強さを以て知覺さる、而してかゝる事の幾たびも繰り回さるゝ所より吾人の眼のあたり知覺せざる時に於いても其

の物を想像して其の想像に印象の活きく〳〵としたる感情的狀態即ち信念が伴ひ來たるなり。斯く外物と名つくるものも又我が心と名づくるものも畢竟ずるに印象及び想念即ち廣義に謂はゆる觀念の連續に外ならず、而して其れらをしか連續せしめ結合せしむる所以のものが其の基本となりて存在すといふが如きは唯聯想上の習慣より吾人の想像し來たるのみにして吾人の確實に知識し得べき限りにあらずと。斯く凡べてを觀念の連續と見做す上より云へばヒュームの説は唯念論と名つけらるべきものなり。是に至りて從來究理學派に於いて主要なる觀念とせられ、ロックに於いても猶ほ全くは棄てられず、バークレーにいたりても其か精神的のものを説く上に於いて保存せられたる本躰てふ觀念はヒュームにいたりて全く抛棄せられたるなり。ヒュームはバークレーが本躰てふ觀念を唯物躰の上に於いてのみ破壞したる立場より一歩を進めたるのみならず、其のごとき觀念の吾人の心に起こり來たる所以を心理的に説明して其は自然に起こり來たるべきものなれども畢竟吾人の主觀的習慣より生じたるものに外ならずと論對したる所是れ彼れの説に於いて特に見るべき所なり。かゝる説明の仕方是れ即ちヒュームが研究の最大利器なりといふも可なり。

〔八〕 以上述べ來たる所によりて見れば心物共に吾人は直覺的に其が本躰の存在を知り能はざるや明かなり、まして無限なる本躰といふが如き者は吾人の知識の範圍内に入り得べきものに非ず、吾人は到底印象を超絶して其の以上に又其の背後に出つると能はず、物躰といふも、精神といふも畢竟印象として吾人に知覺さるゝものゝ外に出でず、故に印象及び其の類同と時空に於ける其が隣接の關係との外に吾人の知識の根據となるべきものなし、其れより出づること一歩すれば其は最早や知識にあらずして寧ろ唯想像の境涯に屬するものとなる。

數學に於いては聯想律の第一規則即ち類同の關係を基礎として確實に吾人の觀念の關係を定むることを得。數學に言ふ所は數及び量の相同じき關係を見ることに出でず、而して其れら數學上時空の上に於いて異同の關係を認めらるゝ觀念は吾人の思ひ設けたるものなり、例へば直線といふも實際吾人が印象として知覺する一の線を眞實直線と見るにあらずして唯假りに直線を吾人の心に思ひ浮かぶるなり。故に數學に於いては一の線と他の線と又は一の量と他の量とが全く

相同じといふ關係を定むることを得るなり。若し印象として實際吾人の知覺するものに就きて云はゞ一の三角形と他の三角形とが其の面積に於いて全く相同じといふことを斷言し得ざるなり。之れを要するに數學は實在物の關係を定むるものに非ずして觀念相互の關係を定むるものなり、詳しく云へば一觀念として吾人の思ひ構へたるものを分析して其の中に含まれたるものを開き出だすもの(即ち命題上客語として言ひ現されたるものに於いて主語の中に含まれたるものを分析し出だす)ものなり。是れ數學に於いて說く所の如何なる場合に於いても確實なる所以なり。此の故に數學は論證的に正確なるもの、而して正當なる意味に於いて論證的學問と稱せらるべきは唯數學あるのみ。

〔九〕 吾人の知識には數學に於いて云ふが如き觀念相互の關係を認むるもののみならず又事實に關するものあり、而して事實と名づくる者は時空に連續し共在する印象以外に在るものにあらず、故に其事實を叙すといふは時空に於ける關係によりて印象を掲ぐるの謂ひに外ならず、而して斯く聯想律の第二の規則即ち隣接の關係に從うて事實を叙述したるもの是れ即ち自然界及び人類に關する學問の平叙的また實驗的なるものなり。此等事實に關する實驗的學問は論證的に論じ出だすことを得るものにあらず、此等は分析的のものにあらずして之れを命題の上に言ひ現せば其の客語は主語に附加されたるものなり、而して其の能く附加さるゝ所以を尋ぬれば唯吾人が時空に於いて隣接したるものにして若干の印象を知覺したるが故なりと答ふるの外なし。是れ其の反對のよく考へ得らるゝ所以なり。例へば太陽は明日東より上るべしといふは之れ事實上の關係を言ひ現したるものにして、其の客語は主語の中より分析し出だせるものに非ず附け加へらたれるものなり、而して其の附け加へらるゝ所以は從來太陽として吾人に知覺されたる印象と其れの東より上り來たることゝが連結したるがゆゑなり。されど其の必ず連結すべしといふ理由は吾人の思想上の關係に存在せざるがゆゑに吾人はよく其の反對を考へて、太陽を明日上らざるものとも思ふことを得。事實上の關係は此の點に於いて數學上の論證的眞理と異なりて後者は其の反對を考ふること能はざるなり。一言に云へば論理的眞理は分析的のものにして其の反對を考へんとせば矛盾に陷れども事實上の眞理は分析的ならずして其の反對

を考ふることは論理上少しも矛盾を含むことなし。

〔一〇〕　此の如く事實上の知識は論證的に確實なるものに非ず、換言すれば必然にしかあるものなりといふこと能はずして唯そが吾人の知覺する印象として兎に角或順序を以て連續し來たれりといひ得るのみ其の連續し來たることの必然なる所以を論證すること能はず、而して若し其を論證し得るものありとせば其は唯因果律ならんのみ。若し因果律を根據として考へなば啻に一現象が他の現象と相前後せりといふのみならず、其の必然に相前後すべき所以を發見し得られざるべきか。而してまさしく此の思想を根據として究理したるもの是れ則ち從來究理學派の唱道せる哲學組織なり。デカルトが神の存在を證明するや吾人に直覺的に明瞭なるものとして因果律を用ひ、ロック及ひバークレーすらも此の因果律を取り扱ふと毫も究理派の學者と異なることなく又吾人の印象以外に外界の存在(或は物界として或は心界としての存在)することを說くにもまた因果律を基とし、其の印象の原因なかるべからずといふより外界の存在を知識し得と考へたり。吾人は素より本躰を直覺的に知ると能はずとも因果律に從ひて其の存在を知ることを得と考へられざるべきか。此の因果律實に是れ唯自然の現象を平叙的又實驗的に臚列する學問より一歩を進めて事實上の知識を論證的に確實なるものとせんとする純理哲學(又は形而上學)の根據にして純理哲學の論證的に確實なるか否かは一に因果律の効力によりて懸かると云はざるべからず。然らば因果律は如何なる効力を有すべきものなるか、吾人の知識の成立上如何なる價値を有するものと認めらるべきか。之れを研究せるもの是れ即ちヒュームが哲學に於ける最も有力なる又そが後世の哲學思想に影響を與へたることの最も著大なる因果律の批評なり。

吾人は如何にして因果律を承認するか。一の因が必ず一の果を生ずといふことは吾人の直覺的に認め得ざる所なり。吾人の直覺し得る所は觀念の單純なる異同の關係と其が時空に於ける隣接の關係とのみにして一物が他を生ずといふことは其等と同樣に直覺し得べきことに非ず、又因果律は論理上論證し得べきものにもあらず、論理上の關係のみより考ふる間は甲なるものが乙なるものを生ずといふことの反對を考ふることを得べく、啻に甲乙といふ二物の特殊なるものに就

きてのみならず、因果律の一般の形(即ち凡そ因なくして物の生ずることなしといふこと)に就きても亦よく論理上は其の反對を考ふることを得。例へばこゝに一物が因なくして生じたりと見たればとて聊も論理上の矛盾を含めるにあらず(ヲルフが因果律を論理的に論證せんとしたる企圖の失敗したることは其の條下に云へるが如し)。因果の關係は分析的のものに非ず、吾人は因の中に在るものを如何に分析すればとて其の中より果を取り出だすこと能はざるなり、例へば吾人が火氣を添へて蠟の融くることを認むる時に於いても其の場合に於ける火氣といふ原因を如何に分析すればとて其の中より蠟の融くるといふ果を取り出だすこと能はず、因果の關係を言表する命題に於いては客語は主語に附加されたるものなり。故に一物の存在に次きて他物の存在することを經驗するに先だちて即ちアプリオリ(apriori)に彼れが此れを生ずといふことは吾人の認むる能はざる所なり。然らば吾人は經驗によりて因果の關係を認むるか。吾人は實に一物が生じ或は變化するに次きて他物の生じ或は變化するを見る、されど其等相互の間に相次くべき必然の關係あることは吾人の實驗する所に非ず吾人の眞實經驗することは唯だ一事一物の生起又は變化と他事他物の生起又は變化とが相次ぎて來たるといふことのみ。然るに因果律に於いて吾人の謂ふ所は一物が必ず他物を生ずといふ關係なりとすれば其の必然の關係は何處より吾人の認め得べきものなりや。吾人の確實なる經驗の範圍に止まる間は決して其の如き必然の關係を發見することを能はざるなり。斯くの如く吾人は相次ぎて起こる事物の間に必然の關係を經驗せざれども妙に吾人は一物に次ぎて一物の曾て生じたるとを認むるに止まらずして將來に於いてもまた必ず其の如き關係を以て生起し來たるべきことを豫期す、而して斯く將來を豫期する所是れ即ち吾人が因果律を思ひ浮かぶるの根據なり。然れどもかゝる豫期の如何にして生ずるかを問へば是れ畢竟ずるに聯想の結果なりと云はざるべからず、從來屢〻甲乙の二物が相次ぎて生じ又は變じたることを經驗したるがゆゑにこれが自然に習慣を成して其の一方を思へば他方を思はざるを得ざるの傾向を生じ來たる、斯くして未だ經驗せざる他の場合に於いても件の二物の同じく相次ぎて起こりたるとを思ひ浮かべ而して其の思ひに替て實際印象として等しき關係を經驗したる時の強さと明かさとが推移

し來たるを以て、其處に一種の信念を生じて今まで經驗し來たれると等しき關係が未經驗の處にも尙必ず維持せらるゝならんと思ふに到るなり。之れを要するに因果律を其の一般の形に於いて凡べて因なくして果の生ずるとなしといふも、又其の特殊の形に於いて此の一果が必然に此の一因によりて生じたりと見るも共に皆吾人の主觀的信念を根據とせるなり、事物其物の間に必然其の如き關係の存在すといふことは客觀的事實として吾人の知り得べきことに非ず。因果の關係の必然なるが如く吾人の思惟するは畢竟ずるに聯想に基ける吾人の心の習慣といふべきものなり、尙ほ語を換へて云へは本躰といふ觀念に於けるが如く吾人の心に於ける主觀的傾向を客觀に移して事物其のものにも一が他と必然に相結はり來たる關係を有するかの如くに想像するのみ。

かくの如くヒュームは因果律を批評し去りて遂に其が純理哲學上の根據たるべき價値を否み、尙ほまた吾人の意志の作用を直接に意識することに於いて原因力といふべきものを吾人の發見するが如くに唱ふるの說を駁擊せり。此のゆゑにヒュームに從へば彼れが聯想律の第三のものとして揭げたる因果の關係も畢竟するに第二律即ち隣接の關係に歸すべきものにして、唯吾人の經驗したる印象の連續即ち隣接に信念といふ主觀的感情(これ亦聯想的習慣の結果に外ならざるもの)を加へたるに過ぎず、之れを直覺的に確實なる原理とし之れに依りて印象以外に吾人の知識を擴張すべき効力はいさゝかも因果律に存在せざるなり。

〔一一〕　吾人の知識は啻に印象以外に出つると能はざるのみならず印象の範圍内に於いても上に論じたるが如く因果律は主觀的習慣に歸すべきものなるがゆゑに其の相互の關係、換言すれば印象として吾人の經驗する自然界の法則に就きても吾人は絶對に確實なる知識を有することを能はず。吾人の確實に知り得る所は唯個々の印象の直接に經驗されたる樣及び數學に於けるが如き觀念相互の關係の外に出でず。此のゆゑに一切の自然科學も其の根據は確實なる知識と云はんよりも寧ろ信念といふべきものなり。吾人の直接に一現象と一現象との隣接して起ることを經驗する以外即ち直接に吾人の經驗せざる場合に於いても同樣なる隣接の關係即ち同樣なる法則の行はるといふことは究竟すれば唯吾人がしか信ずといふことの外に出でず。吾人は理性によりて事物の關係を推究す、

といふも、所謂理性は畢竟聯想の結果として一現象を思ひ浮かぶれば他の現象を豫期することをする一種の本能の如きものに外ならず。

斯くの如く自然界に於ける現象の生起に關しては畢竟ずるに吾人は信念を有するに止まる者なれども、ヒュームは此の信念を以て吾人が實際に世に處する上の需要に取りては充分のものなりと考へ、吾人は實際上不都合なき程に確實なるものとして自然界の法則に依賴し得べしとなせり。ヒュームは純理哲學上印象以外に吾人の知識を擴め得ることを否み又本躰及び因果といふ觀念をも只主觀的習慣に基ゐするものとして其が純理哲學上の價値を否み、自然界の法則に就きても吾人の知る所は畢竟信念にして確實なる知識に非ずと云へる所より、通常彼れの說を名つけて懷疑說と云ひ來たれり。然れども、ヒュームの懷疑說は本より直接の印象と、彼れが其れと離れざるものと見たる印象の、異同の關係及び其が時空に於ける隣接の關係に對しては些少の疑をも挾まず、數學に於いて言ふが如き觀念相互の關係に就きても亦もとより疑ふことをせず、且吾人が自然界に就きて有する信念も實際生活に必要なるほどは確實なるものといふことをも否まず。蓋し彼れの學說の趣意は吾人が直接に印象として經驗することが知識の唯一の淵源にして、其れより遠ざかるに從ひて事實を知る上の知識としては益々確實ならぬものとなるといふに在るを以て其の說を名つけてポジテー非ズム (positivism)と云はゞ或は最も適當なる名稱ならんか。

〔一二〕 以上敘述し來たれる所を顧れば吾人はヒュームが思想の銳利なることを承認せざるを得ず、先きにロックによりて揭げられたる經驗主義の思想は彼れに於いて初めて其の最も單純なる又大膽なる結論に到達したるものと云はざるべからず、而してこゝに其の止まるべき所を發見する哲學者も少なからず。兎に角吾人の知識をこゝに止まるものとなし、其の範圍以外には吾人の正當なる知識と云はるべきものなしと考ふるは一種の哲學上の思想としては有力なるものと云はざるべからず。然れども、ヒュームの哲學を細思すれば吾人の思ひ起こさゞるを得ざる幾多の疑問あり、而もヒュームは此等の疑問の解釋を試みることを敢てせざりき、彼れが意蓋しこれを吾人の知識の到底解釋し得ざる所として其の說明を思ひ止まれるなり。彼れが所說に就いて吾人の更に問はざるを得ざることは第一に

彼れの所謂印象の起原なり。彼れは印象の起原に就きては更に論究することを爲さゝりき、以爲へらく吾人は到底印象を起こす所以の究極原因を探ること能はずと。例へば此處に一脚の机を見んに兎に角其が印象として吾人に經驗せられたることは確かなれども其の印象の何者の起こす所なるかはヒュームの措ひて問はざりし所なりき。且つ又彼れは頻りに聯想律を用ひ殆ど之れを以て在來の純理哲學上の觀念を打破する唯一の武器なるが如くに取り扱ひたれども彼れの說ける所よりのみ見ては何故に聯想といふが如きことのわるかを了解する能はず。彼れの立ち場よりすれば一觀念と他觀念とが相喚起すといふが如きことは却て不可思議のことなりと云はざるべからず、そは彼れの出立點は個々の印象及び個々の想念にして之れより以外のものを許さゞるが故に別々の觀念が何故に相聯結する傾向を有するかは考へ難し、是れ彼れ自ら承認する所なり。斯く個々別々の印象及び想念を以て其の出立點と爲す以上は其處に統一といふことの行はる所以を解すること能はず、故に哲學思想はヒュームに於いて一種の休息場を見出だせりといふものから、猶ほこゝにのみ止まり居ること能はざるなり。彼れが出立點の正否、是れ須からく問ふべき問題なり。彼れ以後に於いて如何に哲學思想の變遷し來たらんとするか、殊にカントがヒュームの掲げたる問題に對し更に滿足なる解釋を與へんと試みて如何なる知識論上の大潮流を起こし來たるかは後章に於いて吾人の叙述すべき所なり。

〔一三〕　上來叙述し來たれる所により知らるゝ如く英吉利に於いてロックに始まれる經驗哲學の潮流はヒュームに至りて其の頂上に達し一段落をなせり。されどロックよりヒュームに至るまでの間は英吉利に於いては學問上頗る活潑なりし時代にして以上述べ來たれる心理學上及び知識學上の研究の外尚ほ他の事柄に就ても盛に攻究せられたり。而して此の間に於いて特に吾人の注意すべきは自然科學、宗教及び道德に關する研究にして、此等が上に述べたる心理學及知識學上の動機と共に種々なる關係を成して生起し發達し來たれり（ロック及びヒューム等の論も上には專ら心理及び知識に關する方面のみを述べたり、彼等が道德上の論は別に後章に述ぶべし）。先づ次ぎに吾人の注意せんとする所は自然科學上の現象にして此の範圍に於いて最も偉大なる人物をニュートンとす。

第四十章　ニュートン

(一)

近世哲學は其の初より自然科學と疏からざる關係を有し來たりき。ジョルダノー、ブルーノーがコペルニクスの天文說を取り入れたるを初めとしてライプニッツが當時の自然科學研究の結果を多く其の哲學思想に編み込みたるに至るまで、其等の研究が哲學思想に影響したる例多きのみならず又一般哲學上の推究が翻つて科學の根本的思想及び研究法を更に遍通なるもの、更に明瞭なるものとなし來たる兩者相互の關係の疏遠ならざることは毫も見るに難からず。ケプレル及びガリオレ等によりて提出されたる物理的研究の見方がホッブス及びデカルト等によりて一般の哲學的思想の上に於いて全物界を通貫する機械的說明として掲げられたるが如きは哲學方面より自然科學の進歩及び運命に反響を及ぼしたる最も著るき例なり。斯くデカルト等が其の哲學上の立場より掲げ出でたる自然科學的研究の理想に光輝ある一大證明を與へ如何にして物質的世界なる一大機關が維持さるゝかを示したる者是れ即ちアイザック、ニュートン(Isaac Newton)なり。

(二)

ニュートンはロックに後るゝこと十年(即ち一千六百四十二年十二月二十五日)にして生まる。初め農夫となりて牛羊を牧せしが其の間にも常に學問上の事に思ひを凝らし、幼きより機械の製作等を好めりしが遂に其が生來の希望を達して學問に從事するの機會を得ケムブリッヂの大學に入りて其の學識は非常に速かに進歩したり、後久しき間該大學に在りて數學の教授たりき。其の著述の最も重要なる者は一千六百八十七年に出版せし("Principia Philospiae Naturalis Mathematica")及び一千七百四年に公にせし("Optics")なり。彼れの有名なる微分法(fluxion)の發明は一千六百六十五六年頃已に彼れの思ひ到れる所にして、其の發見の時日より云へばライプニッツに先きだてりしが世に發表したるとは彼れに後れたり。ニュートンの有名なる研究の一は光線の分析(是れ其の"Optics"に於ひて說明せし所のもの)なるが、彼れは光線其の物の說明に於いては當時の有名なる和蘭の科學者クリスチアン、ホイヘンス(Christian Huyghens)一六二九―一六九五)の振動說を受け容れずして物質的光線の發射を說き、其の發射によりて物象(Species)が腦に傳へられ、其處にて感覺器に於いて感覺の性能ある心によりて覺知せらると說けり。此の點

に於いてニュートンがホイヘンスの説を容れざりしに引きかへて引力説(即はち彼れが科學及び哲學に於いて其の重大なる地位を占むる所以のもの)に於いてはホイヘンスはニュートンの説を容れずして、却て之れを以て考ふべからざるものゝ如くに評せりき。

〔三〕 ニュートンが説きたる引力説の科學及び哲學に於いて重大の意義を有する所以の者は吾人が地上に於て見る所を物質界全体に及ぼして全宇宙を同一なる法則の下に置きたるに在り、宇宙の部分の同質なることは是に於いて最も明かに説明されたるなり。今之れに關する古來の思想を顧るに希臘に於いてはピタゴラス派の學者を初めとしてプラトーン及びアリストテレース等は天上界と地界とを相對比し二者は其の質を異にし其の完美なることに於いて前者は遙かに後者に優れるが如く考へ後に新プラトーン學派に至りては宇宙か完美なることに於いて幾多の段階を成すが如く見たりき。之れに對してストア學派は同一なる神性が萬物を通貫すといふ思想より宇宙の部分の同等なることを説くに近づきたりしか近世哲學の序幕に於いてジオルダノーブルーノーがコペルニクスの天文説を應用したるを始めとして其の後物理學の研究及びそれと密接の關係ある哲學思想の發達するに從うて終に全物界には均しき機械的法則の行はるといふ説勝を制するに至れり。而してニュートンが數學上の計算によりて同一なる重力上の法則が地上にも又天躰の間にも同樣に行はるといふことを證明するに至りては宇宙の部分を同質なるものと見るの説は茲に奪ふべからざる勝利を得たりと云ふべきなり。

〔四〕 ニュートンに從へば物界を研究する正當の方法は數學的の見方にして、數學的に考ふる是れ實に唯一の眞正なる科學的研究なり。畢竟するに是れ其の根本思想に於いてガリレオが物躰の運動を説明せんか爲に主張せし思想即ち物躰の運動を分析して其れの原因を小部分の運動の結合に歸せんとする思想を受け繼げるものに外ならず。ニュートン自らも複雜なるものを分析して單純なるものに至り結果より推して原因に至り、又個々の原因よりして一般の原因に至り運動よりして運動を起こす所以の勢力に論じ至るを以て其の研究の方針となせり。

斯くしてニュートンは數學的に物躰の運動を考ふることを以て唯一の科學的説明

と見、言を極めて中世紀哲學者の說きたる「フォルメ、スブスタンシアーレス」(formae substantiales)及び「クワリターテス、オックルテ」(qualitates occultae.)を排擊し、其れら事物の相因又は隱微の性質といふ如きものを以ては物界の現象の起こる所以を說明するに足らずとなせり。然るにニュートンが引力といふが如きものを說けるは是れまさしく物質の相引くといふ如き不可思議なる性質を說きたるものにあらずやと疑ひたる人もあり。然れども彼れかゝ引力を說きたるは其の自ら說明せる所を以ても明かなるが如く、唯物躰の運動する現象を言ひ現せるのみにて、決して其をしかする原因を引力(attratio)といふ言語にて言ひ現せるにはあらず。物躰の相近よる原因を考ふるに於いてはニュートンは一物躰を離るゝに從ひて濃くなる所のエーテル的物質の存在を假定して說かんとせり、即ち彼れは全く空隙を隔てゝ一物が他物に働くといふことを考へ得られざることゝなし、引力といふものゝある所以は遂に物質の衝擊(impulsus.)を以て說かんとしたるなり。されど其の謂ふエーテル的物質も本より一の臆說として提出せるに過ぎずして要するに引力の原因には論じ入らざりしなり。

〔五〕 物界を全く機械的に考ふるとはニュートンの心に於いては宇宙全躰を造化主の所作と見ることゝ全く調和したり。目的觀と機械觀とを調和せんとすることがライプニッツの哲學の一大目的なりしことは已に云へりし所の如くなるが、ロックの友人にして原子論を化學に入れて其の學に新時期を開きし有名なる化學者ロバート、ボイル (Robert Boyle. 一六二六—一六九一)また化學上宇宙を一の機械と見ることを容し且盛に學術研究の自由を主張したると共に又熱心に智性ある造物主の存在を主張し、宇宙なる機關は其れを造り其れに最初の動力を與へたる者の存在を示すと唱へて無神論及び非目的說を排擊せり、即ちボイルの意見にても科學上の機械說と宇宙全躰を目的觀の上より見ることゝは決して相衝突するものにあらずとなし其の原子といふ觀念を入れて科學上の說明を爲さんとしたるも是唯研究上の方便にして哲學的世界觀を言ひ現せるものに非ずと考へたり。ニュートン亦宇宙の構造に意匠の現れ居りて、天躰の配置及び宇宙全躰の構造が其の偶然にして成り上がれるものに非ずを示し、且つ天躰の運動は初め之れに運動を與へたる者の存在を示し(若し初めに物躰に運動の與へらるゝことなくば遊星

は引力に從ひて太陽に合躰し居るへき筈なりとし)殊に有機物の構造は目的を具へて作爲する造化主の存在を證明すと考へたり。

然れども天躰の調和は全く完全なるものとなり居るに非ずして慧星遊星との關係より不規則なる運動を生じ來たることあり。而して其れが爲めに天躰の間に破壞を來たさざらん爲めには神は時々に直接に其れらの不規則なる關係を矯正するを要すと考へざるべからず。斯くニュートンが宇宙の調和は自然に全く完全なるものに非ずして時々外より神力の干渉するを要するが如く考へたる點に對し、ライプニッツは痛く之れを攻擊して是れ恰も造化主の作爲を以て下手なる時計師が時計を作れる後に屢〻其を修復せざるを得ざると同一視するものなりと云ひ、而してニュートンの弟子クラークは之に對してニュートンを辯護せり。

〔六〕 ライプニッツとクラークとは又空間の論に就きても相爭ひライプニッツが空間を以て唯吾人の感官の漠然たる見樣なりと說けるに對しクラークはニュートンが唱へたる絕對的空間の說を保持せり。ニュートン以爲らく吾人か感官上の時間空間及び場所は凡べて唯關係的のものに外ならず、通俗の見に從へば凡べて此等を以て眞實なる者となせども其等は決して究極的に實眞なるものにあらず。若し眞實に運動、即ち惰性の規則に從ひてありとすべき底の運動の存在せんには唯他に對する關係にのみかゝれるものにあらずして、其れ自身に存在する絕對の空間又絕對の時間なかるべからず、絕對に動かざる場所(ローカー、プリマリア、locaprimaria)なくしては遂に事物の存在を定むること能はず、其れら絕對の場所は其れ自身に於けるの場所にして又それが標準となりて凡べての場所を定め得るものならざるべからず、而して其の如き絕對の場所は吾人の感官の能く吾人に示す所にあらず一言に云へは眞實の空間及び眞實の時間は吾人の數學的に考定する空間及び時間なりと。斯くしてニュートンは數學上抽象して考へざるべからざるものを以て實在を示すものと考へ學理上に於いては五官の示す所に止まらず、數學上の假定を推究して其處に事物の眞實の相を發見せざるべからずと考へたるなり。斯く彼れが空間其の物を以て絕對に存在するものと見たる點に於いてニュートンの說は嚮きにヘンリー、モーアが非物質なる空間の說をなし、廣がりしといふことを以て物躰の特徵となさずして寧ろ之れを障碍の性に求めたることに合せ

り。且つ又ニュートンはヘンリーモーア等のプラトーン學者と共に此の非物質なる空間を以て直に神がよりて以て凡べての物を知覺するの機關と見たり、換言すれば空間は神の有せる無際限又平等なる感覺器にして神は之れによりて宇宙間の如何なる所に起こる事柄をも直に知覺すと考へたるなり。

第四十一章　ディズム

〔一〕　ニュートンの世界觀は彼れに特殊なる新說と云にはあらねど其の彼れが偉大なる自然科學上の研究に結び附けて說かれたるの故を以て英國に於いても又歐洲大陸に於いても大なる影響を時の學問界に與へ而して彼れが此の世界觀はディズムと名つくる當時有力なりし一種の宗敎觀の理論的根據をなせり。此の宗敎觀に從へば世界は一つの機械にして其の機械は其を造れる者の存在を示し其が偶然に生じたるものにあらずして神智の所造なることを證明するものなり。又以爲へらく世界が一旦神によりて造られたる以上は神は世界以外に在りて外より之れを照覽するに止まりて常に力を世界に添へ居るに非ず、世界は其の機械作用によりて自ら其の働きを繼續し行くものなりと。此のディズムでふ宗敎觀は十八世紀に於いては大に英國に勢力を振ひしのみならず、一般歐洲大陸に於いてもかゝる思想は盛に行はれたり。ディスト(Deist)でふ語は十六世紀頃に用ひ初められしものとおぼしく元と無神論者に對して唯おぼらかに神の存在を信ずる者に名つけたる名稱なりしが其の後敎會の神學者等が又ティスト(theist)といふ語を用ふることゝなれるよりおのづからディスト、ティスト二語の間に區別を生ずることゝなり、前者は世界を創造したる神ありといふことを信ずれども、一旦造られたる以上は世界は其の定められたる所に從うて自ら動き行くと見るものを指し、後者は神は常に人事及び其の他宇宙の事に直接にたづさはりて其の攝理を行ふと信ずるものを意味することゝなれり。

〔二〕　ディスト風の思想の行はれ來たれる原因を考ふれば深く當時に至る迄の宗敎界の變動に起因せるものにしてディストなるものは其の一般の原因より生まれ來たれる風潮の一つの最も著るき結果と見るべきものなり。宗敎革命以後其れに引き續きたる三十年戰爭を初めとして諸々の宗敎上の動搖、宗義に關する論爭及び宗派の嫉妬等時を追うて甚だしく遂に心ある者は其れらの爭ひに倦

み果てそを嫌惡するの情を生じて寧ろ宗義の差別を輕視するの氣風を釀し來たれり。ボスエー(Bossuet)及びライプニッツが教會の一致策を講ぜるが如きまた教會內の人にはあらざるもスピノーザが信教の自由を唱へ、ロックが其の自由なる基督教思想の立場に在りて宗教上の寛容を主張したるが如き是れ皆區々たる宗派の區別の上に出でんことを要求するの傾向を示すものにあらざるはなし。而して此の傾向の結果として一つには凡て宗旨上の差別に冷淡なる種類の人々を生じ(例へば英國に於いてはラティチュディナリアン(Latitudinorean.)の如き即ち是れなり)、又一つには宗義上理論的の事を重んぜずして專ら實際上の信仰と實行とを貴ぶ人々を生じ(此等の人々は已にスピノーザの時に於いて和蘭にありき、又獨逸に於いて此の種類の運動の最も成功せしはピエティストなり)また右の二者とも異なりて宗教をば吾人の理性を以て認め得る普遍の基礎の上に置き謂はゆる自然宗教を以て唯一の眞正の宗教即ち眞正の基督教となして、其の他一切種々の宗派及び宗旨に附着し居る不必要なる、又迷信に基する樣々の信仰個條及び儀式を拋擲せんとを求めたる人々あり。彼等は吾人の自然に具ふる所の光(Lumen naturale.)即ち理性によりて知り得ることの外宗教上に於いても吾人の正當に承認すべきものなしと唱へたり、即ち一言に云へば彼等は合理的宗教を唱へたるなり而してディスト、は此の部類に屬する者なり。

嚮きにロックは中世紀哲學に於けるトマス風の見方を繼續して超理と背理とを區別し天啓を以て吾人が自然の知識を補ふものと見たりき(而してかく見ることに於いてはライプニッツもヂルフも大躰上其の意見を同じうせり)、然れどもロックは更に明かに吾人の理性の外に天啓の信ずべき所以を示すものあらずとし、吾人の理性を以て天啓たることの充分の道理を發見し得べからざるものは眞正の天啓にあらずとしたれば、畢竟するに宗教上の信仰もまた吾人の理性の範圍內に在るものとせられざるべからず。ロックの此の思想を追うて宗教上の事を更に明かに合理的方面に進めなば是れ取りも直さずディスト等の主張する所に到るなり。

〔三〕 かゝる宗教思想の合理的傾向はソシニアン派(法律家なりしレーリウス、ソシーヌス Laelius Socinus 一五二五—一五六二)及び其の甥ファウストゥス、ソシーヌス(Faustus Socinus 一五三九—一六〇四)によりて創められし派にして二人共に伊太利に生まる)の神學說に於いて明かに進みたるを見る。此派の學者は以爲へらく吾人の理性を以て了解すべか

らざることが天啓によりて吾人に示さるべくもあらず、吾人が何を天啓として承認すべきかは唯理性によりて判ずるを得るのみと。斯くて彼れ等は三位一躰の宗義及び基督を神の化身なりといふが如き信仰個條を排斥し神は唯一にして基督は人間の神聖なる者なりと唱へたり。されど彼れ等は敢て天啓の必要を否めるにはあらず。彼れ等に從へば天啓は決して吾人に究理上の眞理を示さんが爲めのものに非ず、其の關する事柄は全く學理上のものと異なり。宗教の特質は其が吾人に對して律法を掲ぐることにあり、神の吾人に示す所のものは哲學的世界觀にあらずして吾人の行爲の規律なり故に宗教を奉ずといふは畢竟するに神が示せる行爲の規律に從ふの謂ひにして理論上或宗義を承認するの謂ひにもあらねば、また唯道德上の氣質を云ふにもあらず神によりて示されたる凡べての戒律を實行するにあり。斯く法律的に宗教を見たる所是れソシニアン派の主唱に於ける特殊の點なり。

〔四〕 英吉利に於いてディスト風の思想は十七世紀の前半に於いて已に早くロールド、ハーバート (Lord Herbert. 一五八一—一六四八)によりて唱へられたり。

彼れは宗教上吾人の信ずべきことを理性の指示に認め又吾人の行ふべきことを道德上の事柄に認めたり。以爲へらく萬人には共通なる觀念(Notitiae Communes.)あり而して吾人の思考及び觀察は凡べて此れ等の根本觀念に從うて始めて其の用を爲すべき者なり、若し吾人の生具したる而して直接に吾人に發見され承認さるゝ其れら若干の原理なくば吾人は一切の事物を推究すること能はず(ロックが生得の觀念なる論ずたるは一つには此等ハーバート等の所說に對せるなり)然れば即ち吾人の生得したる性能が自然に吾人をして眞理を了解せしめ又善を目的とする道德的行爲に進ましむと云ふべし、而して宗教てふものは此處に其の基礎を有するなり。理性を有すると宗教を有するとは決して相離るべきことにあらず、揑まゝに己が心を喑まし居る者にあらざるよりは何人と雖も理性の示す所の宗教を承認せざるを得ざるべしと。ハーバートは其の謂ふ理性の示す所の宗教の要旨に五箇條ありとして掲げて曰はく(第一)世に至高至大のもの即ち神の存在すること(第二)吾人は其のものを敬ふべきこと(第三)而して敬神の要は德行と相離れざること(第四)吾人はおのづから罪惡を嫌惡し從ひて一切の罪業を悔悟すべきものと知り居ること(第五)神は善にして且つ義なるもの

なるがゆゑに吾人は自ら行ひたる善惡業に從ひ後生に於いて賞罰せらるべきと是れなり。ハーバートは件の五箇條を以て如何なる時代の如何なる人民にも凡べて承認せらるべきものとなし而してこれより以外の事は畢竟するに僧侶の造り設けたる若しくは哲學者等の附け加へたるものに外ならずと見たり。一言に て云へば彼れは世に至善至正なる神ありとし而して吾人の神に對する關係を專ら道德的に考へて神に事ふるの要旨は畢竟するに德行に在りと見たるなり。彼れの唱へたる所是れ既に英國に於けるディスト等の主張したる根本思想を明示せり。

〔五〕 第十八世紀に於いて英吉利にディストの運動を起こし、最初の人にして且此の徒の中にては哲學史上最も注意するの價値ある者としてはヂョン、トーランド(John Toland. 一千六百七十年愛蘭に生まれ一千七百二十二年に死す)を掲げざる可らず。トーランドの時初めて英國に於いて此の徒を呼ぶに自由思想家(free Thinker)といふ名稱を以てせるを見る蓋し此れ等の人々は敎會及び其の他の權力(authority)を以て定めたるものより、離れて須からく自由に宗敎上のことを考へ得べしと主張したればなり。而して斯く敎權に從はずして自由に考ふるは是れ取りも直さず吾人各〻が自然に具ふる理性に從うて考ふるなり。トーランドはロックが如何なることの果たして天啓なるかを定むるは吾人の理性の範圍内のことなりと云へる說に根據し該の說の正當の結果として(但しロック自らはトーランドの結論を承認せざりしかども)唱へて曰はく宗敎上吾人の承認すべきとは全く合理的のことならざるべからず、背理のことは云ふに及はず超理のことゝ雖も亦眞正の宗敎の中に存在すべき筈なし、眞實基督敎に說ける所には毫も不可思議なるものなしと。是れトーランドが其の著"Christianity not Mysterious."(「基督敎は不可思議ならず」)に於いて述べたる趣意なり。彼れに從へば天啓は吾人を敎ふるの方法にして吾人が信仰の根據にあらず、吾人の之れを信仰する所以は我が理性を以て其れの充分の信ぜらるべき理由を發見するに在り、奇蹟といふ如きものも亦決して不可思議のものにあらず、唯神が時に自然の法則をして通常の範圍以外に出でしめたるのみにして通常以外言ひ換ふれば自然以外のことは必しも超理のことに非ず。また神の深奥なる性躰は吾人の探り得べからざる所なりとするも是れ亦別

に奇妙なることにあらず、そは此くの如きに是れ皆に神のみにあらざればなり、吾人の常に萬物に就きて知る所も亦唯其が現れたる性質に外ならざるなり。之れを要するに唯僧侶及び學者が基督教をして不可思議なるものとならしめたるのみと。トーランドの説く所は當時甚だしく教會及び有司に嫌悪せられて其の著書の焼き棄てられたるのみならず、愛蘭議會の一議員の如きは著者をも焼かんことを欲したるほどなりき。

トーランドは後に歐洲大陸に渡りてハンノーフェル朝廷の厚遇を受け其處にてライプニッツと會せることあり。彼れが一千七百四年に公にしたる『セレーナに贈れる書翰』("Letters to Serena".是れ即ち普漏士王妃ソフィー、シャルロットSophie Scharlotte.に贈るに擬したるもの)は哲學上の意見としては彼れが著書の中に於いて最も見るべきものなり。彼れ其の中に論じて曰はくスピノーザの説を以て運動の存在する所以を説明すること能はず、運動は廣がり及び障礙の性と共に等しく物質に本來具はれるものと見ざるべからず、動くといふことは物躰の性にして吾人の五官に一物躰の靜止するが如く見ゆるは反對の運動が相妨げ居れる狀態に外ならず、物躰に差別の存するは其れを組織する部分が種々の運動を爲すがゆゑにして運動是れ即ち物躰に於ける差別の基因なりと。斯くの如く運動を以て物躰其の物に具はる性なりと見だれど、トーランドは決して造化主の存在を否まず、却て物躰を動くものとして造り且つ其の運動を支配するものなくては宇宙に整然たる秩序のある所以、殊に有機物の生じたる所以を解すべからずと考へたり。彼れが晩年の著書『パンティスティコン』("Pantheisticon".千七百二十年出版)に於いては其の謂ふ造化主即ち神をば天地萬物に在りて常に活動する大勢力と同視し神と世界とは實際相離れて存在するものにあらず、唯吾人の思考上之れを區別し得るのみと説けり。而してかくの如き世界觀を有する者をパンティスト(Pantheist.萬有神説を唱ふる者)と名つけ、(此の名稱は實に初めてトーランドによりて用ひられたるなり)其れらの人々の團躰を理想的に描けり。トーランドは其の著述の收入により一時其の生計の安きを得たれど、後に至りては再び甚だしき困窮に陷り其の晩年を貧窶と病苦との中に送れり。

〔六〕 思想上より云へば當時ディスト等の唱へたる所には特に新しき者又哲

學上價値ありといふべきものを見ず、彼等の言ふ所は概ねトーランドの所說を多少開發するほどのことに止まれりき。こゝに當時のディストとして有名なる三四の人物を掲げんに、アンソニー、コリンス(Anthony Collins. 一六七六—一七二九)の一千七百十三年に出版せる其の著『自由思考論』("Discourse of Free Thinking.) に於いて自由思想の見を主張しまた通常豫言を基礎としたる證據論を排斥せるあり、トマス、ウールストン(Thomas Woolston. 一六六九—一七二九)の其の著『救世主の奇蹟に就きての論』("Seven Discourses on the miracles of our Saviour" 一七二七—一七二九)に於いて奇蹟を基礎としたる證據論を排斥せるあり。マッシュース、チィンダル(Matthews Tindal 一六五六—一七三)は其の著『創世の古より在りし基督敎』("Christianity as old as the Creation" 一七三〇)に於いて自然宗敎即ち吾人が理性の示す所に全く合し居る宗敎は吾人の原初に於いて己に有せし所のものにして其れ以外歷史上の變遷に從ひて制定したる宗敎(Positive religions)は後世造り設けたるものにして宗敎の純粹なる精髓を失へるものなり、而して基督敎(即ち眞に基督の說きたる敎)は再び原始の眞正の宗敎に復歸したるものに外ならず、然るに其の後敎會の敎へたる基督敎はまた後世僧侶等の作り設けたる種々の事柄を附加せるものにして純粹の基督敎にあらずと唱へたり。即ち彼れに取りては自然宗敎は萬人の均しく理性を以て承認し得べきものなるのみならず、そはまた原初のものなり、蓋し自然といひ原初といひ眞正といふことをば全く同一不二のものとなし、それより以外のものは皆故意に造り設けたるものに外ならずと見て之れを排斥するとはディスト所說の一方面として彼れに於いて大に明かになれり。トマス、モルガン(Thomas Morgan)は宗敎の眞正なること即ち其が眞に神より出でたることを知るの標準は唯道德上の眞理にかなふことに在りとする思想に根據して舊約書が果たして此の標準に合ふか否かにつきて批評を試みたり。トマス、チャップ Thomas Chubb. 一六七九—一七四七は身を職人の社會に起こして一千七百三十八年に『基督の眞福音』("True Gospel of Christ.")を著し其の思想を彼れが同業の仲間に擴げディスト運動をして一般人民の中に入らしめんと力めたり。蓋しディズムは其の初めに當たりては或一部の學者間に唱へられたるに止まり殊にトーランドの論の如きは學者的なるを失はざりしが チャップ に至りて大に通俗的運動となりて其の研說を一般人民

の間に傳播せんことを力めたるなり。

かくディストが其の思想を一般人民の間にまでも布及せんとするに至るやロールド、ボリンブローク(Lord Bolingbroke. 一六九八—七五一)は之れを非とせり。但し彼れ自らは凡べて教會の造り設けたる教義を以て唯哲學的空想に出でたるもの又は僧侶の假構に起因したるものと考へたれども、其は須からく唯有識の人のみの懐くべき見識にして一般人民に教ふべきものにあらず、一般人民には宜しく通俗の教會的宗教を教ふべきものにして是れ即ち彼等を治むる正當の途なりと考へたり。

〔七〕 ボリンブロークはディストを駁擊したれども彼れ自身の信仰とディストの所說とは敢て相反せるにも非ざりきと考へらるゝが彼れとは異なりてディストに對して神學上正面より攻擊を加へたる者當時甚だ多かりき。監督バークレーの如きも大にディストを駁擊せる一人なり。蓋し彼れの宗教心の深厚なりしやニュートン及びディスト等と共に神と世界との關係を考へて恰も時計師の時計に於けるが如く見るを以て滿足せず、更に直接に更に深邃なる關係の神と世界及び吾人との間に存することを主張せり。

ディスト等の所說に對する反對論は頗る多かりきと雖も思想上特に吾人の注意を價するは監督バトラー(Bishop Butler.)が其名著"Analogy of Religion Natural and Bevealep, to the Constitution and Course of Nature"(一千七百三十六年に出版)に論じたる所なり。彼れ論じて曰へらく、天啓の宗教(即ち通常教會の教ふる宗義)に向かひて提出し得べき非難の重要なるものはまた能く自然宗教の信仰に向かひても提出せらるべし。人或は神が救はるべきものを選び而して其の選擇に漏れたる者は永久の刑罰を受くといふを以て非理なることゝなさん、然れども此くの如きは自然界に於いて吾人の常に認むる所ならずや、例へば無數の動植物の動子が失はれて唯其の一小部分のみが生育するが如き或は人間に於いては吾人の實際に見る所によれば唯少數のものゝみ道德上充分の發達を遂げ得るが如き、其の他のものは皆選擇に漏れたるが如きものと見られざるべからず。人或は贖罪の宗義を非難せん、然れども罪なき者が罪ある者に代はりて苦艱を受くると是れ實に世間の常態にあらずや。故に吾人若し天啓的宗教の教義を疑はゝ之れと同じき理由により

て自然界が神によりて造られ又支配さるゝことを疑ふを得べしと。而してバトラル自らは之れを説明して畢竟吾人は何れの方面より見るもよく全躰を達觀すること能はざるがゆゑに其の如き理論上の困難に遭遇すと考へ道理上も又道德上も宗教上の信仰に處るを以て最も安全なるとせり。

〔八〕 バトラル等の批評よりも更によくディズムの弱點を見且其れを超脱せるはヒュームの宗教論なり蓋しヒュームの説く所はディスト風の思想の絶頂に達せるものなると共に又よく其れを超越せるものなり。ディスト等の宗教を論ずるや專ら理性を根據となし而してかく只管に理性を據處とする唯理的傾向に於いてはデルフ學派と相似たり。而して彼等は漸々に其の唯理的傾向を進め行きて奇蹟にも自然的説明を與へ又宗教上説かるゝ凡べての奇怪なる不可思議なる事柄は皆後世の揑造に出でたるものと斷言するに至りき。但し彼等の宗教論は一つには深き宗教的感情を缺きたるを以て彼等の説く所によりては宗教が如何なる力を以て人心の根底を動かすかの邊を充分に了解すると能はず又一つには彼等は全く歴史的眼光を缺きたるを以て從ひて原初より存在せし眞正の宗教ならぬものは皆僧侶或は有司の揑造せるものと見たるのみにて眞に自然の歴史的發達といふものを了解せず。彼等の謂ふところ自然は萬人に通じて原初より在りしものといふこと以外の意義を容れず。件の歴史上の見解に於いてはヒュームの説く所能くディストが所論の弱點を指摘して其が立脚地以上に出でたるものと謂ひつべし即ちヒュームは宗教が吾人の心理的作用に從うて歴史上の變遷發達を爲せる次第を研究せんと試みたるなり。

ヒューム論じて曰へらく道理上宗教の根本を探究して其れが吾人の理性を以て承認せらるべきものなるか否かを見ると其れが自然に起こり來たれる次第を見るとは全く別論なり換言すれば理論上の根據と生起上の根據とは混同すべからざるものなり。宗教は自然に人間社會に起こり來たれるものなれども其れが自然に起これりといふことは吾人の理性によりて立てられたりといふとは異なり。宗教は理性によりて起こるよりも寧ろ希望、恐怖、驚愕、失望等其の他天然が吾人に與ふる災害等の恐るべきものによりて吾人に起こさるゝ感情及び其れ等天然の作用を人に擬して考ふる吾人の一種の心理的傾向によりて起されたるものなり。

故に宗教の原始の狀態はディストの謂ふが如く高等なる合理的のものに非ず、一神教にあらずして寧ろ下等なる多神教なり、唯吾人が思想作用の進むに從ひて宗教上の事をも思索考察するに至り其を合理的ならしめんとするが故に下等なる狀態より漸次に高等なるものに進歩し行くのみ。然れども宗教上の發達も亦唯だ理性を以て吾人の推究する所にのみ原因するものに非ず、これには他の種々の因緣の結合し來たるものあるが故に、一旦高等なる一神教に達せる上にも尙ほ常に精神的に高尙に考ふる傾向と有形的に卑近に考ふる傾向との間に徘徊すること多し。宗教の起因斯くの如くなるが故に世に謂ふ宗教には種々雜多なる感想混入して或は高尙なるあり或は下卑なるあり或は清潔なるあり或は猥褻なるあり。實際の宗教は決して單に合理的のものにもあらねばまた單に道德的のものにもあらず。

大躰より云へば吾人の知識の進歩するに從ひて益〻宗教より不合理の要素を削除し行くべし。奇蹟の信仰の如きものも亦終に道理上充分の根據を有すと云ふことを得ざるなり。ヒュームが有名なる奇蹟論の要旨に曰はく奇蹟が眞實に世に行はれたりといふことの立し得られんには何人かの證言によらさるべからず、而して如何なる場合に於いて其の證言が奇蹟の事實なることを證するに足るかと云ふに其の證言の過まれりと云ふことが證せらるべき奇蹟に勝りて奇蹟たるべき時にのみ限る、そは奇蹟を容るべきか證言を過まれりとすべきかは孰れか能く吾人の經驗に合ふかによりて決するの外なければなり。而して經驗の示す自然の法則に從うて考ふれば奇蹟を以て實際に起こりたるものとなすよりも寧ろ證人の言を誤まれりとする方遙に承認し易し。證人の言を過まれりとすることの何故に非なるかと云へばそれが吾人の經驗の示す自然の事相に戻ればなるべし。而してヒューム自らは證言の誤れることが奇蹟其のものに勝りたる奇蹟と見らるべきほどに確實なる證言は提出され難しと考へたり。

斯くヒュームは其の著『宗教自然史』("Natural History of Religion.")に於いて宗教の歷史的發達を論じたり、而して彼れが宗教の道理上の根據を論じたるは其の著『宗教對話篇』("Dialogues on Religion.")なり。此の對話篇に於いて彼れは一方に在りては世界に現はれたる調和秩序より推して其を偶然に出來たるものに非ずとし、智惠ある

造化主の存在を信ずることの全く理由なきことにあらざるを說くが如く見ゆると共に、又他方には之れに對して幾多の非難の點を掲けたり。曰はく世界には調和あり秩序ありとするも其が意匠の原因は世界以外に在らずして其れ自身の中に存在すと見られさるに非ず、又恰も諸物を幾度も造り直して後終に美麗なるものを出來すが如く宇宙はそれ自らに具はる作用によりて幾度も形成し破壞した る後漸く現に見る如き秩序の成りたるものなるかも知るべからず。且又有意の作用は唯吾人の如き限りある者の作用として實驗するに止まるのみ其を直に宇宙全躰に及ぼして宇宙が心意あるものゝ活動によりて出で來たれるか如く考へんは充分の根據なきことにあらずや、尙ほ詳に言へば唯吾人等限りある者に於いて心作用を認めたるより推して直に天地萬物全躰に亘りて其を造りたる有心有意の原因あるが如く思ふは、吾人自らを他に移して天上の雲にも吾人の象を認むると同樣なる心理的作用に基けるものにあらずや。又吾人が實際經驗する所に從へば此の世界は決して完美なるものと云ふべからず、實際幾多の不善なることの行はるゝあり、されは之れより推しては完全なる原因の存在することを充分に論證するに足らず。また若し現世に於いて是非善惡充分に區別せられて是は明かに是とせられ非は誤ることなく非とせられなば來世を說くべき充分の根據なかるべく、若し又現世に於いて正義の充分に行はるゝことなくば此の世界が義しき神に造られたりといふ充分の根據なし。畢竟吾人の實驗する所は唯だ一局部の事柄に止まりて、其れより推して全躰の原因を問ふべき充分のいはれなく、又況して其の原因を以て智惠あり完全なる德を具ふる者となすべき充分の根據なしと。彼れはかくの如く世界に現るゝ意匠より推して神の存在を說くの說を批評せり。今ヒューム自らが宗敎に對する眞實の意見を察するに哲學上にては、彼れは上に述べたるか如き理由を以て神の存在に對しては壞疑の立場を取るを正當と考へたるならん。然れども彼れは決して神の存在を全く否めるにはあらずして寧ろ常識ある者の天地萬物を見て自然に其を造化せる者の存するが如く考ふるは哲學上より見れば本より確實の智識といふことを得ざれども常識上の信仰としては許すべきものなりと見たるらしく考へらる。